

545-10

忠臣藏文庫

郷庭篁村校訂

大正書局藏

東京博文館藏版



文藝叢書發刊之辭

文藝の人に於ける、其の性情を薰染し、其の氣習を陶鑄す。功もこよ
り妙少にあらず。目するに閑を消し、心を娛ましむるの書を以てし
て而して之を輕んず可からざる也。聖代泰平、文運隆昌、本館今茲文
藝叢書第一期出版十二卷を發行す。外觀はたゞ賞を士女に求むる
が如し。雖も微意いさゝか補を風教に添へんと欲するなり。是に
於て、鑑裁を諸先生に仰ぎ、近古文藝の中に就き、精を取り、粗を舍き
趣多くして弊少きものを蒐め、刊す。校字は嚴密を期して、魯魚の衍
無きを必し、用紙は佳良を極め、破損の虞に遠ざらんを希ふ。印刷
の鮮明より、裝釘の縝緊に至るまで、皆一々心を用ゐる意を致し、實質

けたる草雙紙まで世に行はれたり、此書の著者は初代爲永春水なれども開は四編十二卷までにして五編以下は悉く二世爲永春水の代作なり、二世春水は本名染崎延房といひ宗對島守の藩士にして若きより文才あり、爲永春水の門に入りて師の爲に補作する事多く、明治七八年頃より東京繪入新聞の記者たり、其の性質溫厚謹直にて絶て狂訓亭門下たるの體なし、然れども其文章は艶麗にて初代春水にも優れり、明治十九年九月六十四歳にて歿す、校訂者親しく染崎氏より、いろは文庫は五編より自作にて師の名を假りしのみなりとの事を聞きて大に駭きたるが、初代春水の物には此のいろは文庫のみならず弟子の代作多しといふ、此逸話をいかに聞き違へたるにや、いろは文庫は全然染崎延房氏の作なりと記したるものあれど、いろは文庫初篇は天保七年申歲に出で、此時染崎氏十四歳なり、いかに早熟の才なりとて人情本を綴るべくもあらず、且つ五編まではたしかに初代爲永春水の筆致にして、五編に至りてはじめて其趣きかはり、文段生硬にて語句よく調は

ざるところもあり、五編六編あたりは染崎氏にもあらで他の代作かと思はる、節もあり、出版年月確かに知りがたけれど、染崎氏二十歳前後の時なるべきか、予が耳にも五編よりとは聞きしが、其の年月は知らず、今おもへば遺憾の事なりし、讀者よく讀味ひて初代二代の作意文章を分たば、是また讀者の一樂なるべし。

忠臣水滸傳

山東京傳作

忠臣藏を骨子として其の趣きを水滸傳に擬したる作にして繪入讀本十冊、寛政十年の出版なり、此ころ水滸傳大に行はれ、綾足の「本朝水滸傳」はじめ「日本水滸傳」「女水滸傳」など繪入讀本に將た黄表紙に水滸傳の趣向を取る事多かりしかば、京傳は骨を忠臣藏に取り體を水滸傳に假り、口繪と唱ふる巻頭の挿畫も北尾重政にあつらへて唐本繪像の形に似せ、巻中の義士の應答問對すべて水滸傳の口調にならひ、依々戀々として袂を別つといふ類の語

を用ひて好評を博したり、此作出で、ますく忠臣蔵の流行を盛んならしめたりといふ、たとへば京橋といふべきを洛陽橋と書き、銀座を南朱提街など唐めかして、作者京傳此時三十八歳なりしが、それも醒世老人など書始めたり、また京傳は書は此の北尾重政に學びて北尾政演と號す、黄表紙などには自畫の作多くあり。

假名手本忠臣蔵

寛元辰八月
大坂竹本座興行

此外題の忠臣蔵の事はいろは文庫の解題にある如く、四十七士をいろは附にせしよりいろは藏に取りて「忠臣蔵」とは付けしなり、竹田出雲傑作中ことに名作にて、赤穂義士仇討のこと此淨るりの作より海内に弘まり、赤穂義士の事は知らずとも、津々浦々に至るまで「忠臣蔵」の名を知らざる者はあらず、此作ありしよりして何々「忠臣蔵」と付けまた單に「忠臣」とのみ被せて義士仇討の傳記を仕組し淨瑠璃および芝居狂言おびたいしく終に「忠藏類聚」の大

部纂輯あるに至りたり、此作の名譽竹田出雲一人にて荷ひたれど、這は合作にて並木千柳三好松洛および出雲の子小出雲等割普請の如く場割を請取りて筆をとりしなり、傳へて云ふ、出雲千柳松洛相はかりて切腹場を三つ立て判官切腹勘平切腹本藏手負と三人別々に趣向を撰みしなりと、文段の上より見ればいかさま左る差別あれど、一體の趣向を立し出雲の功を第一とすべし、其の作意の評および作者苦心の事は近松東南の著したる「忠臣蔵岡目評判」の一書あり、忠臣蔵皮肉論ともいふ一斑を窺ふべし、またいろは評林あり、忠臣蔵を芝居に仕組みたる前後および役々の評を集む芝居道にて獨參湯の稱ありし其の偉力影響おもふべし、竹田出雲は機關師竹田近江の子にして操芝居の座元たり、近松門左衛門に作意を學びて松田和吉と合弟子たり、はじめは作ごとに門左衛門の添削をうけしが、門左衛門死後は多く松田和吉と同作なり、出雲は千前軒と號す、千日前の意なり、和吉は文耕堂と號す、文章は文耕堂すぐれたれども、趣向は千前軒を妙とす、ことに悴小出雲ま

た文才ありて父を助けたれば所謂竹本劇として當今にまでもてはやさるる作は出雲に多し、父竹田近江は機關師にして芝居興行座元たり、其子作者にして座元を兼ね、其孫また作者として三世續きしは珍しき事なり、しかして近松門左衛門死後、やゝ衰運にむかひし竹本座を盛り返したるは此の忠臣藏の作に由る、されば淨るり及び演劇の上にはもつとも卓絶したるものといふべし。

四十七石忠箭計

河竹默阿彌作

一名「忠臣藏十二時」

明治四年十月守田座の爲に河竹新七立作者として新作せしものなり、義士が吉良邸へ討入りの刻限を十二時に割り刻々時の迫るところに一種見物の氣を引付ける妙趣ありて好評大入なりし、此時の俳優河原崎權之助は即ち九代目市川團十郎にて高の師直由良之助、三郎、小林平八郎、哥叙翰の五

役を勤めたり、其の他仲藏紫若後に岩井半四郎、中村翫雀、現今の中村鴈次郎の實父、左團次(先代)等にて中にも翫雀の戸田の局、小汐田又之丞、評よく、左團次の小山田庄左衛門は殊更に出世藝の中にも擧べきものにて、此作全部登場せざる時も小山田變心の伴のみ度々舞臺に出で、喝采を博したり、これ必竟河竹新七(後に默阿彌)の作の妙のみならず、能く俳優の人物伎藝を見て其の長所に役々を箝めて活動させしに依るところなり。

明治四十五年七月

饗庭篁村識

卷之六

第十一回 (十郎左衛門お住に別る事) : : : : : 五〇
第十二回 (杉谷中之丞の事) : : : : : 五五

第三編

卷之七

第十三回 (師直判官へ遺恨の事) : : : : : 六〇
第十四回 (立林唯七母の事) : : : : : 六四

卷之八

第十五回 (仲垣支蔵の事) : : : : : 七〇
第十六回 (芝多伊左衛門の事) : : : : : 七四

卷之九

第十七回 (仲垣支蔵兄へ記念を贈る事) : : : : : 七九
第十八回 (義士等變名の事) : : : : : 八三

第四編

卷之十

第十九回 (お輕の事) : : : : : 九一
第二十回 (原本何故か二十回を設けず)
(義士龜純屋へ會合の事) : : : : : 一〇一

卷之十一

第二十二回 (由良之助書狀) : : : : : 一〇九
第二十三回 (小林平八郎の事) : : : : : 一四

卷之十二

第二十四回 (原本二十四回を設けざること第二十回と同じ)

第五編

卷之十三

第二十五回 (赤城へ早打引つゞく事) : : : : : 一三三
第二十六回 (不破並向島の事) : : : : : 一三七

卷之十四

第二十七回 (片岡傳五右衛門の事) : : : : : 一三一
第二十八回 (二人元助の事) : : : : : 一三六

卷之十五

第二十九回 (茅野早水の事) : : : : : 一四一
第三十回 (風間親子の事) : : : : : 一四五

第六編

卷之十六

第三十一回 (仇討異説の事) : : : : : 一五一
第三十二回 (森胡平太妻の事) : : : : : 一五五

卷之十七

第三十三回 (高田軍兵衛の事) : : : : : 一六〇
第三十四回 (醫師蝶庵の事) : : : : : 一六二

卷之十八

第三十五回 (鹽谷家斷絶の異説) : : : : : 一七〇
第三十六回 (森胡平太の事) : : : : : 一七三

第七編

卷之十九

第三十七回 (胡平太お民に逢ふ事) : : : : : 一七九
第三十八回 (里見十郎左衛門の事) : : : : : 一八三

卷之二十

第三十九回 (胡平太歸國の事) : : : : : 一八七
第四十回 (胡平太校童を斬らんとする事) : : : : : 一九〇

卷之二十一

第四十一回 (お民義士の引上を見る事) : : : : : 一九五
第四十二回 (胡平太圓覺寺に赴く事) : : : : : 一九九

第八編

第九編

卷之三十二	第四十三回	(お民胡平太を追ひ行く事)	二〇五
	第四十四回	(胡平太切腹の事)	二〇九
卷之三十三	第四十五回	(大星清左衛門の事)	二一四
	第四十六回	(淺田藤内婿を構む事)	二一八
卷之三十四	第四十七回	(清左衛門武術修行に赴く事)	二二三
	第四十八回	(清左衛門三度綾女と仕合の事)	二二六
卷之三十五	第四十九回	(清左衛門綾女を撮ること)	二三二
	第五十回	(佐々木家中茶道流行の事)	二三五
卷之三十六	第五十一回	(清左衛門鹽谷の家來となる事)	二四一
	第五十二回	(牛尾田主水の事)	二四五
卷之三十七	第五十三回	(主水有馬に赴く事)	二四九
	第五十四回	(下奴七助の事)	二五四
第十編			
卷之三十八	第五十五回	(浪崎宮内の事)	二五九
	第五十六回	(七助反り討の事)	二六三
卷之三十九	第五十七回	(主水沼澤を討つ事)	二六八
	第五十八回	(袖岡新之丞の事)	二七二
卷之三十	第五十九回	(二刀齋新之丞を助くる事)	二七八
	第六十回	(曲者二刀齋を襲ふ事)	二八三

第十一編

卷之三十一	第六十一回	(新之丞最期の事)	二八八
	第六十二回	(太閤品藏通和野入平の事)	二九二
卷之三十二	第六十三回	(松下二刀齋立合の事)	二九七
	第六十四回	(若村寒助の事)	三〇一
卷之三十三	第六十五回	(荻野左内の事)	三〇五
	第六十六回	(寒助荻野家を立退く事)	三〇九

第十二編

卷之三十四	第六十七回	(荻野娘お冬の事)	三一四
	第六十八回	(寒助番置の事)	三一八
卷之三十五	第六十九回	(下奴市助注進の事)	三二三
	第七十回	(相原江助呉服屋を始むる事)	三二七
卷之三十六	第七十一回	(倉橋全助の事)	三三二
	第七十二回	(高利屋お蘭の事)	三三七

第十三編

卷之三十七	第七十三回	(倉橋全助お蘭に取入る事)	三四二
	第七十四回	(お蘭全助を挑む事)	三四六
卷之三十八	第七十五回	(青柳橋小羅の事)	三五〇
	第七十六回	(小羅問者となる事)	三五四

卷之三十九

第七十七回 (由良之助遊蕩の事) : : : : : 三五八
第七十八回 (師直の問者大星を襲ふ事) : : : : : 三六二

第十四編

卷之四十

第七十九回 (由良之助神文を返す事) : : : : : 三六八
第八十回 (十内綱五郎の事) : : : : : 三七二

卷之四十一

第八十一回 (原郷右衛門の事) : : : : : 三七七
第八十二回 (郷右衛門の母自害の事) : : : : : 三八一

卷之四十二

第八十三回 (大星力彌の事) : : : : : 三八六
第八十四回 (問者お針の事) : : : : : 三九一

第十五編

卷之四十三

第八十五回 (若黨孫右衛門の事) : : : : : 三九六
第八十六回 (召仕お捨の事) : : : : : 三九九

卷之四十四

第八十七回 (大星關東へ下る事) : : : : : 四〇五
第八十八回 (鎮寺十内書狀の事) : : : : : 四一一

卷之四十五

第八十九回 (由良之助書狀の事) : : : : : 四一四
第九十回 (八百屋傳八密書持参の事) : : : : : 四一八

第十六編

卷之四十六

第九十一回 (倉橋全助密書を奪ふ事) : : : : : 四二四
第九十二回 (全助書狀を變造する事) : : : : : 四二八

卷之四十七

第九十三回 (傳八注進を仕損ずる事) : : : : : 四三一
第九十四回 (近松諫六の事) : : : : : 四三四

卷之四十八

第九十五回 (唄女小露の事) : : : : : 四四一
第九十六回 (下奴甚三郎の事) : : : : : 四四五

第十七編

卷之四十九

第九十七回 (只七安平近松を訪ふ事) : : : : : 四五〇
第九十八回 (松原左仲の事) : : : : : 四五四

卷之五十

第九十九回 (服部右内の事) : : : : : 四五九
第一百回 (右内宗伴と改名の事) : : : : : 四六三

卷之五十一

第一百一回 (瀧治郎の事) : : : : : 四六八
第一百二回 (越野寸白の事) : : : : : 四七二

第十八編

卷之五十二

第一百三回 (寸白の妻おヒの事) : : : : : 四七七
第一百四回 (宗伴娘お糸の事) : : : : : 四八〇

卷之五十三

第一百五回 (宗伴瀧治郎を釣る事) : : : : : 四八六
第一百六回 (初雲の茶會の事) : : : : : 四八九

卷之五十四

第一百七回 (瀧治郎附文の事) : : : : : 四九四
第一百八回 (寸白取持の事) : : : : : 四九七

忠臣水滸傳

前編

第一回	夢窓國師祈禱天災 高階師直誤走衆星	五〇六
第二回	妍姫差謎襲衣箱 鹽廷尉誤入白虎廳	五一六
第三回	桃井侯大關足柄山 郡衛門夜渡天龍川	五二四
第四回	鹽谷龍馬三鞭千里 寺岡神行一脚百步	五三六
第五回	貞九郎剪徑得蒙汗藥 賀古川監押送金銀擔	五五〇
第六回	韓平寓山崎售肉包 千崎過西岡殺野猪	五六六
第七回	奪密書係兒死節 擲銀兒大星示號	五八六

後編

第八回	重太郎月夜會武藏 戸雄瀬雪天關土兵	六〇二
第九回	本藏短笛吹別鶴曲 力彌長槍得雪佛頌	六一五
第十回	島寺袖卷戀義士 天川屋拳打屠兒	六三二
第十一回	大星琵琶湖大聚義 兼好國見山夢降石	六四八

假名手本忠臣藏

第一	（編夕岡の段）	六五九
第二	（桃井館の段）	六六二
第三	（喧嘩場の段）	六六七
第四	（判官切腹の段）	六七五
第五	（二つ玉の段）	六八〇
第六	（勘平内の段）	六八五
第七	（茶屋場の段）	六九三

第 八	(道行旅路嫁入)	...	七〇三
第 九	(山科の段)	...	七〇四
第 十	(天河屋の段)	...	七一四
第 十 一	(討入の段)	...	七二四

四十七石忠箭計

一名忠臣蔵十二時

序 幕	高輪八山下の場	...	七三〇
二 幕 目	本庄野菜店の場	...	七四九
三 幕 目	高館庭茶室の場	...	七七〇
四 幕 目	葉泉院第舎の場	...	七七六
五 幕 目	麴町御流頭の場	...	七九九
六 幕 目	番場菘菰居の場	...	八一七

七 幕 目	高土太眞殿の場	...	八四六
八 幕 目	刺下水小橋の場	...	八五四
九 幕 目	飯田街借家の場	...	八六三
十 幕 目	義士黨夜討の場	...	八七八

總目録終



伊呂波文庫の叙

金樓子曰、有レ人讀レ書把レ卷即睡因呼ニ書卷爲ニ黃
 嬾一怡神養レ性如ニ乳媪一也、されば書を讀むを添乳と
 云ふ、しかれども睡るといふ書に二品あるべし、亦睡人
 に二情あらん歟、それ書中の美談佳境に惚れて、神を
 遊ばしめ後に悠々と睡らば、以て添乳の功と爲すべし、
 予が著す草紙の如きは、其佳談なるもの稀なれば、讀人
 倦勞されて終に睡る、是は出もせぬ乳をねぶりて、怒泣
 なから寐るの類とせんか、今こゝに著す所の伊呂波文庫
 は、さらに巧拙の論を待たず、世にしられたる忠臣の銘
 銘傳なれば、いまたやうやくいろはを覺えし兒女童幼も、
 其忠烈を見て俄然と睡を醒さんと思ふのみ。

于時天保申年如月義名再三輝くの日

江戸 爲永春水老人誌

正史 いろいろは文庫 卷之一

狂訓亭主人 爲 永春水 著

第一回 小山田庄左衛門並直助權兵衛の傳

讀賣商人「敵討の次第を御覽じろく、古今稀なる敵討の次第、是は此度鹽谷家の浪人四十七騎、高野家へ夜討をいたし、主君の敵を討取つたる次第を御覽じろ。上下にては詳細明細 あきんど」「これは此たび先々御評判の敵討の次第ト呼立て歩行商人の、聲を聞くより此處の軒、彼處の家より立出て、買人はさらに競ひつ、我勝にこそ求めける、忠臣義士も幸不幸、適れ人に劣らじと、思ひ詰めたる金鐵の、心も蕩ける色欲の、たゞりぞするとなりけらし、爰に小山田庄左衛門の父重兵衛と聞えしは、既に齡も傾きて、八十一歳の老衰と、なりけるのみか病氣ゆる、連判状にはもれたれども、心は變らぬ忠義の魂、我子庄左衛門のけなげにも、頼がひある勇烈の、義心たゆまず會盟の、中と思へば勇ましく、其身の病氣もうちわすれ、今賣來りし夜討の次第、義士の姓名記したる、番附買うて膝のうへ、幾度となく繰返し、始終を讀下せど、我子の名前あらざれば、さても不思議と獨言 重「エ、ちらもない、龜相なものを仰山に賣り歩ける、大

星氏も一方の、手當と頼みし庄左衛門、其名などを書き漏すやうな不詮穿、これが何で詳細明細、特の名目を書きおとすくらゐでは、當にはならぬ反古同前トつぶやく門の戸押しあけて、入來る隣の小間物屋、これも齡は六十のうへを、こして隠居の合口とて、遠慮もせず立ちながら 小「モシ重兵衛さん、おはなしの一件を、最う板行にして賣りに來ました、イヤ御不自由のお身でも、それをば早速買はッしやいましたか 重「オ、小兵衛さんお出なされたか、今これと呼込んで買ひましたが、紛らはいやうに思はれますテ 小「なる程左様でござりませう、何をいうても一昨日、イヤ前一昨日のことを、今日賣りに來るのぢやから、どうで違つた事はかりでござりませう、それをばまた見ませぬが、特小三郎がお出入するお屋敷から、寫して參つたこの書附、しかも二軒のお大名で、お書留になつたのをうつして持つて來ましたといふを聞くより重兵衛は、我子の名前あらざるを、心にかけてる連名書、うろたへ眼に手をさし出し 重「イヤそれはかたじけなく、ドレ引合して見ませうト三枚ならえて人數をかぞへ、略して記せし働き次第を、讀めど小山田とも、庄左衛門とも記してなければ、もし老眼の看損じかと、眼鏡の曇をふく袖も、涙のしめりには霞む、文字もおぼろとなりけり、小兵衛も膝をすり寄せて 小「モン重兵衛さん、おまへの素性をしりませねば、御息さまの本名も、またろく〜に聞きませぬが、一昨日はじめて敵討の、噂とともに承れば、御息さまも同意の忠義と、お明しなされた大事の本望、近所の衆へもはなしまして、陰ながらおまへのよろこび、さぞかしと賞めもいたせば、御老年の御心細さを、お察し申して種々お噂いたしますが、此連名の何れが御息さまのお名でござりますな、兎てものことに御實名を 重「さればサ、私もコレ是がと、おはなし申すが樂ゆる、幾度となく繰りかへして、見れども見えぬ我子の姓名 小「ナニ〜無いことはご

ざりますまい、何と記してござるやら、若旦那の御本名は「サア實名は小山田庄左衛門」小「エイ、アノ小山田庄左衛門どのとへ」重「ハテ仰山な御あいさつ、悴の名前が何といたしました、是には漏れてをるけれど、若討死の沙汰でもござりますかな」小「イヤ左様ではござりませぬが」重「イヤ〜どうか譯ある御様子、もしや悴のその噂を、お聞きなされた事もござらば、善悪ともにコレ此親父へ」小「イエ何も取留めたことを聞きはしませぬがトいふ折節に裏口を、そろ〜あけて飴賣商人、以前は重兵衛親子のために、仕はれたりし中間五助」五「旦那さま、今日は御病氣はどうでござりますな」重「オ、五助か、寒いのによく精が出るな、しかし寒さで思ふ様に渡世も出来まい、イヤそれはさうと此度の一件、世間の噂を聞きやツたかトいへば五助は生得が、たらぬ魯鈍の正直もの、前後遠慮もあらばこそ」五「エ、殿さまの仇を討たツしやるとて、四十七人勢揃して、高野師直の屋敷へ夜討のお手柄、噂のやうなものではござりませぬ、丁度私が金會木まで手紙使にたのまれて、踏つて來るとむかうから、敵の首を取圍んで、引きあげてござる勇ましき、日本始まって聞き及ばぬ忠臣ぢや、義士ぢや英雄ぢやと往來もとまるくらゐ、いやモウ大さうな評判でござります」重「ヤレ〜それはマア、其方は行向つて家中の衆を、一々見たとは、幸な事ぢや、何れも働の次第もあるが、今にわからぬ悴の様子、どの様ななりで御菩提所へ引きあげる風情であつた、手疵でもおうたか、どうであつた、定めて其方は言葉をかけたであらうな」五「さればの事でござります、御存じの通り、私も臆病ものではござりますが、それと聞くより若旦那も大かた一味と心付きまして、こは〜ながら間近く走寄り、庄左衛門さまがござるか、先手の衆や押へのお方、一々見ても若旦那がござらぬゆゑ、どうした事かと思議にぞんじて、まご〜する中ゆき過ぎさツしやる、跡からおくられて只一人、大驚文吾さ

まが鎧を杖にしてお出なされましたゆゑ、小山田さまはと聞きましたら、いつも下々へやさしい旦那、わしをござらうじて、オ、重兵衛どの、御家來五助か、旦那の御病氣は少しも快いか、八十歳を越された老人、さぞ難澁してござらう、しかし忠義のお人ぢやから、今度討手に加はらぬを、残念にも思はれやうと、いはれで行過ぎさツしやるから、亦追ひかけて庄左衛門さまはと聞きましたれば、十二日の日に連中へ割付け配る三百兩、圓覺寺へ納める亡君の御遺物、其二品を請けとつて、心變か其儘出奔、さすが命はをしいもの、重兵衛どのが聞かれたら、さぞ無念に思はれやうが、是非ともしれる庄左衛門が臆病、他より聞いたら猶面目を失はれやう、其方よろしく老人の、氣をなぐさめて進せやれと、言捨てして大星さまの、跡追つかけてお出なされましたが、若旦那は此方へ御沙汰はござりませぬかト聞いて驚く重兵衛忠久、面を赤くまた青く、齒莖をかみしめ拳をにぎり、しばらく言葉もなかりしが、小兵衛も何とあいさつの、ならねば其座の氣の毒さ、これもものさへ言はざりしが、やう〜に」小「イヤ〜斯いふ時にはいろ〜な説をいふもの、また宜い御沙汰がござりませうト詮方なしの捨言葉、そこ〜にこそ歸りゆく、跡に重兵衛溜息を、つく〜思ひめぐらすに、我子の變心相違あるまじ、さもなき事なら三方四方で、書留められし連名は、一字もたがはぬ四十七騎、小山田とも庄左衛門とも、しるさるは欲に心の亂れてより、出奔せしにうたがひなし、とも知らずして仇討の、噂を聞くより自慢して、我からあかせし我子の名氏、いふかひもなき恥かしさ、今をも知れぬ老の身も、存命へられぬ面目を、死なすは言わけあるまじと、思ひ詰めたる重兵衛が、心のそこを哀れなり、五助はたらぬ男ゆゑ、いふ事いうて立歸る、隣は例の小間物屋、寄りあつまりし人々の、噂もおなじ敵討、とり〜はなす其中に、かねて聞きたる小山田の、はなしをこそ〜さ

さやきて、思はず隣の壁の方を、見かへる時しも壁越に、ぐざと貫く白刃の切先、これはと大勢立ちさわ
ぎ、おどろく中に此家の小兵衛、重兵衛かたへ駈行きて、見ればこはそも何ごとぞ、彼重兵衛は床の上に、
腹切りかけて切れざりしや、壁にもたれて咽を貫き、その切先が小兵衛のかたへ、突きぬけたるにてあり
けるなり、小兵衛は駈寄り見たれども、さすがは心掛ある老人、病のために弱れども、經穴を突きたる事
なれば、苦つうもなさで死したるは、壯年剛氣の勇士にも、さらにおとらぬ最期なり、かたへに歿す書おさ
有りて、

君の御爲に仇を報じ死を致し候事珍らしからず候へども、老惚れ候心より愚息庄左衛門之
儀人ケ間敷御吹聴申上候處、今日に至り畜類にもおとり候噂、亡君に對し恐入り候のみ
か、各へ無面目、せめては片時之死を差急ぎ候、老病之心外薄命之程よろしく御見察被
下、死後之御厄介何卒頼上候。

十二月廿日

小山田重兵衛

近隣之御方々様

かゝる一書を留めしかば、小兵衛をはじめ近所の人々、その心根を不便に思ひ、また庄左衛門が不忠不孝を
かたりつたへて、にくみつ、此事を公朝へ訴へたてまつりて、それぐの御さしづにまかせ、跡念頃に用ひ
けるとぞ。

かゝる忠義の子と生れし庄左衛門が變心は、いかなるゆゑぞそのことは、次の條下を讀み得てしるべ
し。

第二回

再説小山田庄左衛門は、大星の下知に隨ひ、御菩提所圓覺寺にいたり、それより同意の諸士へ金子を配當
し、買物借財の拂、又妻子等の扶助になさせんと三百兩を渡され、これを懐中して大佛堂町といふ所ま
で往きかゝりしが、雪氣催す嚴寒の、身にしみぐと冷えとほる、寒さ凌ぎの酒機嫌、捨てはて、身はな
きものと明日はなる、覺悟の眼にも世の中の、戀は曲者惡業に、落ちいる時節が行さきへ十七八の島田鬘、
姿も意氣な處女の出立、庄左衛門は其後より、よくく看れば過ぎし頃、しかも彌生の上旬、媒人あり
て妻にせんと、既に相談整ひて、吉辰選む其中に、御家の大變ちりちりと、なりての後は音沙汰も、絶え
たる縁の彼女子に、似たとはおろかもし其かと、足をはやめて先へ抜け、振りかへり見る娘の貌、兼て女
房と約束せし、人に戀らぬ面ざしにて、また一段の美麗なり、女も風と眼を見合せ、はづかしさうに親そ
むけ、小褙とる手もやさかたに、散らつく雪よりなほ白き、はぎに湯巻の紅縮緬、もゆる思か戀風の、ぞ
つと素足に駒下駄や、心の手綱庄左衛門、ゆるむも因果惡縁か、放れておなじ路すちを、三丁ばかり歩行
し所に、こゝなる町家の中ばごろ、立派といふにはあらねども、また常ならぬ家ありて、三間間口を二
間の黒塀、一間の間にくゞりの格子戸、四尺の沓脱二尺の箱段、塀の内なる小庭には、見越の松のふりも
よく、はき出し二階に二方縁、手摺に竹の細工あり、二方の障子をたてたれば、内の造作主人の心、其善惡

はわからねど、俗眼をもつて見る時は、まづ羨まじき住居なり、娘はこゝの格子戸を、明けて宅にぞ入りにける、戀ひ來りし庄左衛門は、手に持ちしものをとられしごとく、茫然としてイめば、折しも二階に絲竹の音色やさしき合奏、たが妻琴か調子よく、しらべの間に鶯の、なく音にまさる女の物ごし、惚々として聞ゆれば、心亂る、庄左衛門、胸に勝手な思案ごと、「ア、世の中といふものはおつなものだ、同じ世界におなじ人で、節季しらすの琴三味線、おもしろさうに遊んでくらし、美人揃の喜見城、それに引きかへ此方は、月日をかさねた此辛苦、大願成就といふ日になれば、討死するか腹を切るかと、明日明後日に定まる命、夢にたとへた一生も、別してはかない夢だナアトつぶやく門口格子戸を、あけて内より立出るは、三十歳ばかりの女房の白色くして艶容なるが、浴衣を下女にかゝへさせ、出合がしらに庄左衛門と貌見合せ

女房「オヤ庄さんと呼びかけられて庄左衛門」庄「イヤこれはお珍らしい、まづ其後は」女「アレマアどちらへト言ひながら格子戸より奥の方へ向ひ」女「モシエ〜ちよつと」幸主「オイ〜何だ」女「アノ小山田の庄さんが見えなさいましたといふ聲きいて立出る、この家の主も鹽谷の浪人、以前は鎌倉屋敷の金役に、御家の變を幸に、紛らしたる多分の金子、それを元手に遊藝の、女を抱へて料理屋の酌取女に通はして、其花代を取るを業となし、また内々金を貸して利分を重くし、今は豊にくらしつゝ、實名玉蟲辨右衛門を、玉村榮次と假名して、この所には隠れしなり」榮「イヤこりや珍らしい庄さう、どうしたのだ、コレサ、マア此方へ」庄「これは〜玉蟲氏、一別以來まづ御堅勝で」女「アレマアかたツくるしいね〜」サア〜マア此方へあがなせへ、ハテサなせそんなに遠慮するだらう、外ぢやアねへおらが宅だア、サア〜何だ草鞋か、胸當脚絆柄袋、まるで飛脚といふ形だのト言ひながら奥の方へ聲をかける」榮「オイ〜其鹽へ銅壺

の湯をもつて來な」庄「イエ〜左様いたしては居られませんが、今日はチト急用で、諸方へ廻らねばなりませんから、ハテサ野暮な事をいふせ、此寒いのにマア〜久しぶりだ、有合の着で、ちよつと一口元氣をつけて往きなせへ、御門限を案じる身分でもあるめへ、また浪人ぢやアねへか馬鹿〜しい、サア〜情をこはくしねへで此方へ來なせへト無理に足を洗はせる、所へ見初めし娘は手拭をもち來り「アノこれでおふきなさいまし、ドレ私がふいてあげませう」庄「イエ〜どういたして勿體ない」私風情ではおみあしへ際つてもばちがあたりますのかへト莞爾わらふ、此時庄左衛門は胸ドキ〜（女房は庄左衛門をすゝめてさしきへやり）女「それぢやア庄さんお遊びなさいヨ、ちよつと湯へ往つてまゐるから」庄「へい〜御ゆるりとト（いひながら主とともにさしきへいたる）」サアヨだれぞ火鉢の際へ、これはしたり遠慮はいらねへ、サアこゝへ、ヤレ〜けて鍋焼か平でもこしらへな、サア〜火鉢の際へ、これはしたり遠慮はいらねへ、サアこゝへ、ヤレ〜久しくあはなんだネ、時に嚴重な形で何處へ出かけるつもりだ」庄「へいチト遠方へよんどころなくといふ所へ酒肴出る」庄「これは〜ぞんじがけない御馳走を、誠にこれでは」マア其様に堅くるしくしねへで、あぐらでもかきなせへト是より盃の數もかさなり、二人とも機嫌になりて」榮「オイ〜お安や〜ト（よべばかのむすめ返事をしながら來る）」「オイ手めへ庄さんに酌をしてあげな」安「ハイ今お吸物をもつてまゐりましたからト勝手へ行く」榮「どうだ、あの女を女房にしてやる氣はねへか、まんざらな山出でもねへせ」庄「エへ、浪人しちやア、其様な元氣はございません」浪人だから勸めるのだア、其大小さへ捨てりやア直に相談が出来るせ」庄「それは兎ても不及ねへ事だが、おまへの身のうへは實に羨ましい事だネ、不躰ながら何が御活業で此様に賑やかにおくらしなさるか、人も働のあるとねへでは、大さうな遣だねへ、

どうすれば斯立派にしておもしろくして居られるか 榮「コウくそれがせまい了簡と云ふものだ。鹽谷の家
 中で居るときは、首や尻がつかへるけれど、浪人すりやア天井抜、何所へ遠慮もいらねへから、少し元手を
 おろして看ませへ、忽ち金が子を産むはなトはなしの中に女房お冬も湯より歸りて俱々に、さへつ押へつ
 酒もりに、時刻うつれば庄左衛門、さすが血判同列の、誓にもる、はづかしと、思へば形容を正しうして
 庄「イヤ存外の御馳走千萬の仕合、失禮ながらおいとま申して、 榮「これサく庄こう、たとへ何の用が
 あるにもしろ、今ツから何處へ往かれるものかトいひつゝ、立つて縁畑の障子を明け 榮「そりや此けしきを御
 覽じろ、只一面の銀世界、この眞白な家根を見たら、腰を落ちつけてもよからうちやアねへか 庄「イヤア
 つの間にか大雪になりましたネ、しかし今夜は平間村まで 榮「コウく、その用向も大略承知だが、餘程
 わり了簡だせ 庄「エ何がエ 榮「コレ高くはいはねへが、貴公の用といふは一味のものへ 庄「エ、 榮「どう
 だびツくりするか、成程そりやア主従の中ちやア忠義といふやうなもの、君の心と家來の心とちがつ
 てゐては何にもならねへ、コレよく考へて見な、亡君の高野氏を切つて捨てと思ひこまれたは、天下の爲
 に極々の忠義、他に難義をかけさせて權威をふるふ師直を、うしなはんとせらるゝ始から、家をも身をも
 お捨てなされて、鎌倉どのへ誠義の眞忠、討損しても自から、高野もちかごろ不首尾の噂、これぞ亡君の
 御本意と申すもの、法にそむいて浪人の仇うちなんぞと徒黨を催し、一味をかたらひ討ちも仕様が、上へ
 のおそれ亡君へかへつて不忠、それより面々が時節をまつて、何卒浪人の活業にも、利分をかながへ金銀を
 たくはへ、それを執權の方々へ手づかひして、亡君の御舍弟さまを再度お召出に成る様に、願ふが忠義の極
 意ぢやアあるまいか、御治世をまかへり見す、物さわがしくしたならば、亡君の御本意にそむくのみか、御

本家御一門へまで、おとがめが懸つたら、御先祖へも不忠となるせ、第一公へはぶかりなく、一味徒黨の御
 とがめの、子孫にまでかゝる道理だ、勘辨しやれト解きつけられ、元來心の亂れた小口、佞辯奸智の得手
 勝手を、尤らしく聞きなして、亦盃をかさねる時しも、はや入相の鐘の音の、陰々ところ響きける、か
 かる所へかのお安は、一際美々しく化粧をなし、庄左衛門が側に座し、心をつけてもてなせば、終に鐵石の
 心もくだけ、酒に本意をうしなひて、いよ／＼うかれ居たりける、嗚呼かなしいかなや世の人情、暫時の
 興に魂を奪はれて、穢れたる名を百年の、後に流してそしらるゝ、元この災は何よりぞ、たゞお安が
 色香に起れり、されば壯年の中は血氣いまだ定まらず、是をいましめる事好色にありと、古人の金言尊き
 かな。

(巻の一終)

正史 いろは文庫 卷之二

第三回

「心で留めて歸す夜は、かはいお方の爲にもなると、泣いて別れてまた御げんもじ、猪牙の蒲團も夜露にぬれて、あとは物憂き獨寐するも、こゝが苦界の真中かいナ」トたがひに浚ふ三味線の、音もさえわたる雪の夜や、彼辨右衛門のもてなしに、前後をわすれし酒のつが、庄左衛門はたゞ一人二階に止宿りて床のうへ、思案にくれたる其處へ、此家の女房お冬とて、戰慄する程うつくしき年増の仇者ほろ酔機嫌「庄さんモウお寐か 庄「ハイ、イエまだ寐はいたしません、誠に今晩はいろくくと、御厄介になりまして 冬「アレサ庄さん、モウ其様に堅くろしい事はいいにして、氣樂におしな、そしてネトいいながら多葉粉を吸付けて出し 冬「お否かへ 庄「へいこれはトいたゞきて呑みながら、じろくお冬の姿を見るに、酒の相手になりて居たるゆる、眼のふち櫻色にはんのりとなり、少し居すまひ崩れ、青みのある白縮緬のゆるじあらはにして、爪紅をさした細き指にて琴柱笄の紋の所をちよいと持ち、頭上をかく其風情、庄左衛門は惚々となりて溜息をつく折節、例のお安は上喜撰を養花にこしらへ、甘露梅へわさびをふりかけた、樂燒の菓子鉢を持ちきたり 安「庄さんお茶をおあがんなさいましたいひつゝ、またお冬にむかひ 安「おかみさんモウお床を敷べました 冬「オヤ左様かへ、それぢやア私はモウ寐やうや、お安さん、おまへは氣の毒だが此處へ寐て

庄さんを介抱してあげておくれな、大さう酔つてお出だから、一人寐かしてはおかれないし、また今夜は夜具もたらないから、庄さんの脇へ寐かしておもらひなトいへばお安も悪縁に、つながら前世の宿業なりけん、否にはあらぬ稻舟の、梶とるお冬がとりもちに、嬉しさうなる笑ひ顔に、紅葉の照もうつしく、庄左衛門は聞かぬふり、見ぬ振すれど胸ドキ、酒色のニーツ夜著、寐よとの鐘にお冬は座をたち 冬「アレモウ亥刻だヨ、ドレ下へ往つてはやく寐やうト莞爾わらひ、階子をおり行く、跡にはさすがにれた對面、お安は床の側へより 安「庄さんモシ、モウおよるのかへ、チットもんであげませうト夜著の横より手をさしいれ、さすりにか、れば庄左衛門、其手をしつかり引寄せて 庄「コウお安さん、おまへ達は狐ぢやアねへか、あんまり嬉しくつて氣味のわりいやうだ 安「なせでございませうへ 庄「エなせと言つておまへの様な能娘に側へ斯して來られるといふはどうも不測だ 安「お否でございませうが、何かのやくそくごとでもございませうか、こゝへお遣入りなされた時から、おいとしいやうにぞんじた所で、旦那もおかみさんも粹なしかねもなくつてよからう、どうで病身らしいから、酒を過したり夜をふかしたりしたら、よくもあるまいからと、だんくの信せつ、それゆる猶のことおしたひ申す氣になりました、どうぞお邪魔でも、せめて今宵一夜御介抱まうしたうございませう、おまへさん御酒でおせつなくはございませんか、ドレお胸の所を、しづかにさすつてあげませう、御堪忍なさいませう、お否でございませうか 庄「ナニく勿體ねへ、否の何のといふ譯はねへが、全體おまへはどういふ身分だへ 安「ほんになれなれしいしかただとおぼし召しませうが、こちらのお宅はおまへさんのお友達、何にもお氣のおかれる様なわけではございませんヨ、私はこのお

宅へ唄女の目見えに来て居ますのでございます。爺さんが不仕合で、おか、さんは煩つてばかり居ますから、何かにつけて不自由がち、いつぞお酌にでも出たらよからうと、他もすゝめましたゆゑ、親達の爲にもとぞんじて、こゝへ来て居りますのでございますヨ。庄「やれ〜さうかかはいさうに、それではこゝの宅に金でも借りて有るのか。安「ハイ、ナニ左様だけれど、誠にかはいがつてくれますはトはなしの中にしんと、寒氣は肌をさすごとく、お安は思はず身をふるはし。安「オ、寒くなつてきたト手あぶり火鉢を引きよせる。庄「ほんに身にしみる程さむくなつて来るやうだ、おいらは酒の陽勢で温だが、おまへはさぞ寒からう、私が端の方へ片寄るから、否でも寒さ凌ぎた、こゝへ這入つて寐なせへな。安「ハイ有りがたう、それでもどうもお氣の毒でございます。庄「此方こそお氣の毒だが、風でもひかせると、お冬さんの前へなほ濟まねへ、サア〜ト手をとれど、お安は洒落た氣にも似ず、まだ肌しらぬ男の側、はづかしさうにもじ〜と、恍惚子に見えて愛らしく、庄左衛門は心もうかれ、終に金鐵の誓をわすれて、情欲をこそとげたりとぞ、さて翌日は酒の酔、さめての後は人心、會盟同列の義士のおもはく、病に伏し居る父の前、さすがに背くもはづかしく、既に志を改めんとするに、お安は兎に角側をはなれず、辨右衛門夫婦もともども、酒と色とをすゝめしゆゑ、彼三百兩の金はあり、身ををさむる事かたからすと、不義の群にぞいたりける、同じ色香を既〜と、忠義を胸に情も厚く、實と操の松の花、こゝに哀れと聞えしは、おなじ浪士の岡野氏、その歳纒に十六歳にて鹽谷家を浪々なし、いまた城下にありける中、父の金右衛門は病死して、遺訓を守る三十郎、大星の士をあはれみ、孤獨をめぐむ慈仁を感じ、いよ〜極むる忠と孝、さて鎌倉へ先達て、衆よりはやく下りつゝ、敵高野の屋敷の案内、くはしく知るべき其爲に、屋敷の前に住居をま

うけ、太物荒物乾物など、諸色を大略調へて、世に調法なる萬見世、主人三春屋善兵衛と、やつす姿の商人は、本名杉谷半之丞、手代は全馬三郎兵衛、岡野三十郎、矢藤右衛門七、いづれも忠義の歴々が、名を改へ形容を改めて、武家とは見えぬ立ふるまひ、別けて岡野は年わか、四十餘人の中には、第一番の美男ゆゑ、おのづからなる愛敬ありて、買物に来る人々も、これを愛して人なじみ、元來高野の家中と見れば、仕入直段の元にかまはず、取入る心の大安賣、中間小者へ目をかけて、使に来る度毎に、酒をふるまひ酒代を興へ、その心をよろこばせしかど、いまた重役のものには深くもなじまねど、輕きものは大略心やすくなりしゆゑ、何とぞ師直の用達にならんと、種々手入をなしけれども、用心殿しき家中の出入、むかしよりして用を達す、商人たりとも容易入れず、殊に尾林貞八の、出入切手を日々あらため、なか〜伺ひがたければ、義士はほとんど當惑なし、實に大星が推量のごとく、敵の用心なほざりならず、はやまつてあやまちするなど、互に心を盡しけるが、彼三十郎はいつの間に語らひ寄りけん、高野の家老堀井理右衛門の小兒の守女おしづというて、十六歳の處女をすかしこしらへて、ひそかに情をぞはこびける、此また守女も年ゆかぬ賤の女に似もやらで、丹誠を守りおとなしく、薄情の戀の心にあらず、三十郎の男ぶり、憎からずとは思へども、はじめはさらに得心なく、すゑ〜夫婦になる事ならば、今はいかなる辛苦もいとほじ、たとへ一年二年は合はずにくらしてあればとて、互にかはらぬ事をこそ、誓にたて、契りたしと、美目も心もうつくしき、誠に岡野もよろこびて、氣長く信切をつくしけるゆゑ、今は深くも思ひあふ、なかとはいへどたまさかに、逢ふも人目の關越えて、今日しのび来るやくそくは、神子山町の伯父の家、かねて伯父にもおしづが許より、明して置きし事なれば、遠慮もあらで門口から、おしづ「伯父さんまた三さんは來

「オ、おしづか、サアアアあがりやナ、何ぼ色男のことだと言つて、家内へ這入るも待兼ねて、外から聞くもあんまりだは、アハ、ト氣輕もの、おしづは莞爾顔赤らめ、おしづ「アレサ伯父さんさうではないはね、今日はやく来ていろく相談する事があるから、そのつもりで居た所を、ツイおそくなつたから、三さんがモウ来てしまつたらうと思つてサ、伯父「オ、さうか、だうりで先刻來なすつて、しばらくはなして居なすつたが、手めへが來ねへものだから、亦用をたしてから後に來ませう、おほかたおしづが來るである、またして置いてくれるといつて、今しがた出て行つた、そしてお飯のおかすもこしらへてある、サアく奥へ往つてお晝でもたべて、來なざるのを待つて居や、おらア今出入場から呼に來たゆゑ、ちよつと往つて來るほどに、留守してくれとそこく、おしづを置いて出て行く。

第四回

神子山町なるおしづが伯父は、大工平兵衛といふ者にて、近年株を弟子に譲り、今は隠居の我ま、仕ごと遊び仕業も他の知る、古き番匠繪圖方にて、間取割方上手の棟梁、出入場より歸り來て、何か入用ありと見え、多くの繪圖をとりだし、彼是見あはす其所へ、二階よりして下り來る、三十郎は平兵衛に向ひ「サ、レくツイウとく、寐入りました、おしづは最早いつの間にか、平「ナニ今しがた歸りながら、おまへはよく寐てぢやゆる、跡で起してくれと申して、平「くさと出て行きました、どうぞあの様な分別なし、始終愛想がつかませうが、なるたけ氣長に面倒を見て遣つてくださいますし、私が爲には一人の姪、田舎の實親は二人とも、モウ三年前に故人となつて、今では私の娘も同前、マア力にするあれがごと、おまへも

此尊は田舎へござつて、來年はあれを女房にして、見世でも出さうといふ兼ての御相談、三春屋が御縁者なら、あちらでお世話もなさらうが、普請はわしが助けますせ、平「ヘイどうぞ萬事をお願い申します、平「コレ御覽じろ、此様に若へ時から請合つた普請の繪圖が此様にありやす、平「ヘエなる程澤山に、ハ、アお屋敷のが多分ございますネ、平「左様サ、武家方には町のと違つて、いろくと註文がむづかしいのがありまして、トいふうち見留める一枚の、繪圖を手に取る三十郎、平「コリヤ是高野師直の、平「今の屋敷が出來るとき、仲間の頼で圖いた下繪サ、平「左様ならば只今も此とほりの建方で、平「立間をはじめ奥表御殿は勿論、總長屋造作までも、大略はそれにたがはぬ普請の仕手は、元來私が相弟子サ、平「さては天よりさづかる賜もの、平「エ何がエ、平「アハ、これは芝居のせりふの眞似サ、トいひ紛らせど此程より、色にことよせ彼おしづに、あらかた聞いて胸の中に、記憶なしたる高野の屋敷、およそに此圖に割符の建方と、思案をなして平兵衛に向ひ、平「モシ伯父さん此繪圖を二三枚私に下さいませんか、平「何になさるつもりだか、平「エ、なに子ども時分から、繪だの畫圖だのといふものが好でございますから、菱川の畫も餘ほど溜めて持つて居ます、平「ハア左様かへ、それなら随分上げませうから、何れでもお持ちなさい、しかしこの繪圖は残しておいておくんせへ、是は他へ出しては濟まねへ繪圖面、實は燒きすてたつもりで、他に見せてはならないのサ、平「ヘイ是かネ、こりやアたしか私どもの向屋敷の高野さまの、平「されば何もかまひはなからうけれど、鹽谷家の浪人衆が、御主の仇と付けねらひ、敵討にでも來やうかといふ用心で、屋しきの案内を世間へ知らせまいと、嚴しく口留がしてありやす、平「ヘエ用イヤしかし其様なこともございますまい、あの當座なら少しは其様な氣の人もありましたらうが、最早彼是二ケ年たらず、今に手ざしをする人のないのを見て

は、命を捨て古主へ忠義といふ心は、出来にくい事とおもはれます、まして商人私などが、まうかる金でも命づくとも聞かぬは直にお断、けして氣づかひはございませぬ、そして此お名前の所を切取つたら、何處の繪圖だか知れはいたしますまい 平「さうさね、高野師直といふ所を切りとりやアわけはねへ、外の繪圖より念を入れて、素人にもわかりやすく、庭の泉水稻荷の宮まで漏さすした私が自慢、反古にするのも残念な、壁の腰張にしても、目のなぐさみになりさうぢや、ほしがるおまへに進ませうから、わすれずに高野といふ所を切りとつて 三「ハテ相違なく切りとります 平「其お心ならおしづの縁や、たのみのしるしにおまへへおくる聲引出 三「エイ 平「ハテささうびつくりする事はない、鹽谷の忠義な浪人衆へでも、賣つたら金になりさうな 三「ハテ變つた伯父さまの 平「アハ、商人を聲にしたら、職人氣がなくなつて、百でも錢にするころ、ツイ申、戯に言つたのぢや、何も氣に留めるわけはない、他の見ぬ間に持つてござれ 三「ヘエ有りがたうとおしいたく、其貌じつと平兵衛はうち詠め 手「ヤレ〜ハヤ、おわかいのに御きどくな、しかしおしづは夢にもしらす 三「何をおしづが夢にも知らずと 平「ハテマア今日は歸らッしやいまし 三「左様ならばまた近日トいとまごひして立歸る、心の中に三十郎が、半は悦び半はうたがひ、それよりいよ〜おしづに親しく契りしが、實に渡せし繪圖面、高野の普請に相違なきことわかりしかば、急ぎこの圖を山科なる大星の許へつかはしければ、由良之助大星は喜ぶこび、これより東へ下るを急ぎ、夜討のときの手配は、此圖をもつてなせしとぞ、さはいへ大星の用心深く、此外義士のそれ〜より、手便をもとめておくりたる、繪圖に合して参考なし、たしかに間違らざる所を見定めて後用のしなり、斯て大星は東に下り、諸方の手都合を下知しけるが、或とき岡野三十郎にむかひ 大「イヤナニ岡野氏、其許は妻女の安堵

方便はいかゞいたされましたな 三「ヘイ、イエ拙者は御存じの通り、いまだ妻と申すものは持ちませぬが、何ゆる左様に 大「是はしたり、其許このたび師直の案内くはしく告げられしは、誰が手續から手にいれられしぞ、譬へ同居はいたされず、終は夫婦と約束を、誓ひし處は君のため、深き罪とはいはれねど、女心におもひ詰め、あるべき所を其人が切腹なすか討死かと、二ツに一ツ命の定め、それとも知らず其期にいたらば、さぞかし周章ならん、人の誠を金づくで、なすべき事ではなけれども、せめて女子の身の落著ト二十兩の金を渡しければ、岡野も大に歡びて、これをおしづに遣はして、來春在所より出るまでも入用のことあらんには、不残つかひ捨て置くしからずと興へけるが、夜討の以前にそれとなく、高野の屋しきのいとまをとらせ、伯父平兵衛の許へ預けおきけるが、間もなく夜討の評判高く、高野の門前なる三春屋善兵衛といふも、鹽谷浪人の義士にして、手代も残らず一味の忠臣、かゝるはたらきありけると、岡野の事くはしき噂聞いておどろくおしづが心、伯父平兵衛はかねてより、さとりて居てもそれとは、あかさで姪の心のうち、不便いやすととりきたを、聞かせじとして聞かおしづ、胸くるしくも悲しさは、世間の人の賞ものに、される男と深き中、飛びたつ程にあこがれても、逢ふにあはれぬのみならず、十に九ツ切腹か、首尾よくとも海隔、遠き島根の島守と、なりもしたらば最上の仕合なりと聞かつらさ、涙かくしてよそながら、長屋の噂占も、たゞ義士達のなり行を、いかに〜と案じいる、苦の世界とはいひながら、わづかに十を六ツ七ツ、こえてあどなき娘氣にも、つながら鹽谷の仇討が、身のかなしみになるぞとは、知らで契りし昨日今日、猶戀しさぞまさりける、伯父平兵衛はおしづにむかひ 平「コウおしづや、手めへマア、毎日〜そんな貌ばかりして居るが、あんばいでも悪くなるといかねへせ、エ、ニウ、ちツと氣をつよ

くもちねへ、そりやア成程よく思ふも尤だが、世の中のこと、いふものは、何もかも約束ごとだと思やれ、まだまだ三十郎さんが實義の深い人なればこそ、其身は覺悟の敵討、あとはかまはぬ當座の花と、知らず親してしまはれても、どうも詮方はない筈を、大まいの金をわざくとけられ、始終おぬしが安堵の手當、これほどまでにして下されりやア、恨みも泣きも出来ねへわけだぜ。しづ「サア其様に跡々まで、おぼしめしての御信切、ことに世間の人さんが、知るも知らぬも賞めそやす、おかたが何でわすられう、萬一おはれぬやうになつたら、生きて居ませぬわたしが覺悟ト涙をひざへはら〜、鼻紙で親をふきなながらしづ」伯父さんどうぞ其時は、先達つ不孝の罪とがを、堪忍してトむせびり、涙のはてしなかりけり。

(卷の二終)

正史 實傳 いろは文庫 卷之三

第五回

そも大星の君子の智よく衆人を精育なし、其人々の氣風によりてこれを教訓する中にも、大鷲文吾と聞えしは忠直いはん方なけれど、生れついでにの鹿忽もの、心氣せはしき生立なりしが、由良之助は文吾にすゝめて、心氣ををさむることをまなぶべしとありければ、文吾は天性魯に等しき人なりければこれを聞き、いかなる業を學びなば心氣をしづむることあらんと、たづねに應じて俳諧を學ばれよとぞをしへける、されば文吾はその日より師をもとめてならはんとしけれども、さすがに初心のはづかしく、他には間はでおのが宅につく〜案じ居たりしが、折節庭に鶯の初音ゆかしくさへづりけるゆゑ、こゝぞ風流とやらんの發明なるべしと首を傾け、やう〜その心をぞつらねける。

鶯の初音をさく耳は別にしておく武士かな

かくしたゝめ、ひそかに大星に見せければ、由良之助はこれを見て大によるこび、文字の數さへ揃はねど、はじめて思ひ起せしものがこの風流を案じ得て、何ぞ雅言をなさらん、惜しいかな手爾葉のつゞきいたらぬのみ、今すこし心を用ひ候へとありしゆゑ、大鷲文吾はうれしげによるこび歸るを聞傳へて、あざけりそしらぬものもなく、いとおろかなる人なりとて、笑のたねとなりけるが、また二十日程過ぎて後、

初音きく耳は別なる武士かな

また十四五日過して後、

武士の然きいて立ちにけり

三度にいたりて自然この秀逸を得たりしかば、大星は手を打つてよろこび、嗚呼感すべしこの名吟、實に文武の兩道をかねたるものとはこの人ならんと賞めたりけるが、はたして後には俳諧者流の達人となり、其頃の寶井晋子などと肩をならべ、湖月堂子葉と雅名し、鹽谷家斷絶の後には専ら風流を翫び、一代の雅吟もすくなからず、こゝにその一二をあげて、雅なる文藻を兒女に示す、こは水間沾徳といふ俳諧の宗匠へ仇討の節に送りし手翰なり、

其後者彼是御無音背本意候、何れも様御堅勝に被成御座候哉、年來御懇意に罷成候故、一通り相傳へ申し候、扱者拙者事所存の筋難駄止、今晚存立申し候趣御座候、御厚情彼是以て生々世々に及候事に御座候、

山を裂くちからも折れてまつゆき

猶々春帆竹平も同じ道にて候、絹泉は御存じ之如くにて候、御恩借の蒲團申請候うて其儘打捨置申候、一句御引導奉願候。

十二月十五日

沾徳先師へ

子葉

右は仇討の節に臨んで認めたるものと見ゆ、實に風流洒落大丈夫の士といふべし、さて次にいたす一通は、いよいよ復仇と心を定むるよしを同志の許へおくりし密書なりとぞ、かくして見れば、鹽谷家の十分一にも名跡たちなば仇を討つことなく、何卒主家を再興の手段をなさんと、極忠の面々は名聞をこのます、たとへ仇をも報はぬ腰拔武士と世上の人にぞしらるゝとも、亡君の御舍弟を代に立て、忠を盡さんと願ひしとは、左にあらはせし一書にて推察あるべし、

尊書拜見 仕候、京都は相應に役者も揃ひ候由、座元より沙汰有之候、しかれば御當地子引町の二番目もはかくしからず候へば、いよく切狂言之思召立御相談申度候、いづれにも近日拜顔を期し可申候、以上。

御返事

湖月堂

子引町の二番目とするせしは、鹽谷判官の御舍弟なる大學どの、御事にて、この弟君の鹽谷家御相續あらばと心待なせしかど、その事なかくなはねば、是非なく師直を夜討になさんと決定したりしなり、戲のごとく認めし密書に、切狂言とするせしが、後世夜討は切狂言となりしも、大驚文吾の洒落が末代までも残り、その風流を賞翫せらるゝもまたこれ忠義の功にて、いとくありがたき事になん、されど身を落し姿を賤しうして敵の様子を伺ひ、實に貧困のさまなりしは、沾徳に蒲團を借りておさける一條

にてもしるべきのみ、また仇討の前々日十三日の朝の事なりし、文吾は所用ありて本庄へゆきけるが、途中にて煤拂の竹を賣る男に往きあひて、文「オイ、竹や、」竹「ハイ、竹をあげやすかネ、一本六文づつ、だが五文にまけやせう、」文「よし、一本いくらでもい、が不残賣つて下せへ、そしておれが賣りなれるまで同伴に歩行てもらひてへの、」竹「エ、何エ、そんならおめへさんはまた此竹を賣つてまうけやうといふのかネ、左様ならば元方へ往つて買出しなさればい、私がすこしも口錢をとる日になりやア、おめへさんまうける様にはなりやせん、そして私がおまへに付いてあるくくれへならば、おめへに賣らねへでわたしに門並賣つてあるく方がまうかりやす、ばか、」文「なるほどそれはさうだが、竹の代はマアいくらだ、」竹「不残でかへ、」文「さうヨ、」竹「これで三百錢だア、元もやつぱり三百文に付いてゐるのだからつまらねへ、十本ばかり賣つたのが、今朝ッからのぜうけたア、」文「左様ならばこれを遣はすから、その竹をおれに荷はせてくりやれト懐中よりして金百匹鼻紙につ、みさしいだせば、竹賣はひらき見て、」竹「こりやア錢と兩替しますのかへ、」文「いや、」竹「それでは不足であらうが、それを不残進せるから、どうぞ四五軒賣るあひだ同道して下せへといはれて竹屋はあきれはて、」竹「それではおまへは此竹を賣つてまうける譯ではなく、何か様子の事といらざる事でごせへますが、マアその形ではいけやせん、姿をやつす申敷ならば、竹賣らしく容をつくつて、ドレ、」竹「わしがト大務文吾を竹賣體にしらへて、」竹「サアマツ竹を肩へのせて見なせへまし、アハ、、、どうも新規商人のやうだといへば文吾もうち笑ひ、竹や、」竹「も口の内の、竹やも金の義理あれば、しばらく附きそひをしへつ、やがてわかれて去りにける、かくて文吾は師直の屋しきの前を賣りあるく、折も家中の窓のうちより呼びいれられて文吾はよろこび、他の竹賣にはなかく、に、まねもならざる大安

賣、無銭することくに商へば、わづかのことも欲の世や、格外やすき竹の直に惚れて門より家中にいれ、門並買へば大務文吾、天の助と心によろこび、長屋の案内見すまして歩行けどかゝる際物賣、あやしむものもあらざれば、思ひのまゝに足場を置り、やがて屋敷を出でたりけるが、婦多川の方へ趣く所に、向よりして大務が姿を見つけて立ちどまる、人は、則、寶井其角、其「イヤア似たとおもつたら湖月堂か、師走の文字にたがはぬ姿、アハ、、、それでも俳諧の神仙とは、」文「イヤア面目ないこの仕業、風雅も出ぬ今日の辛苦、」其「何さま定めぬ浮世の盛衰、寒さしのぎに一盃やらう、いつしよにござれとうち連れて、其角が形と大務と、そぐはぬ雅俗寶井に、まさる子葉の文武兩道、ことに忠義の心より、やつすとしらぬ寶井齋、その貧困でおはれとは思ひながら、世捨人に等しき其角は詮かたなく、居酒屋にぞ入りにける。

因にいふ、其角は元齋を業とす、其名を竹下順哲とよびて蕉門十哲の第一、生涯の秀逸あげてかぞへがたし、そは五元集、焦尾琴をはじめあまたの集あり、或諸侯の御秘藏に反古の一軸といふものありて、晋子其角が名譽とす、それをいかにと尋ぬるに、月と萩とを畫きし表具なり、その畫上に蕉翁を招かれて句をもとめ給ふ、翁この畫上に、

白露をこぼさぬ萩のうねりかな

と詠せしかば、君はこれを賞翫あらせられ、其後其角が參上ありしときこれを看せ給ふに、其角は忽ち筆とりて、白露をといふはじめの五文字に墨をひき、其かたはらに、

月かげをト背添へしゆる、御前にありける人々はいふに及ばず、大守もおどろきいからせ給へど、出家に等しき世捨人の事なれば、詮方なく狂人なりとゆるし給ひしが、かさねて蕉翁の參りしとき、

其方が門人晋子は實に狂氣の徒なり、師匠の句に筆をいれたる大罪、言語に絶えたる所爲ならずやとありければ、蕉翁これを見て晋子を心に賞めて申すやう、弟子にて候へども拙翁のおよばぬ事のみ候、トいひつゝ、また筆をとりて、

月かげを〇の初五文字は晋子其角が名吟なり

としるしたり、翁は露を露とよみ、其角は露に月の光のうつるといふ心にて、月かげをトは直せしなり、げに江戶座の俳祖大活の氣性、また有るまじき豪傑といふべきか、この一軸蕉翁と其角が反古の掛物とて名高し、まことに俳中の仙人ともいふべき歟。

第六回

節に晋子は湖月堂と酒をくみかはして興じけるが、いかにも世の盛衰を觀念し、文吾が浪々のたつきを哀れにおもひければ、腰の墨斗の筆をとりて、

年の瀬や水のながれも人の身も 其角

と吟じて子葉にわたしければ、子葉もまた筆をかりて一句を附けたり、

あしたまたたる、其たから船 湖月堂

其角はこれを見るよりも甚に不興し、さてはこの人貧しき姿を恥ぢて、今は斯のごとくなれども、忽ち花咲く春にその開運の時節を得て見せんといふ心かと思へば、不風流なるをさげしめ、やがて其處より別れしが、その翌夜の復仇、十五日の朝御菩提所へ引きゆく義士の後より追つかけ、大鷲文吾に走りつき、一

昨日の附句の心をやうく悟り「ア、この其角は俳諧は下手だ」と涙をながして、翌またる、その寶船とは今日の事にてありけるを、不風流と心にそしり別れしことの恥かしけれど、後悔しつゝ、圓覺寺までおくりしとぞ、また討人の夜の宵に、蕎麥屋にて冠付の題をとりし男の、何のその〜と口ずさみしを、文吾は聞きとがめて仔細をたづね、これにをしへて、

何のその岩をも通す桑の弓

と附けさせしがこの時の巻軸にて、鎌倉中の評判にてありける、思ふにこの句に、何のその容易仇を討ちとらんと、心にいはひてよみしならんか、いと〜めでたき忠義の士なり、なほこの風流におとらぬ雅にて忠義の人あれども、二の目をはかりて隠忠をつくし、死して其名を知られざる者あり、保榮四年富士寶永山の出来たる十月、駿河の國法臺院の裏門に菰を著て死したる乞食ありけり、其枕元に矢立疊紙などならべ、辭世に、

富士の雪解けて硯の墨衣かしくは筆の終なりけり

法臺院の和尚これをねんごろに葬り弔ひ、今石碑の残りて、

藏光院 存義居士

と戒名をしるす、これ東海道金谷の宿、澤の佐七といふもの施主なりとぞ、佐七は鹽谷家恩顧の町人、そも〜かしく坊といふは、文祿十四年の頃江戶に出でたる俳諧の師にて其角が友なりしが、十五年十二月十六日其角の許へ一紙をおくりて影をかくし、東海道在々に乞食して、終を法臺院の裏門に示せしなり、其角の許へおくりし書は、

生前志を同じうして、死後悪名を百年に傳ふ、亦是同列幾十人、嗟いかにせん薄命の士、唯黄泉の君のみ知らん。

笹の葉の亂れやすしや雪のくれ

戲説 かしく坊

鳴野 十三

これ四十餘人のその一人鳴野十次兵衛が舍弟にて、小山進藤奥野等と連判を抜いて影をかくし、萬に一ツも大星が仇を討ちもらす事あらば、二度の討手を心かけし三十餘人の列にてありける、されば光を蔵し義を存す二君に仕へぬ忠臣を、ひそかに知つて法蓮院の方丈が、藏光院存義居士とはつけられしとぞ、また餘曾川勘平宗則といふは鹽谷家没落の後、毛里美作守の藩中餘曾川佐右衛門方に同居してありけるが、伯母なる者勘平をいとほしみ不便をくはへありつるに、勘平は仕官の手便ありとて毎日／＼出あるき、ある日大雪の降るにもいとほしめでゆかんとせしかば、伯母は引止め「伯ノウ勘平、いかに奉公をいそぐというたとて、今日はやかすとよささうな、此大雪に一日ぐらゐ日を延したとて大事もあるまい」「イエ／＼さうでござりません、先かたも私ゆゑに日間を費してくれますものを、ナニ雪ぐらゐをいとひませう、是非とも参つて身のかた付を」「案じる伯母の心もしらず、何が不足で家出をいそぐか、アレだん／＼に降りつむ雪、寒さにあたつて煩つたら、どの體で奉公しやる、伯父さまが養子に仕やうといはれても、勘定方の

下役風情と不足に思うて返事もせず、義理もわすれて奉公口をたづねあるくも不遠慮なト腹立つ伯母の一言に、當惑なしたるその處へ、出入の町人堺屋喜兵衛といふもの入來り、様子を聞いて中にいり、勘平が浪人の心づかひを察し、金百匹を勘平に合力して、酒にても呑み今日は他へゆくことを休み給へといさめて別れしが、是十二月十二日の事にして、勘平は猶伯母をすかしこしらへ、喜兵衛が與へし金にて玉子酒を調へかたむけて出でゆきしが、それより十五日まで音信なく、十五日の朝鹽谷浪人仇討の噂専らにて、毛里家の門前を引きあげてゆく義士の行列、

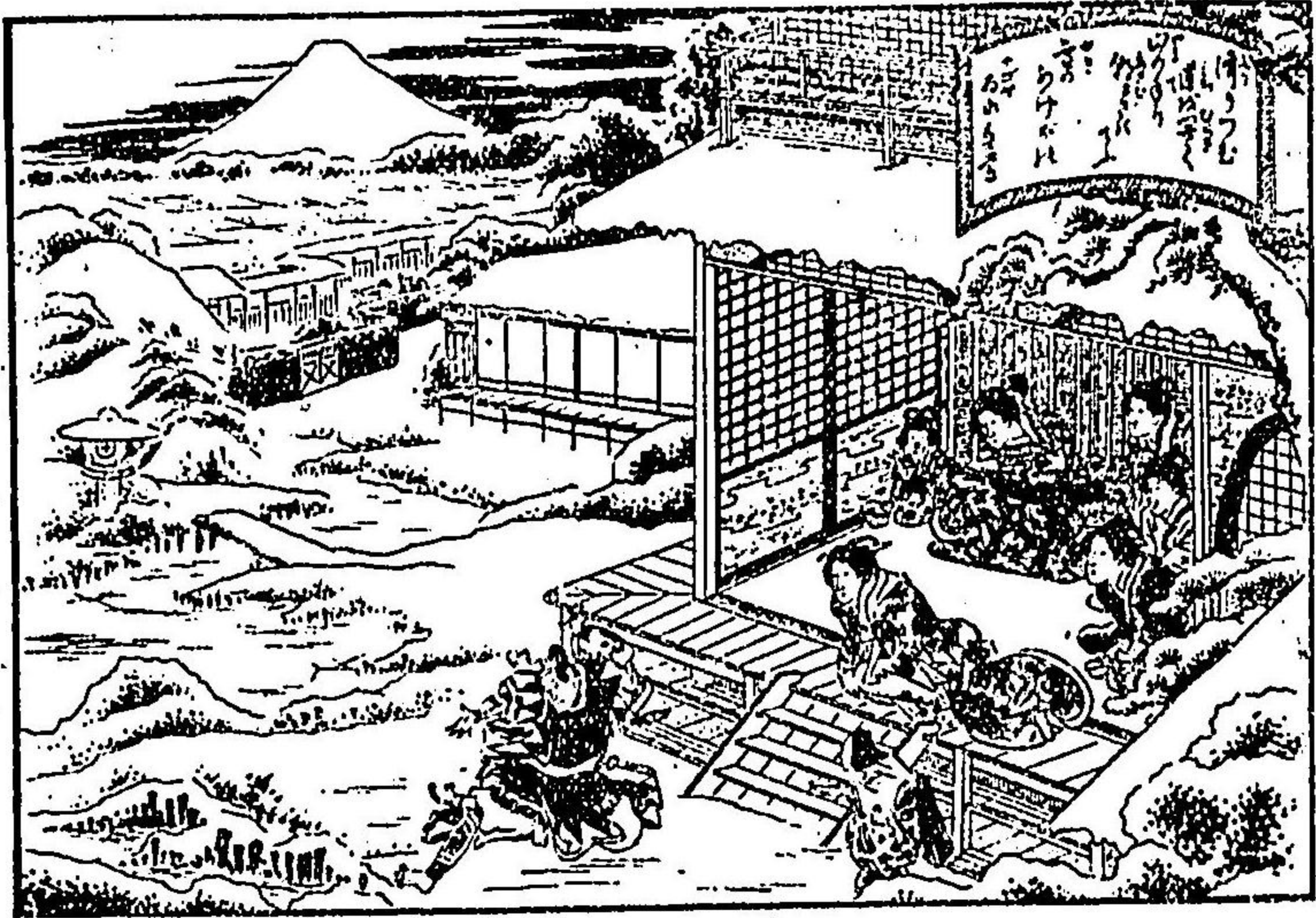
鎧を持ちたる者二人先に立ち、その次に太鼓を携へ、それより打物半弓十人、其次鎧二筋を合せて首を結び付け、その次に大星由良之助、その後は思ひ／＼の打物にて二十餘人、その中に勘平は兜頭巾を腰につけ白綾た／＼で鉢巻し、手おひしさまもいさ／＼しく、鎧を杖にてあゆみけり、

毛里家の人々走出てこれを見物なしければ、勘平は會釋して引きゆくを、見送る伯父は涙のよろこび、折から堺屋喜兵衛も來り、餘曾川の門口より「御新造さん、勘平さまも高野のお屋しきへ仇討の御連中、今御門前引いてござるいさまじさ、誠に見物でござります」伯母「オ、喜兵衛どのか賞めて下され、若年ながら此方の甥が忠義の噂、けなげな事をしましたはいのといふも涙の伯母がよろこび」「イヤモウ珍らしい敵討、ぞく／＼するほど頼母しいおはたらき、見物がぞろ／＼付いて往きますが、花は櫻木人は武士、また別段でござりますな」伯母「イヤほんに勘平が残した錢と手紙があるト取りいだし喜兵衛に渡せば、いぶかしながらひらき見るに、

御厚情の鳥目、酒と玉子の代料に申請候、残り御請取可被下候、

打割つてそれといはれぬ玉子酒厚き恵の恩にこたへんと落首をこそはしるせしとぞ。

(巻の三終)



いろは文庫 卷之四

いろは文庫第二編序

忠臣義士の列傳を、當世様の長物がたり、人情本に寫しかへて、兒女子に會得誠史實傳、孝女節婦を是に加へ、いよく益義黨の爲に、光をそふる伊呂波文庫、狂訓亭の反古なれど、例の艶語の中本とは、事かはりたる忠勇節義、たましく男女の情態を、しるせし條下のありといへども、楽しんで嬉せざる、丹心と誠意をあらはして、教導勸懲巻毎に顯然たり、文は拙しと笑ふとも、俚言は狂訓亭が一家の風調、兒女これに馴れて讀みやすしとす、かならずしも鄙俚の筆意をとがめず、唯忠孝節義の美名、實録の心を甘じて、以て身をかへりみ給へといふ。

于時天保十己亥春如月吉辰
東都人情本の作者の元祖
金龍山人狂訓亭

爲永春水誌

正史 實傳 いろは文庫 卷之四

第七回

爰に鹽谷の御後室薰代御前と聞えしは判官切腹あられし後、安保山なる御屋敷に隠居あられて葉仙院と法名付けて、後室のさもうるはしき切髪も、自然なる愁の窓に閉籠りてのみ在せしが、久しふりにて國家老の大星由良之助參上と申上ぐれば、後室もさもよろこばしき御顔色 後「オ、なつかしう思ふ由良之助、はやうこちらへ通しやいのうト仰にしたがひ、お次より女中の案内に引添ひて、入來る姿のしとやかに、禮義つくるふ上下も、鶉の目がへしや鷹の羽の、目に立つ人目忍びやかに、それとはいはぬ暇乞、うやくしく手を支へ、暫時泪に噎入る、又後室も過越し方を歎かせ給ふ御心にも、實に頼母しき大星が、此度京都山科より、はるく下りし心の底は、師直を討ちとつて亡君の靈前へ手向けんとする手段ならんと、世にもうれしくおぼしめして御盃を賜はりて 後「ノウ由良之助、御國を退去の其後は山科とやらに隠居せしと聞きましたが、今度鎌倉へ下つたは何ぞ所存があつてかや 由「ハ、亡君御繁昌の御代には、何ごとも遠慮の身の上、鎌倉見物も自由にはなりません、浪々の身と相なりましても、亡君の御恩に仍つて何不足もござりませねば山科の樂隠居、都の地は不殘遊び盡しまして、また此度御當地の名所を、最早大略見物を仕果てましたゆゑ、今晚用事の埒あけまして、明日は是非出立と申合せまして、同行もござりますればお

いとま乞に罷出でましたが、此後下向はまた一兩年も過ぎねば出来ませず、それまでの御名殘御機嫌よろしう御繁昌をト叮嚀に言上あれば、後室は思案の外、相違なしたる大星が所存にあきれて興醒顔、偕は亡君の御恨をはらし、師直を討取る思案もなく、主君なければ身のまゝに京鎌倉の見物遊山、浪人したは幸といはぬばかりの今の口上、君御存生の御時に、まさかの用には第一と仰せられしもおめがね違ひ、不忠なものと腹だしく思召したる御泪、こゝへ兼ねてや、机にありし文鎮探つて由良之助に打付けたまへば、おしいたゞき、右手にうけたる手練の風情 山「お心にかげられましたる馬の鼻向、急度頂戴いたしまして、冥土の君へ御言傳 後「エ、何とエ 由「アイヤ亡君同前の御賜、ありがたうぞんじます、時刻をいそぎますればはや御暇、おそれながら御機嫌よろしう 後「オ、最う歸らるゝか、随分無事でト言葉すげなにご後室は奥の間差して入りたまふ、跡には大星しづくんと立つて此方へ下りつゝ、松島といふ局に向ひ 由「イヤナニ松島どの、只今御前へさし上げんとぞんじたなれど、失禮とぞんじ控へましたか、これは拙者が上方より東都へ下る道の記にて、心を盡した名所の上の歌、古跡くをくはしく記して、此末長き御つれぐの御なぐさみにも相成る品、しかし明日由良之助が鎌倉出立の後で、ゆるくと御覽にいれて下さる様、尤當所出立の義は明朝お知らせ申しますト聞いて松島も心の中、主君の仇を討つものは此人ならんと、主従の思ひたのみし申妻もなく、東下りの旅日記、名所見物氣なぐさみと、亡君の御事は露も思はぬ面憎さと、思へど詮なきことなれば、由良之助が取出せし封じの状を請取れば、いとまを告げてそこくにて、歸る大星見送る女中、口々そしるその噂かしましくこそ聞えける、ときに其夜もしんくと、お夜詰引番さまぐに、はやことすみて長廊下、鐵行燈の光さへ薄くなりゆく折しもあれ、彼松島は後室の御前を下り、

今宵は部屋へやの女をんなさへ宿やどへ使つかひの留とどりかけ、部屋へや子は奥おくへ泊とどり番ばん、いま入い替かりて只ただ一人ひとり、女をんなながらもお主しゅの無む念ねん、なま中心なつかうだよりとせし由良ゆら之助のすけが来きたりしゆゑ、後室こうしつさまの御立腹ごりつぷく、それとも知らずや道の記しを、お慰なぐさにというちやうらしく、置いてゆかれた大星おほほしどの、今いまとなつては最もう外ほかに、殿とさまの修羅しゆらの御無念ごむねん、後室こうしつさまの御残念ごぜんねん、師直しりちゆうづらを討うつ事は、かなはぬ事ことか口惜くちやくしいと忠義ちゆうぎのたましひ氣きも勞つかれ、彼道かのみちの記しをかたはらに、置いてうとく轉寐うたねの、透すを伺うかふあやしの曲まが者もの、そりりくと部屋へやの戸とを明あけて、しづかにしのび足あし、居寐かひる局松島つばしの前に在ありける封じふうじの狀じやうを、目めがけて寄よるを松島まつしまは、見みて見みぬふりの空寐そらねい入い、ひそかに看みれば部屋へや方かたへ、此夏このなつごろより勤つとむる女をんな、阿房あほうの様に噂うわさせし十七八じちはちの部屋へや方かた者もの、欲よくの盜ぬすに來きたりしならば、衣類いるふか道具どうぐに手てをかくべきを、大星おほほし氏の持參ぢさんせし狀じやうに、ころを懸かけるとは、どういふ思案しあんか合點がてんゆかすとうたがふ松島まつしま、それぞとも知らずさし出す女をんなの手先てまき、狀じやうを取とらんとさし延のばすを、朱しゆらうの烟管えんくわんのながきにて、はッしと打うてば驚おどろけど、狀じやうをばとつて立た上ある、さてこそ怪あやしと引戻ひきもし、松まつ「つねぐ阿房あほうと思おもひの外ほか、此封狀このふうじやうを伺うかふは、たしかに仇かたきの廻まし者もの、そこ動うくなト立ちか、れば、退のれぬ所ところと大膽だいたんにも、局つばしをおそれず突退つとけて、行ゆかんとするを利腕きせきを、とつてか、れば振りはらひ、封狀口ふうじやくちにしツかとくはへ、争あふ女をんなのはげしさに、取逃とりのがさじと松島まつしまは、松島まつしまの部屋へやへ曲まがり入いりました、お出合であひなされ皆みなさんへ、お上の御用ごようでございますトいふ聲聞こゑきこいて部屋へやへより、表おもての方かたへ呼次よつぎながら、面々めんめんに廊下ろうかを走はせて松島まつしまの部屋へやへ來きたりて、居ゐりかさなり、やがてすくめて錠口じやうぐちへ、知しらせにおどろき役人方やくにんかた、押おへてト間まにおしこめける、其間そのまに局つばしは封狀ふうじやうを、ひらきて讀よみかけ、びツくり仰天おやうてん、松まつ「ヤ、ヤ、ヤ、そんなら今夜忠義こんやちゆうぎの人々ひとら、高野たかのの屋敷やしきへ討う入いるとか、それとも知らず餘所よそくしく、いとまごさへ兇略せうりやくな仕方しかた、それとさとりし部屋へや

方者かたもの、油斷あぶらのならぬ仇かたきの用心よんじん、何なにはともあれマア御前ごぜんへト衣類いるふをあらため立出た出る、折ひから告つぐる鶴つるの聲こゑ、松まつ「サア皆みなさん、直すに支度せど被成ひな成なりまして、跡あとから御前ごぜんへちツともはやうといはれておのゝ部屋へやに行ゆき、化粧けしやうにかゝるいそがしき、さて松島まつしまは後室こうしつへお目覺め申ま上あげさする中に、東ひがしは紫むらさの雲くもさへきて、はる、日は雪ゆきの氣けしきもよきお庭にわづたひの縁えん頬ほを、御殿ごてんへいそぐ其所そのところへ、表役人おもやくにん聞ききすみて、直すにお庭にわの切戸きりより、こゝへはせ來きる御注進ごちゆうじん、彼大星かのおほほしの下知げちをうけ、仇討場あだうちば所ところよりそのまゝに、よろこび勇ゆうむ早はやづかひ、局つばしはこれ急度きつと見て、松まつ「そなたはたしか寺岡てらおかどの、平へい「ホ、お局つばしさまでございますか、平右衛門へいゑもんめでございます、大星おほほし氏うぢより此早打このはやうち、松まつ「シテ、首尾しゆびよく高野たかのの館たねへ、平へい「さん候まうらほく、用心よんじんきびしき高野たかの師直しりちゆう、なかゝ容易たやす討入うちいることのかなはぬ所ところを干辛かんしん萬苦まんく、松まつ「オ、おいさましいその注進ちゆうじん、ちツとも早く御前ごぜん様さまへト見みかへる所ところへ後室こうしつは、はやくもこれを聞き給たまひて、立出たでたまふを見るよりも、局つばしは庭にわを見みやりつ、松まつ「ノウ平右衛門へいゑもんどの、今の様子やうすをいち〜に、平へい「ハ、かしてまゝしてございます、さて同盟どうめい四十九人しじゅうくわん、寢食しんじよくをやさんせず、身みをくるしめたる甲斐かひござつて、昨夜時刻さやじやくも子の半刻はんじやく、うし島新地じまにんちの御住居ごぢゆう高野たかのどの、御ごやしき、おもて裏うらより二手ふたてにわかれ、おのゝは、かかる所存しよぜんもなく、御門ごもんを破やれおし入いつて、用意よういそろひし御殿ごてんを責せめて、高名手かうみやうてがからかぞへもつさず、深ふかくもかくれし少將せうしやうの御首ごくびとつて義烈ぎれつの勇臣ゆうしん、只今ただいま花水橋はなみづはしの東ひがし、廣小ひろこう路ちに屯とんをはつて休足きゆうそくいたし候まうらほ、トいふも息いきあひせはしなく、しばらく此所このところに息いきやすめ、さもけなげにぞ思おもはれける、後室こうしつはじめ松島まつしまも、歎なげきを催もすよろこびの、注進ちゆうじんこそはたのもしけれ、薰代御前かむろごぜんは松島まつしまの局つばしにむかひ口説くちがきたて、御物ごもののごしもうるみつ、後のち「ノウ、松島何まつしまなんとせう、昨日見まえたは山良やまら之助のすけの生な死しをきはめしいとまごひ、それともしらす不忠ふちゆうもの節義せつぎ知らずと心こゝろの中に、そしりしことの恥はかしき、女をんなの心の

第八回

浅はかさ、よく言わけをしてたもとむせびりてぞおはしける。

さても寺岡平右衛門は、夜討の次第こま／＼と言上すれば、後室より介抱仰付けられて、しばし休足なしたる所へ、早刻限も辰の時、表方よりとり次ぎて、これもお庭の切戸より、こゝへ入来る忠義の侍、寺西彌太夫、矢藤長助、いづれも血汐の薄手疵、はたらき見えて潔し、兩人ははるかに後室を拜して庭に平伏なす、その跡よりして足輕六人中間小者十餘人、

一 小櫃 三荷
右は錠前を下して油單を掛けたり、

一 帳面入 とれを張りし筈一荷

一 文箱 一ツ

一 金九千兩

御縁側に荷ひ入れ、寺西矢藤にわたし置き、みな／＼出てさりにける、

撰者曰ふ、かくの如くなれば、夜討の手配前後の手當、なか／＼四十餘人のこと、はおもはれず、次第にしるす討入の風情をよみて察したまへ。

そも／＼只今後室の許へ送りし品々は、彼大星が去年以來、城明けわたしの時よりして、萬事の入用義士への手當、夜討の装束後々の取つゝきまではからひし金子をさしひき九千兩、その勘定に厘毛も違はぬこと

の明細書、そへて御前へさし上げたり、葉仙院は（かをよごせんのはふみやうなり）大星の忠義のみかは、前後のことまでくはしく金銀まで、いさ、か私の所存をくはへず、世に亡君を後室に、かへて其身をつ、ししし、注進禮法うやくしく、斯も心の細やかにとゞくものかと感じ入り、はしたなくこそ仰はなければ、松島の局にこま／＼とさ、やきてこそおはします、局ははやくもさしづせしか、寺岡、寺西、矢藤の三人、足を洗はせ衣類を興へ、あらためて奥へ召されける、

撰者いふ、寺西彌太夫は元大星が家來なりしが、忠信なる者なれば上へするきよして百石くだされ、組足輕の小頭を勤めさせしなり、さて彌太夫は當家土佐守の御許にとゞめらるべき由、大星の願なりとてさし留められ、二百石賜はり三百石に御取立ありしが、三年目にいたりて伊勢參宮をねがひ、上京して山科にいたり、庄屋村役人に對面し、兼て由良之助が隠居の間、内外ともに寺西が支配して、鎌倉へ下る節も彌太夫が立合にて、留守居一人を置き村役に頼み、その外萬端寺西が請持なれば、此度庄屋に談合して、由良之助の宅地而ともに賣拂ひ、唯三間四方の地を残し、後年年貢の手當をなし、草堂を建て大星の石碑を造立し、

忠誠院 乃空淨 劔居士

と立派に彫刻をさせ、其後山科に一郷の貴賤男女の隔なく集め、高僧を頼み大法事をつとめ、料理を調へて數百人にふるまひ、其翌日保樂元年三月行年六十三歳、大星の石碑の前にて美事に腹を切つて終りしとぞ、嗚呼大星が一人の忠萬人をはげます、寺西が忠死始終全き人といふべし。

それはさておき後室は、三人の義士を御前にめされ、御料理をくだされて念頃にお言葉あり、猶も去年の三

月よりこの暮までの辛苦の様子、四十餘人の身のうへを一人ごと問ひたまふ、歎の中のたのしみは拙き筆に述べがたし、かくて寺岡は但馬國豊岡に急の用ありとて、おいとまを願ひ走せ去れば、また長助は由良之助が今朝別に認めし書状を局の取次にて、後室の御前にさしいます。

撰者曰く、矢藤長助は今年十六歳まだ角髪すみかみの美少年、此程降りし雪よりも白き顔色艶々と、紅をさしたる唇の花のごときはものはかと、まばゆきほどのうつくしき、黒髪亂れて貌にかゝり、眼の中すゞしくしやんとして、又愛敬あるその姿、りゝしくもいとやさしげに、おのゝ恍惚となしたりとぞ。

さて彼文の封じを切らせ、松島これを讀上ぐる。

御つれづれの御伽役にも相なり候はんと、御なじみの矢藤長助四十餘人の名代にさし上置き候、かねて御ぞんじのとほり、幼年より御奥に被召しものゆゑ、過越しかたの御物語まうしあげさせ候はゞ、御なぐさみになり、同列の者の働をも折々申上候はんには、忠死のものゝうへをもおぼし出し被下候事と此者をさし上候、なほ右衛門七と改名申付候へば、よろしく御こんめい願上候。

松島どの

大星

後室はこれを聞かせられ、心ほそさのすゑくまで、ちからにせよと長助を、四十餘人の人々のかたみに

残す心ざし、何にたとへんものもなく、只さめくと泣きたまへば、御前にありあふ女中達、泣かじとすれど眼に涙、雪ははれてもなほしめる、袖や袂の露霏、哀催す御座敷へ、又お表より案内につれて、由良之助が再度の注進片岡新六、(四十九人のほか、ことしわづか十二歳なり)

新「御菩提所へ引上げまして、家須義の討手来たかと用意いたして居りましたれど、最早時刻も移りまして、既に鎌倉の御政道今は手ざしも相ならず、御前さまより首實檢の御檢使願ひ上げ升るト

後「ノウ松島、大儀ながら圓覺寺へ乗物急がせちツとも早く「おぼつかなくは存じますれど、御意にまかせて大事の御使「由良之助はじめ一同の者へ、よろしくわらはが言傳を、別けて昨日のいとま乞、大事をつゝと知らずして、鹿略の仕方萬事詔言「委細かしまりましてございますトこたへて直に廣敷口、かき込む乗物陸尺の看板さへも花立花、ほまれの檢使圓覺寺へ、鋌打乗物早打同前、宙を飛ばして一さんに、西の山より南の海手をさして急ぎ行く。

倍此つゞきは總巻の終にいたりてくはしくしるす、是より次の物がたりは、安藤貞氏の傳にして、又仇討より以前の段なり、すべて忠臣蔵の始より順に綴らす、後前にしるしいたすは例の狂訓亭が筆辭にて、看官をいやく佳境にこそはん爲なり、その意にて讀みたまはねば、紛らはしき條下もあるし。

(巻の四終)

正史 いろは文庫 卷之五

第九回

願以此功德鳥も得とらず、あら鷹の餌飼く〜に日が暮れて、とつけ申してより大地とはなりにし御堂の繁昌は、尊き君の御恵、千代も不動尊體へ、貴賤の参詣絶間なく、往來を當に開店たる、酒食の家の多き中に、稻毛屋と家號せし見世はとりわけ賑ひしが、晝食時刻のことなれば参詣人や旅人の、此家につどひて食事を調べ、休足なして在るもあり、入来る人に出る客、さまざまなりける其中に、七十歳ばかりの白髪の老父、十七歳ぐらゐの美しき娘とともに食事をしながら、老父は泪を眼に浮め、老父「ノウお住、何も恐れて逃かくれするではないが、此祖父が老衰れてから兎に角に他人の爲にせこめられて、果は孫女の其方で、難儀苦勞も重らうかと思つて家内を夜逃も同前、さぞ心細からうが、住所でもかはつたらば又仕合の能くなることもあらうから、なじみのない田舎へは否であらうが、時節だと思つて何事も堪忍しやヨ、トさも力なき老人の細言聞いて、孫娘のお住といふがおとなしく、これも少しは眼をすりあかめ、祖父さん私は心細くはないヨ、田舎へでも引籠んだらば、他人が何のかのと言つて来ないで、世話がなくてよからうと思ふから、はやく田舎へ往つて見たいヨ、そのかはりに最早今までのお友達や、三味線のお師匠さんなんぞには、一生逢はれまいねへト、ホロリと落す泪の雫、かすむ眼にさへ祖父は看とめ、老父「ナニ

ナニ田舎といへば言ふもの、五十里も百里も有る路ちやアなし、金澤といふ所は衆人が見物に行く名所だから、まんざら淋しい所でもない、また友達の衆に逢ひたくなれば、觀音さまへ月参の人が何程もあるから、其人に付いて来れば、宿屋に二晩か二夜止宿れば逢はれるはなト、口にはいへど心には、生れ古郷の繁華の地を、放れて邊鄙の里へ行く、娘心を察しつゝ、暫時愁にしづむ折から、表の方よりづか〜と入来る者は何やらん、いかめしげなる二人連、一人は商人、今一人は奉公人の口入ともいふべき出立悪げな男、老父と娘の側へ来り、老父「オイ佐右衛門さん、能い所で出合ひやしたといはれて、老人はぎよツとせし風情、娘もこれはと當惑貌、来りし男はしたり貌に白眼付け、コレサ祖父さん、イヤおめへも見かけによらねへ大膽人だの、エ、コレサとばけねへでよく聞きな、おめへの心持では息子の借りた金は知らねへ、娘はおれが孫だから勝手に連れて立退かうと言ふたらうが、左様はならねへ、
 ▲「イヤ榮次どの、マアしづかにして、娘さへ連れて歸れば勘定はどうでもなること、口かすを利かすとも娘を此方へ購取つて榮●「なるほど夫が早いわけだ、能く談じて四の五のなしに、左様サ、サア祖父さん承知だらうネ、ヘン承知でねへと言つた所が承知させずにア置かれねへ、オイお住さん、お前は兼ての代料だア、祖父さんと同意に往くことは出来ねへ、金の形だから否應はならねへ、サア〜直にト立ちか、れば、サアレおぢいさん、私を連れて行くといひますが、何様か仕様は有りませんかト祖父の側へ身を縮めるを、榮次はせ、ら笑ひ、老父「サア世話をやかせねへで、きり〜と往くのたトお住の手をとり引立つるを、佐右衛門は突きはらひ、老父「五兩の代にお住をと承知いたさぬ、老人だと思つて馬鹿にさツしやるナ、悴の借りた金とはいつても其約束とは聞きませぬ、金澤の親類まで行けば都合の出来る金ちや、彼地へ著いたら飛脚

に届けてお前まで急度返濟いたします。「アハ、堅い祖父さんの言ふことちやから間違はあるまいが、覺束ない御相談ぢや、ばか〜しい。」氣を能くして居てはらちあかねへ、何でもかでも此娘を預る、サア〜立つたり、詮方がねへ、泣いても笑つても用捨はならねへ、エ、イ、いけしふとい奴等だアト言ひ、お住を引出さんと、するを老父は押しへだて。「コレ餘りといへば狼藉な、いかに老衰したといつても昔は帶刀もいたした佐右衛門ぢや、孫を手込にさすものかト力身を言つても老人の、さて口惜しき手足の不自由、踏出す膝のふる〜と、がたつく風情の甲斐なけれ、弱身に付込む悪漢ども。」コレ祖父どん、左様云やア猶のこと了簡がならねへ。「コウ〜いけするい事をしなさんな、コレサ彌陀川町の宅も、大屋さんの方へ店賃のかたにとられて出かけたのちやアねへか、其外の雜具もくされ、疊と詰ともに、押付けてから此旅立、出抜かれてたまるものか、コレ誰だと思つて馬鹿にするのだへ、請人仲間の大天狗と仇名の付いた榮さんだぞ、サア〜きり〜と、うしやアがれト又立ちか、りてお住の手を、とるをやらじと争ひしが、榮次は己が力にあまされ、對立二重隔てたる、隣席の客の膳を蹴飛ばし、踏直さんとたちろく足の、穴所をとつて投出し、刀をとつて立上るは、歳齡廿四五歳にて、色いと白く鼻筋通り、眼はず〜やかに唇は、紅をさしたるごとくなる、威あつて猛くしづかなる出立立派の侍なり。」イヤ〜、な慮外者めが、いかに貴賤の差別なき茶屋小家の義にもいたせ、食事の中へ足踏込むとは、言語を絶する不届奴トいはれて。●は顔色かはり、侍の前に手を下げて。「寔に申譯もない兎相をいたしました。」ツイ脱落者を追手に參つた私どもゆる。侍「イヤこれ、急げば膳部蹴らしても大事ないか、長幼順ある教も知らぬ、其方どもとは申しながら、七十歳にも越えつらん翁をとらへて弱身に付けいり、娘を奪ふに等しき行

狀、公所の御説を恐れぬ此場のいたしかた、それはともあれ、此方に何意趣あつて膳部を蹴かへし、見物人の立ちかゝるほどの恥を此身にあたへたのだ、無益の殺生に似たれども、食事を穢され、其方の足でも切らねば卑怯にあたる、サア覺悟せいト詰寄せられ、腰を抜かして請人榮次、色青ざめて泪聲。「ア、モシモシ且那さま、マアどうぞ御堪忍被成て下さいまし、ワッ私に兎相で御手打になりましたも是非がございませんか、宿には三歳になります老女と六十になります稚もございます、どうぞ三人にかゝる命と思召してお慈悲をお願い申上げます。」「へい〜此者の申上げ升通り、此奴がお手打になれば、家内にも日干になるものが出来まますこと、どうぞ御勘辨を願ひます。」侍「何さま恐人を手にかけるも恥かしい義ぢやから免しても遣らうが、此方の中す事も承知いたすか。」「へい〜何事も仰は反きませぬ。」「然らば申しさける、近頃さしづがましい事ぢやが、只今承る老人と娘御の難儀、其方ども、勘辨いたせ、しかし少々の金子は我等が老人になりかはつて、其方達へ返してくれう、又金子の高はまけられぬ、是非とも娘を運行くとおいやれば、此方もゆるさぬ其方等が慮外、サアいづれとも返答いたせと、申すも何様やら御老人へ失禮らしい、イヤモシ娘御、此場をとり扱うて進せても苦しいはござらぬかなトいはれて娘は嬉しくも又恥かしき其風情。姫すみ「ハイ有りがたうト一言が、精一倍の返事なり、老人は侍の方を拜しつ、老父に信切に有りがたう存じます、お恥かしいこととございしますが、只今金子を拜借いたしても早急には返濟が侍「ア、イヤ其心配には及び申さぬ、萬事拙者にお任せ被成、サア町人ども何といいたす、刀を請けるか金子をうけるか、いづれにしても身に入る金、勝手な方を返事いたせト言ひつ、財布を取りだして、小判三枚紙に載せ。」侍「サアこの金子で老人へ皆濟の證文をわたし、相濟すかト極付けられて、道ならぬ金貸手代と

請人榮次、内心氣味わるく跡じさり、以前のけしきに引きかへて、金を請取り、後日まで異論これなき證文を、わたしてこそ、逃げかへる、後には此所に休みたる衆人、武家の行状と仁心あつきを感じ合ひ、噂とりに歸り行く、其時例の侍は老人に打向ひ、「イヤモシ御老人、さぞ御心配でござつたらうが、拙者の寸志が屆きまして少しは御安堵被成れうか、若い女中を連れられては猶此上に御用心、急いで此所はお立ちなされ、老父「寔に不思議なことで御厚恩になりまする、コレお住、よウくお禮を申さぬか」「アイ寔にモウ有りがたうぞんじます」「イエナニ不躰だとはぞんじたが、さし當つての御難儀を見請けまうしていたしたと、イヤ拙者は是から遠方へ参るもの、御縁もござらばまた重ねていふを聞くより娘はもじく、男振から心だて、艶しき風情は有りながら、途中ではじめて逢うたる他人に、三兩といふ大金を出して救うて惜氣もなく、直に別れて去らんとする其氣性の大きなるを、女心にしたはしく、言寄りたくも端近なる、茶屋にて何と詮方も、なけれど祖父に囁けば、實にと心の付いたる様子、老父「ア、モシ、旦那さま、マア少しお待ち被成て被下まし、實は私どもは只今の者どもに貴立てられて、詮方なく在所へ引込まうとも存じましたが、貴君のお蔭で此難を運れましては、急に田舎へ参るにもおよびませぬが、貴君はこれから何處までお出被成ますか」「されば拙者は内用あつて本庄と申す所まで参るのちやが、夫を聞かれて何になさるか、老父「イ、エ御恩返しのためしたし方を娘と相談いたしますも、こゝではならぬ貴君のお急ぎすみ」「はなれともない生れた土地、ならうことなら元の所へ」「いかさまそれがよさうな、いらぬ世話だが左様被成、兎角住みなれた所が能うござるテ、老父「浮いたる様でございませうが、最う一度彌陀川町へかへりませう」「それでは貴君と御同道にトいそいそしたる娘氣の、浮薄にあらで縁の糸、結ぶの神の業

なるか、うち連れてこそ立出でけり。

第十回

そも、不動尊の門前なる茶漬見世にて、老人と娘を憐みし侍は、何人なるぞと尋ぬるに、これも忠義の一人にして、大星の内意を承け、また城内を明退きて間もあらぬその日かすに、東の義士に内應の大事を告げて其後は、此方に止まる約束にて下りつ、根黒の在の平間村より、今日は織部彌兵衛の方へゆ、安蘇貝十郎左衛門といふ人なり、斯る人とも知らずして、お住はしきりに戀しくなりて、宿世の縁や深かりけん、安蘇貝も憎からず思ふ心の發りしが、頓てうち解けかたり合ひ、彌陀川町まで歸りし頃は、はや太陽は西に入る夕ぐれにこそなりにける、こゝにおいて佐右衛門は、再度家主に歸住なしたきことをつげ、其借財を濟して今までの家を請取り、兩隣家へもわけをはなし、昨夜の儘に宅に入る、貧家の住居の手がるさは、いとも氣樂のことならずや、さて安蘇貝も夜に入つては、織部氏を尋ぬることもいかゞなりと、止めらるゝま、お住の家に、終に其夜は長家より、貸夜具かりて休みしが、曉方より大雨の、車軸を流すことくなれば、門口へ出ることもならず、せめて小降になるまでと、祖父と孫女とのもてなしに、心ともなく一日をこのうら家にくらすうち、情家内の體を看れば、貧困いふべき様もなく、今日は口腹を養ふとも、明日はいかにと思ひやらるゝ哀れさに、十郎はまた金子二兩をとり出して、娘お住にこれをわたへ、「さてもし、これはお前が祖父さんを孝行にするのを見て、不躰ながら私の寸志だから、遠慮なく買ものでも有るならば調べて、祖父さんにも安堵させ申しなせへ、そしてマア今まで何様して活業してお出被

成つたかぞんじませぬが、座して喰へば山もむなしとやら、何ぞ取續く活業がありますのかへト聞かれて二人は面目なく、娘はさすが年もゆかねば、外聞つくろふ所存にあらねば、「アノウ、お祖父さんは此間まで往來へ出て船を賣りましてネ、私は踊のお師匠さん所へ、踊の三味線を弾きに頼まれて参りました」
 「なるほど、それではやう／＼にお二人の命をつなぐのみのことだね、最う此お嬢も青春のことだから、相應の舞さんでも貰ふとか、嫁に遣るか被成つたなら、お祖父さんを養ふぐらゐのことは樂々と出来さうなものだがネ、
 老父「さればでござります、左様いたしたくぞんじまして此通りの貧家、時節の衣類も著る事のならぬ薄命、また其上に私も孫女も望がござります、と申した所がおよばぬ願、何をお隠し申しませう、元私どもは武家の奉公をいたしまして、しかも古主は當三月、大變のござつた鹽谷家でござりますゆゑ、かねて愚息が存生の節より、孫の代になりましても歸參を願ひ度いと申したことも最早叶ひはしませぬが、せめて此娘をば武家の妻になる様にと心がけて居りますト聞いて安蘇貝は大に驚き、その名字を尋ぬるに、十年ほど以前鎌倉説法洲の上屋敷に勤め、いとよとなりし人ゆゑ、國勝手くにがての十郎左衛門は、十四五歳の節なれば、一向に佐右衛門の顔などは知らず、只その名字をば覚え居て、その因縁を感じつつ、終日過越方のものがたりをなしてありけるが、此旬は五月雨の頃とはいひながら、今朝よりの大雨いよいよつよく降りしきりて、なか／＼戸の外へ貌も出されぬ程なれば、是非なくその日も暮れたりしに、又一事の難義お住のうへに出来たり、それを何ぞといへば、其夜に入つて祖父の佐右衛門、即中風とかいふ病發り忽ちに臨終けり、こゝにおいて安蘇貝十郎左衛門は、お住が歎といひ、頼すくなき老人の死去を見捨てがたく、殊には長家のものまでも、安蘇貝を目當として何事も相談をかけられ、自然とお住の兄か亭主

のごとく衆人に會釋はれ、元來仁愛深く、他人の思付く生質ゆゑ、野邊の送の用意はいふにおよばず、すべて長家の人々を頼むに叮嚀なる言葉を盡し、又金銀を借むことなく、働き手傳ふ人々に、利徳を付けて禮をなしければ、欲にふけるといふにはあらねど、十郎の實意をお住より聞傳へ、便なきお住が爲に何となく安蘇貝をとゞめしかば、瓜田の杓季下の冠のたとへをば辨へざるにあらざれど、餘儀なく三四日を此家に過しつ、第五日目のことなりけん、明朝は本庄へおもむく由を告げて、なほ萬事信切にさしづなしけるが、お住は其夜初夜過ぎて、世間も常より物しづかに、裏家といへど明地の多く、草生茂る窓の元に、二ツ三ツ四ツ飛ぶ螢、亡魂かとも思ひ遣り、世になき兩親、昨日今日わかれし祖父のなつかしく、又其身をもつく／＼と案じ煩ふ此末は、誰にたよりて世をわたらん、何となしてか日をおくらんと、胸をいためて歎きつ、心に思ふ其人は親身もおよばぬ實情の、世話をなしては呉れながら、いさ／＼かも禮をうしなはず、さし向にて三夜さ程、同じ蚊帳に伏しながら、只一言のたはむれもいはぬ男の行儀、恥ぢていひよるよすがもあらず、今宵いはねば明朝ははや、別れて再度逢ふこともならぬお方を、近所では歎の中なかつちゅうの悦ぢやの、羨ましいの似合ひたる夫婦中のと、嬉しいことをいはれて悲しいはづかしい、くはしい道理を知らぬ人は、縁が出来ても此私が拙いゆゑに嫌はれて、出て往かれたといはれたら、世間へ何と言譯が、よしありとてもゆかしいと、思ひ染めたる此お方に、所詮をはれぬことならば、いつぞ死んだがましであるなと、くりかへしたる心の歎あたりをわすれて泣聲を、袖にもらして伏沈むを、十郎は抱起し「これはし

て大病にでもなるといけなから、最う少し氣をとり直して、うきくするが能いではないかへ すみ「ハ
 イ有りがたうぞんじますが、どうで薄命な私でございませうから、いつぞ死んだがましでございませう すみ「な
 せ其様な氣の短いことをいふのだへ、今までは仕合がわるくとも、これからは何様能いことが出来て、そ
 れこそ玉の輿に乗られるのは女の徳、其美しい容儀でナニくよ〜と思ひ被成ことはねへ すみ「イ、エた
 とへ出世をいたすことが此すゑにあればと申して、一旦心に思ひつめた、お方に別れたくらゐならば、死
 んぬより他はございませぬ、ならうことなら貴君のお手にかゝつて死にたうございませうといひつゝ立つて、泣
 貌を水にて洗ふ下水上、口をそゝぎて元の座へ、来るよりはやく安藤貝の脇差とつて、我とわが咽を突かん
 とする手をとらへ すみ「ア、めッさうなことを、何とするのだ すみ「放してころして被下し、どうも生きて
 は居られませんといふ中及物をとり納め すみ「氣が通つたかお住さん、いかに年のゆかぬ娘、心ちやといつて
 餘りな仕方、思ひがけない途中の難儀を、見かねてさし出た此方へ、かさなる世話もふしぎな因縁、元は
 鹽谷の御家來と聞いてさすがに捨てられず すみ「そんなら貴君も鹽谷さまの御家中で、此度不慮の大變に
 在鎌倉も國元も、皆ちりぐの口惜しき、同じ御家を浪人した、人と聞いては時代が過ぎて、主君の御名
 の出ることなり、また一ツには、身に引きくらべて合力して上げた私の寸志、世話の仕様がわるいから死
 んぬといふのかへ すみ「アレ勿體ない、どうして其様なことを存じますものか、私が死なうと存じ詰めたの
 は、お前さんが明朝は最う此家には居ないと被仰るから、お別れ申すが悲しいゆゑ すみ「イヤそりやア無理な
 了筋だ、元來兄弟が夫婦ぢやアあるまいし、風とした事から此様に、心易くするさへ世間へ對して濟まぬ
 仕儀、殊におまへは小兒の様に思つて、唯心ばそいから私を長く留めたからうが、何とか他が思ふと始終

お前の爲にもならず、少しもはやく私は立退いて、お前は後の相談を誰ぞに頼んでしなさるが、いゝではな
 いかといふ貌おすみはしみくと、見れば思へばたのもしく、しがみ付くほど惚々と、なれどもさすが恥か
 しく、眼にはそれぞと知らせても、言ひそ、くれてもつれ寝、亂れし髪をかき上ぐる、櫛さへ髪をつげかね
 て、いすかの嘴と喰違ふ、心の願堪へ難く すみ「アノウ、左様申しても兎もお聞き被成ては被下すまい
 が、どうぞ後生だと思召して、かなへて被下しなねへ すみ「かなへてとはそりや何をエ すみ「アレ此間根黒
 の茶屋で別れ様と被仰つたのを、お願ひ申して御同伴に參つたほどのお願を すみ「サアそれだから此様に、
 及ばずながらも御相談相手になつて上げたからい、ぢやアないかへ すみ「それでも此儘おわかれ申すと、お
 世話になつたお禮も出来ず、お否でもお側に居りまして私の心のおよふだけ、命にかけて御恩がへし、ど
 うぞ左様被成てくださいますと一言ひつゝ、貌をあからめて、男の方へ脊中を向け、雪より白き袷元を、見せ
 てうつむく愛らしき、居住座崩す膝の上に、おく手を逆に組みながら、向へそらす細き指、爪紅させしに
 あらねども、そのあざやかなる生質は、ともし火のかけにも透きとほる肌は花にも増るべし。
 春情の少女好男の慈仁、此末いかなる説をかなす、義を重んじ節を貞すの美談、次の巻をひらきて
 知るべしといふ。
 (巻の五終)

正史 實傳 いろは文庫 卷之六

第十一回

「十さん、お前さん今日も本庄へお出被成のかへ」
 「左様ヨ、毎日遊んで居ても世間がわりいから、何ぞ商賈でもしねへちやア終がをさまらねへ、そしておいらが頓死でもして見ねへな、其日からおめへが困るはナ、そりやア日がらが立てば又亭主も出来るからい、が、其當座直にまごつくと格好がわりいから、用心をして置いてやらねへとかはいさうだ」
 「オヤなせ其様氣にかゝることをお言ひ被成んだエ、今ツから死ぬの生きるのといふ様な心細いことをお言ひでないよ、知つてお在のとほり、私の親身といつては金澤とやらに伯母さんがあるばかりで、それも久しく便がないから、生きて居るかなんたか知れやアしませんヨ、それだから私は今の身がいよ／＼左様だと、なほ心細うございませすは少し眼をうるませて泣聲の様になる」
 「オヤ妙なことをいふノウ、今の身がいよ／＼左様だとは何のことだト聞かれて貌を赤らめて、恥かしさうにさしうつむく」
 「なせはなしにくいことがあるのかエ、コレサ隠さずに言ひなナ」
 「ナアニネ、まだ何だか知れやアしませんヨ」
 「なんだか知れねへとは何のことだ」
 「アノウ先月からネ、經水を看ませんからサ」
 「エ、妊身になつたのか、そりやア大變だノウ、トいはれてお住は氣の毒になり」
 「寔にそれだから私やアどうしやうかと、苦勞になつてなりません、元をいへば私の方から無理にお願ひ申して、種々の

の事をお前さんにお世話をかけて、また斯して夫婦になるよりはやく赤兒でも出来たらば、さぞお前さんがお否だらうと思ふとお氣の毒でなりませんヨ、もし左様に違なくツても、何卒堪忍しておくんさいましヨト男の心をはかりかね、やさしき様でも何所やらに、堅い行儀の武家育ち、野暮にはあらぬ十郎をも、惚れた娘の心からは、大事をとつて思ふ程、口にははれぬかこち草、露置きそへて安蘇貝の、膝にもたる恨み貌、お住の心と十郎の所存と違ふ物おもひ、今にも時節が来るならば、討死なすか切腹か、二ツに一ツは退れぬかくご、末長からぬ契とも、知らで一向したひたる、深き情に引かされて、如斯にかたらしは、我一生のあやまりと、後悔詮なきことながら、せめて我亡き後々にも、再縁なして不自由にあらぬ様にはしてとらせんと思ひしものを、我種を産みも出さば、いかばかり始終お住の身の迷惑ならん、大事をかゝへし身をもつて他の娘に疵を付け、跡に難儀を残すこと、實意の情が後々は、不實の所爲となりゆくらん、なま中かくてあらんより、敵討の念願を明して、今より離別をなし、思切らせて置くべきかと、大丈夫なる安蘇貝も、さすが恩愛の綱にからまれ、干々に心を惱すとも、知らぬお住はいとゞしく、悲しさ餘るもの思ひ、貧しき此身の難澁を救うてくれし情はあれど、たらはぬ者を未始終女房にもつて暮さんとは、思はぬ中へ妊身になりしと聞いて當惑するゆゑに、ものさへいはぬ事ならんと、思ひ過して泪の貌を、膝におし付け歎に果しもなかりしが」
 「十さん、お前さん私が妊身になつたらうかと申したのが、さぞ御否だらうけれども、まだどうだか知れないのだから、其様に氣になさらずと能いはネ、餘りお前さんが子持になつて外聞がわるいと思ひならば、最う少し月が重つてから何様でもして仕舞ふから、左様思つて下さいましな、其時になれば私は死んでもかまはないヨ、それだからマア邪魔なことだと氣に

なさらずに居ておくんなさいなねへトいはれて思はず十郎も、こらへかねてやはらくと、落つる涙を袖に隠して「ノウお住、おいらが今無言で居たのを、他に心があつて、何ぞ考へても居るのかと思つて左様いふのだらうが、おいらの心持は決して左様ではないから、わるく思ひなさんな、ナニおいらだといつても、はやく死度いことはないが、お前に親類や兄弟もないものだから、萬一おいらが居なくなつても、急にこまらねへ様にしてやりたいと苦勞をする中で、小兒でも出来た日には、さぞおめへがこまるだらうと思つて考へごもしたのだヨ、また種々とはなして置きたいこともあるけれど、マアいま急に言はずともよし、また後でもわかる事だから、たとへおいらの身に何様なことがあつても、約束ごととあきらめてくんなヨト兼て始終を夫となく心得させて置かんとする、胸のくるしきはかなさも、忠義にいたむる心にて、迷の道に入りながら、溺れてやくにそむかじと、鐵石心のけなげなる、そもく十郎左衛門は今年二十四歳なり、彼小山田の亂れたる風情にくらべて、戀情を捨つるの節を感ずべし、又其心は男子にもまさるお住の才智あれども、貧家に生立つ少女なれば、命におよぶの節操はなしかねることなるべきを、其いさぎよき終の勇氣、四十餘人の義士にまさる、斯て月日を過す中に、翌年の四月めたく安産して、しかも男子なりければ、お住はこれをよろこびて、夫の心も自然血筋の愛に引かされて、末の松山浪こさぬ夫婦の中とならんかと、思ふ安堵に十郎も、しばらく其儘睦まじく、其年の十月末まで何事もいはで過せしが、いかになして其期にいたらば、我に未練の心も發り、お住も當惑なすには極まる、さらば其以前にうすくも別れておもひ切らせんと工風して、ある時お住に向つて言ふ様「エ、コウお住、此間からはなして置かうと思つたけれども」
 「オヤ何をエ」
 「ナニサ他ぢやアねへが、在所へ往つて來ねへければならねへ

から來月は立つて往くがノトいはれてびつくり夫の顔、ながめて忽ち涙をうかめ「坊や、マアチツト親父さんの所へお出でトいただきし小兒を十郎にわたし」
 「アレサ、又其様なことを言出して、私に氣をもませておくんなさいますなヨト紛らかさんと消すを、安蘇貝は念を入れて」
 「イヤお住、その様に言消してはいけねへ、實に來月は旅立つから、かならず愚痴に腹を立てないがい、せ、火急に言つたらばびつくりするだらうと思つて話して置くのに、茶にして居ることとねへ」
 「オヤ、それぢやア私も小兒も連れて往つておくんなさいましたねへ、」
 「どうして其様な手輕いことが出来るものか、五十里や百里の道ではなし、殊によれば生きては歸られない遠い國だものヲ、それよりかお前は小兒と二人で待つて居てくれるがい、萬一間違つて歸るのがおそくなるといつたとて、半年や一年でこまるといふ様なこともしねへからト兼てたくはへ置きたりし金子の外に、大星が手當にわたせし用意金を、合せて凡三十兩、別に當座の食料も二月三月の分量ならべ」
 「サアこれほどわたして置くから、随分おれが居ないでも、一年位はくらして居られやうではないかトいはれてお住は其金を見向きもやらず、夫に抱かせし小兒を抱きとり」
 「ノウ磯坊や、コレ其様に寝ねして居ないで、目を覺して親父さんに、よくおいとまごひをしな、これさ小兒や、目を覺しなヨトいひながら、ねむりし小兒の貌の上に泪の雫はら〜、むせかへりつ、抱きしめ、歎けば母の聲聞付け、泣出す我子に乳房をふくめ」
 「モシお前さん、マア此子が可愛さうぢやアないかねへ、其はじめから私をば、一生女房に持つてとは思つておくれではなからうけれど、せめて此子がお前の貌を覺えるまで同居にくらして、夫から離別しておくんなさいました、今のお前の言様では、田舎へ往くとお言ひだが、それは私を振捨てる、切端がないから國へゆくと言つて、一生是限で最うかまはない心

におなりだから、手切の心と磯坊の養ひ料のお前の情、捨てる女へ十分の手當をしてお呉んなさるのだから、恨みることもないけれど、なまなか根黒のお茶漬屋でお前さんに逢はないと、この悲みはあるまいのに、邪見にでもしておくれなら思ひ切らるゝこともございませうが、おろかな者と思しめて朝夕何かをやさしくして、たらはぬ事や片言をいふのを一々をしへられ、はづかしいのと嬉しいが、つもりくつて此子まで、出来てはどうか放れやうとおもふお前を引留める、かすがひとやらにもならうかと、氣を丈夫にして居たものを、お前さんにお別れ申して、どうして生きて居られませう、とても別れるお氣ならば、私も小兒もおまへの手で殺して置いてお出なさいヨトいふも泪のくもり聲、また年ゆかぬ女氣に、十郎左衛門の心を知らず、おろかなゆゑに捨てらるゝと思ふ恨を尤と、聞いてもさすがあかさねぬ、大事の本望今暫時、不明別れんと胸を苦しめ、實にもいさぎよき勇士の本心、恩愛に主君の高恩はかへられず、放れともない妻や子を捨て冥土へ旅立つぞと、いふもいはれぬ一大事、こらへて居れど、線かへすお住の歎に、安蘇貝は腸をたつくるしさに、齒を喰ひしはる男泣、親子の別と辨なき、小兒も無始の知らせやら、乳房をはなして母の貌、じつとながめて泣きいだす、聲も哀をそへまざる、涙の雨の時雨月、いとしめやかに更けわたる、鐘も淋しきもの思ひ、一言いひてはむせかへり、二言いうてはをさな子を、なかせじものといたはるも、ねんくころの子もり唄、山をこえて里へとは、夫が旅へ立つといふ、きえんも疎しとかこちつつ、はては親子が川の字に、ならぶ枕の終とは、後にぞ思ひ知られける。

第十二回

人の心の種々なる、安蘇貝夫婦の如き忠貞のいさをしある、古人今人類なきいまだ終をこゝに不説、後輯に至りていよく心烈の感情を盡すべし、同じ忠義の其中に杉谷半之丞といふ人あり、仇討の折節には行年四十四歳なりしが、此人は鹽谷家を浪人して町家に住む事十年の餘なり、されども古主の大變を聞くより、忽ち鎌倉の家財雑具を家主にゆづり、主人の國元へ走登り、元老大星由良之助に對面して、籠城するとも仇を討つとも、其下知に隨はんと願ひけり、さて此杉谷半之丞政利が斯の忠義の人なるに、何ゆる浪人してありしぞとくはしき由を尋ぬれば、主君の慈仁をかうむりて、不首尾にあらでひそやかに鹽谷家を立退き鎌倉に住居しが、その始を問へば他家の家中の者にして、鹽谷の家中杉谷半左衛門といふ者の方へ養子に來りしが、養父は五十餘歳にて三十にたらぬ後妻をもち、半之丞は彼養母と同年ぐらゐの事なりしが、年よりもはるかに若き容體にて、殊に希代の美男なり、されば主君のめがねによつて別段近習役に召出されしが、いかなる前世の宿業にや、迷惑なる事の出來して、止事を得ず亡命をなしたるそのゆゑは、養母お艶といへる者生質の姪女にて、夫半左衛門老人なるを嫌ひ、養子半之丞の美男にしてものやさしきに心をうつして、折々これをそゝのかせども、養子半之丞は其志、鐵石のごとく、元來篤實の了簡から、母のやさしき言葉をかけるは、隔てし中を陸じくくらさんとの慈悲なるべしと思へば、いよく母親を朝夕大事に孝行せり、さて或時の事なりしが、半左衛門は鎌倉へ主用にて下り、母と半之丞のみ家に在り、時しも冬の半旬にて寒さも例より増りしが、お艶は炬燵にあたり居て、獨何やら物の本をくりひろげてありけるが、縁側

へ出て口を、ぎ、亂れぬ髪を撫でながら衣紋を直し、元の所へ這入りながら
 「半之丞ちよツと来ておくれ、半之丞、オヤお出でないかへトいふ聲聞付け次の間より入来り
 「ハイお呼びなさいましたかト膝に手を置きかしまれば、お艶は莞爾笑顔して
 「ア、何も用はないが、餘り淋しいからお前を呼んだのサ、寔にマア寒い事ではないかねへ
 「イエモウ冷えるの寒いのと申す様なことではございません、しんくと身にします、大方鎌倉などは寒さで凄まじくございませう
 「鎌倉はどうでもよいヨ、おまへはさぞ寒からうのに何をしてお在だ
 「エ、ナニ、太平記を借りましたから讀んで居りました
 「オヤ私も此間見様と思つて借りたけれども、堅いことばかりの様だから止してこれを借りたヨ、おまへもちツとこれをお見なねへ
 「ハイ下學集でございませうか
 「ア、此中の玉藻前の所を御覽な寔に面白いヨ、私やア玉藻前の半分他人に思はれる様な女になりたいねへ、さぞ嬉しからうと思ふは
 「イ、エ、しかし周の世を亂したり天然をさわがしたり、また日本を魔界に仕様なんぞといふ女があつてはなりません、それでさへは、かりながら女中といふものは、兎角男の心を亂しますものだから、佛もこれをいまして、むづかしく申しましたことがございませう、殊に美しい女は猶のこと罪が深いと申します
 「オヤそれぢやア私の様にわるい女に生れたのが仕合かねへ、それだけれども私やア娘子どもの歳のいかない時分から左様思つたは、どうぞして他人に思ひつかれる美麗な女になりたいたいのだ、左様すると自分ばかり氣をままないで、男の方から思はれて、さぞ樂だらうと思ふヨ
 「ハイ、イエ母人さんも随分人並にすぐれて被爲入るから
 「オヤ氣はづかしい何様せうノウウト炬燵へ顔を横に押付け、半之丞の顔を見て、嬉しさうに莞爾と笑ふ顔の美しさ、歳は三十に近けれども、化粧にばかり身を入れてみかき上げた若姿、半之丞は見もやら

す
 「ドレ私に向島氏まで用事がございませう、又御城下に調度物がございませうから、ちよツといつて参じます
 「アレマアお待ちヨ憎らしい、他の氣も知らないで其様に逃げずといはれ、そして此寒いのに外へ出すとチツト宅にお在な、諸方の娘や御殿の女中衆が、お前に惚れて氣をもむといふ噂だから、外へ出るのが面白からうけれど、宅にも氣をもむ者があるから、かはいさうだと思ひなすがり付いたる姫蕨の、やさしき風情は看えながら、心の曲りし不義の色情、半之丞は忙はて、はづかしめんと思ひしが、義理ある母に面目をうしなはせんもいかゞなり、かゝる心のあるゆゑにか、いと氣むづかしき養父の無理、此身の迷惑する節は毎度其座をとり繕ひ、朝夕ともに念頌に世話をせられし恩もありと氣をとり直して、お艶の側にどツかと坐して溜息つき
 「モシ母人さま、貴嬢はお氣が違ひましたか、と申す所を申しますまい、其うつくしいお姿を誰も噂に賞めそやして、似合はぬ縁を結んで居る、かはいさうだの惜しいのと、他人の目にもとまる貴嬢、それに年中私はお側に居つて、明暮にやさしいお世話になりますもの、何おろそかにぞんじませう、勿體ないがおまへさんの様に、やさしい美しい女房をもつてくらしたら、男と生れた甲斐もあると思ふに付いて折節は、非道な愚痴も我ながら口へ出されぬ其くるしさ、貴嬢と母子でないならばと胸に出る日もいく度か
 「エ、嬉しい、其様ならお前も此私をトすがり付かんとする所を、半之丞は飛びしさり
 「サア何の因果か私も貴母も其氣が合ふといふは、畜生道へ墮落した宿業にてもあらうかと
 「イ、エお前が其氣なら、畜生道へ生きながら落ちてゆかうと、くるしみが此身一つにか、らうとも、チツトもいとほぬ私が心、どうぞかなへてお呉れなねト恥も禮義もわすれはて、したひ寄るのを押しへだて
 「マア、おまへ被成まし、成程あなたと私は心の合つた事ゆゑに、畜生道も因果づく

とあきらめて、たがひの念もはらしませうが、義理ある親の半左衛門さま、また第一には殿さまの御ひいき厚き御高恩、お主と養父に恥をか、せ、また私は母といふお前さまを悪道へ落とし申さん大罪人、お主へ不忠親への不孝、いとしほがつて被下す世母へ始終なげきをかけ、何執心が届きませう、死んでも一ツ蓮には居られぬばかりか、八方の罪を此身に引請けて、地獄の責を私一人、死んでも貴嬢のお側へはよられぬ縁の親子の名、いよくあなたが信實に、かはい、と思召して被下すなら、どうぞ此世は辛抱して、未來とやらとは昔からよくいふ事でございますが、それこそ二人の一念で急度夫婦になられませう、其代りに私は此世で一生女房を持たずに死んで仕まひます、それが貴嬢へ心中立、左様思召して被下ましと申し上げます半之丞の心の中を、不便だとお察し被成て被下ましと言ひつ、其座をはづしけり。

これより半之丞は、養母お艶を別けて敬ひ實意を盡していたはりしが、お艶はそれを嬉しいとおもふにつけても、戀情のいよゝますゝ募りしが、はてはひがみし心より半之丞の心を憎み、まはり遠きことをいひて上手に我を嫌ひしならん、他に深くも契りたる女のあるゆゑ、一生涯女房も持つまじなどとばかりしに相違なしと、思ふも女の無理ならず、半之丞は多分御殿にのみ宿りて宅へ歸らざりしかば、お艶は不良心より、終に半左衛門の歸國にいたりていろゝ讒言しければ、半左衛門は以ての外に立腹して、養子半之丞の不孝を書面になし訴へんと計りけるを、鹽谷殿にははやくも其沙汰を傳へ聞きて、半之丞の難を哀れみ、ひそかに半之丞へ御納戸金を賜はり、御殿より亡命をさせて其災を除し被下ける、こゝにおいて半之丞も舊恩を忘れ難く、此度の列に加はらんとは願ひしとぞ。

(巻の七終)



いろは文庫 卷之七

伊呂波文庫第三編序

難波津の宇多は手習ふはじめに教へしとなん、當時は絶えてかきもならはさず、弘法大師のいろはにはへのうたをもて、幼兒まなびのはじめとはすなりけるを、狂訓亭の主人は兒女子の物の本をよみならはすはじめにとおもひ起してや、いろはの假名の反古を集めて、爲永文庫の中に有りしを撰み出し、四十七忠臣孝子を列傳し、俚言ながらも伽椰の草紙のうちには、その冠たる教訓美談いと多かり、さればわづかの小冊も、數を重ねていく巻か荷うて重き大部となりなん、しかはあれども面白く綴りし筆意を愛悦ぶ心となれば、寶の文庫おもきはいとはじ、寶井の口ずさみに、

我ものと思へば輕し傘の雪
と吟せし昔もおもひ合する忠義の志士が、命を輕んじ義を重く、千辛萬苦の銘々傳、諸家の秘録を寫しとゞめてもらす事なき數十條、是の文庫をもとめ給はば、古今義士傳の總看にて他を詮穿なすに不及、嗚呼連池菴の丹誠いたれるかなと、老實になつて巻端に筆を採る。

爲永ひいきの連頭

方壺堂主人玉枝

正史 實傳 いろは文庫 卷之七

第十三回

諸説を聞いて復仇の初發を探るに、一休の筆の一軸照月の二字古歌の論より、師直深く鹽谷を憎むと言ひ、又判官の奥方薰代御前の、いまだ鹽谷判官に縁付きたまはぬ以前に、其才色を愛して子息の嫁となさんと思ひ込み、同性の縁家なれば判官を媒人と頼みし所、かへつて其返事を師直に不爲、其身の内室とせられしを以て意恨となし、是より判官に恥を與へんとはなせしといふ、決して然にあるまじ、照月の意の評論などは、其職の師直なれば判官に劣るべしとも思はれず、薰代御前の御事は、元來判官の御内室と定まり、御歳十一歳にて判官公の御家へ被爲入しと正傳にあれば、師直これを子息の嫁に貰はれ度く言出でしとは、武家縁談の法に疎き僻論にて少しも道理に不叶、然らば何故諸侯多き中にして鹽谷氏を師直の憎みしぞ、これ其頃の風儀男色の意恨より發るといふ、然も在りしならんか、凡其時代は男色の流行れて、武家は更なり町家までも男色を好む者多く、娘よりは少年が愛せられて兄弟品と唱ひならはし、生死を約定夫婦の如く交り、また情死する類も少からず、されば西鶴といふ戯作者の著したる、男色大鑑と外題し本にもくはしく記したり、兎に鹽谷判官の寵愛深き小性に、比々谷右近といふ古今無類の美男ありて、これを懸想せざる者はなしといふ噂なりしが、彼高野師直是に戀慕して判官へ貰度き由を言入

れしが、鹽谷の家に由緒の者にて他へ出し難き家來なりと答へられしゆゑ、是非なく其儘に過せし後に、此右近を執事の家を送りしが、尤止事を不得事にて判官も物憂く思はれたれども、時の勢に勝ちがたく、右近を他に遣はしたるなれども、師直は其身を庵略に斷り大家へは容易遣はしなから、他家に渡し難き家來の名跡なりと言ひたるを腹立ち、第一には右近の男色を思捨てがたく、殊に右近が師直に出會ひし時、鹽谷家へ其身を貰度しと言入れたる師直の望を深くも悦び、恩に著る趣、縁なかりしを恨む様に情をふくみて會釋せしかば、彌判官を恨み憎み妬み心の募りて、終に兩家の滅亡の元となりしといへり、此段を人情に綴るときはくだしくしければ、只其由を大略にしるすのみ、但し左に引註する故事に依つて、愛念の怒心には、智勇の大將も明察をくらまざるゝものと察したまへ。

昔漢土三國と別れ争ふ節、吳の國の孫堅と魏の曹操と戦ふ折節、吳の軍師周瑜の心いまだ決定せず、殊に曹操は玄德を打破り追崩したる勢、八十三萬餘人の大軍と聞く、吳の軍兵ども甚だ恐を生じ居れば、奈何なさんと迷ひ苦む時、孔明は吳の國の軍勢を以て曹操を破り、玄德の爲になすべしと吳の軍師周瑜を勵ます、其辯舌即座の偽計を演べて、銅雀臺の賦をつらねて其心を決定させたり。

孔「イヤモシ然様ならば斯すると宜うございますネ、曹操に降参するも否なり、軍をしては味方が小勢で覺束ないと思召すならば、兩義を止めて曹操を引返して仕舞はせる手段がありやす、今度曹操が此國を責め様といふ望の極意は、只二人の者が欲いから發つたのだから、夫を遣ると直に軍を止して本國へ歸陣には相違ないから、早くその爲要二人を曹操の所へお遣り被成が能いぢやア被御座ませんか 周瑜「二人とは何者の事でございやせうネ、何様も不解事だ 孔「ハテネ、まだ少しも御存じないかへ、近頃曹操は漳河といふ所

に銅雀臺といふ樓を造立へて、美女をあつめ酒宴を催す樂を仕樣といふ了簡たさうサ、其美女にも好
 がありやす、私やア其美女を未知ねへが、當時何でも四百餘州第一番の美女、沉魚落雁閉月羞花と賞めるの
 は、吳の國に居る大喬小喬といふ姉妹の娘だと噂を仕やす、其故だから其娘達を取らうといふ存心で此度
 責めるといひやすから、マア曹操が大望といふは一ツには帝王になり、二ツには吳の國の二番女を彼銅雀
 臺に置いて、右と左に抱いて樂み度いと心がけて居ると實事に聴きやした、其故だから二女を尋ねて、其
 娘の親に金を遣つて買求めて曹操にお遣り被成ば、此度の軍は止められますぜ 周「へん偽言を吐きなせへ、
 それア他人の噂にするか知らないが、曹操がよもや其様な氣でも有りますまい、それとも何ぞ證據があり
 やすか 孔「ある所か、既に曹子建といふ者が銅雀臺の賦をこしらへたのを衆人が謠ひやす 周「ハア然かホ、
 其文章を貴君ごぞんじかへ 孔「エ、モウ數回も聴いたから、諺記で知つて居やすト是より孔明は、彼喬女を
 樂む文句を偽言に作つて周瑜に聞せる、其節周瑜は目をいからして、曹操の陣の方を白眼で齒をかみな
 ら溜息を吐き 周「ウヌ曹操めエ、大膽事を言やアがる、即時に見やアがれ、其方が首を切つて思知らせる
 ぞ、曹操めが 孔「モシ、其様に腹をお立ち被成ないでも能いぢやアございませんか、昔吳越の軍の時代
 に、范蠡が美女の西施を越王から吳王の夫差の許へ送らせて、終には夫差を亡した利害と同じ事てごせへ
 ます、然して見りやア、番氏の娘を曹操の妾に此國から出したといつて、其様に恥にもなりますまいのに
 周「イエそりやア然だが、其娘は當時ぢやア此國の先君公の夫人に姉の方が成つて居られて、妹は拙者が
 妻でございませぬ、貴君は御存じもあるまいが、曹操は二女を執心ならば此故を知つて居やせう、それぢやア
 拙者を亡して、先君公討虜將軍の夫人と私の女房を、姪樂ものにせうといふ存心で居ませう、憎い心根

の曲者だ 孔「エ、其娘達は當時は然でございませぬか、それとも知らず不躰千萬な事を申しました、眞平御免
 被成、寔に兪忽な事を申してお氣の毒な 周「ナニ、貴君に立腹は仕ませんが、曹操めが餘りな不法を思ひ
 立ちやアがる、モウ合點ならねへ、此國へ責めか、つて見やアがれ、來る軍兵を皆殺にして呉れないければ
 濟まねへ、孔明軍師も何卒軍義の助言をしてお呉ん被成ト是より吳の國の大將品張昭、顧雍をはじめとし、
 降參を勧めし者を叱り付け、程普、韓當、黃蓋などといふ英雄を勵まし、軍兵を調へ終に曹操と戦ひしと
 ぞ。

撰者春水曰ふ、夫周瑜は江東六郡八十一州の大都督にて、孔明にも劣らざる軍師なれども、愛念に
 依ては忽ち憤を發し、妻女の美麗を他人の犯さんと言ふを聴きしより、死を怖れずして大軍を隨
 へ曹操の百萬騎に的當せんと決定せり、まして師直の如き小人、右近を慕ひし愚痴の妬、意恨を深
 く判官を憎みし事、實に是なるべしと察せらる。

むかしより堪忍の二字を教訓の專一と教へ短慮を禁むること多く、尤道理至極の論ながら、又歴々の武家
 の御身には、只堪忍とのみは思召されぬ事もありぬべし、されば近き頃道二と呼ばる、心學者を、或諸侯の
 召呼び給ひて、心學を講じさせられしが、其節道二は鹽谷氏の短慮を引きて講じられしかば、其館の主君立
 上りて、道二翁の面を扇子にて手強く打ち給ふ、道二は其頃人々の敬ふ心學者なりければ、自然と心に
 威光もある様に思ひ居たる事なれば、大名の主君の所爲といへども、痛と不法を少し心中に横る氣色
 ありけり、其節主君は正然となり給ひ 君「コリヤ道二、其方は長袖同様の者ゆゑ、諸侯の側近く出る事を
 も免ざるゝは幸と申すものぢや、その賤しい身でさへ此方が面を打てば、心にいかり氣色を損じ、我を

無禮なりと思ふではないか、コレ鹽谷判官は由緒正しき大名だは、師直の悪言無禮、其座に切捨てんとい
 たしたは尤の事ではないかト御叱りの上、道二翁を其儘しりぞけ給ひしとぞ、實にも貴人高位の尊慮善惡を
 評せん事は、後世賤しき筆者の及ぶべき事にはあらじ、然れば鹽谷判官へ師直の過言失禮は、他人の見聞
 にも堪へ忍び難き旨趣に察せられたる所爲と推量られたり、既に判官の御懇意深き佐藤遠州君は、彼騷動
 の以前十二日の夜に入り、判官の御許へ見舞として御出遊ばし、判官御大切の御役に氣鬱も在らるべし、
 その氣を慰め申したく推參せりと被仰れて、御土産の品をもたせられければ、判官にも信友の御實意を悦
 びたまひて、遠州の君に御酒を進められ、互に御睦じき中なりければ、隔なくかたらひなぐさみ興を催
 したまひしが、其折を以て遠州君は判官の御側に人なきを窺はれ、彼師直の無禮ありし度毎の様子を察し
 在るよし言出でられ、しみくと御意見に及ばれしが、其一條を御次の間にて聞傳へたる千崎彌五郎、さて
 は主君の御大事、萬一君の御心に堪へ難くも思召す事にてあらば、君の手を下したまはぬ其以前に、我師直
 を打捨て、切死するか腹を切るかなさば、主君の家國にかゝる難はなかるべきかと、然は思へども容易に
 は計らひ難く控へしとぞ。

第十四回

漢土晋の豫讓は范氏といふ王の臣下なり、爰に智伯といふ人ありて范子を亡す、此節は豫讓智伯に従ひ
 仕へしが、其後趙襄子といへる人智伯を討して王となる、豫讓はこゝに至つて義心を勵まし、名を改め
 て所爲と咎を蒙り科人となり、圃を不淨掃する賤しき役を勤めて、趙襄子が雪隠に至るを待ちて、智伯
 の敵を討たんと謀る、しかれども業ならずして願れ捕へられたり、趙襄子仁心を以て其忠義を感じ、豫
 讓の罪を許し他國へ除けたりしが、豫讓は猶心を屈せず、身に漆を塗り髭を切拂ひ眉毛を抜捨て、癩
 病人と姿を肖し、乞喰の體をして晋陽縣といふ所の橋の下に伏隠れ、趙襄子の他所へ出るを伺ひ待ち
 しが、亦見顯されて討つ事あたはず、其時趙襄子は豫讓に向ひ、汝是程迄に身を苦め、智伯の爲に此身
 を討取り、忠を盡さんとする事逆れなれども、其以前汝が古主范子をば智伯が亡せしにあらざるか、其
 時は主の仇なる智伯を恨まず、却つて敵の智伯に従ひ、智伯の爲には幾度も此身を仇敵と付寛ふは其故
 あるかと難問へば、豫讓答へていふ、先主范子は我を平士用ゐ、智伯は我を國士用ゐられたり、夫婦人は
 己を愛する人の爲に化粧、士は己を知る人の爲に志を盡すといへり、此故に我智伯の爲には身命を
 捨て恩を報はんとおもふとありければ、趙襄子豫讓に衣服を脱ぎて與へ、豫讓はその衣服を劔にて貫き
 破り、仇を討つと思を遂げたりといふ、如斯なれば晋の豫讓の忠義は主人の賜物の高下を算勘て、相場
 次第の奉公、いはゞ金づくで忠義をするといふものなり、君は君の徳をなしたまはずとも、臣は臣の寔を
 盡さずばあるべからず、豈日本の大星氏と豫讓の忠義と競べて同じ事とすべきや、大星氏はさておきて、
 四十餘人の義士殿原の忠義も豫讓のはるかに上なり、且説義黨の其中に立林唯七と聞えたる人の母親於園
 といふは、鹽谷判官に乳を上げたる乳母なりしが、鎌倉の營中にて判官の御身の太變御切腹の後、翌日は
 説法洲の御屋敷を召上げらるゝと定まりしその前の日の事とかや、判官の奥方薰代御前の御殿にて、鹽谷
 の君の御幼年の節の事をさへ語り出し、愁傷いはん方もなく歎き悲み狂氣のごとく、奥方はじめ御側の女
 中も歎に敷をそへ、泪に壘も浮くばかり、悲の聲は隣家に聴えて哀の限を盡せしが、餘りにお園の狂

ひまはれば、蕨代御前も氣の毒に思召してや、御敷を止められ、其子唯七を呼出し、お園を介抱被仰付、なだめて其家へ歸されしが、唯七は母の風情を氣遣ひ、萬一亂心もなしたるかと思案じて家に伴ひ歸り、種心を慰れば、思ひの外に氣も鎮まりてか、例に替らず機嫌よく、其夜は御屋敷に住居ひし名残なりとて、母子盃を汲みかはし、晝のなげきに引替へて笑貌を催し、唯七には翌日立退の用意など細やかに相談し、頓て臥戸に入りけるが、其翌朝は一家中はや起出て家財を片付け、各屋敷を引拂ふ支度も既に調ふ頃まで、お園は例の氣性に似合はず、さもゆるくと寐入りしが、さらに目覺めし様子もなく、寐間の方の靜なれば、唯七は堪へ難ね母の伏床に走り入り「サアモシ母人さん、モウお起き被成ませんか、サア遅くなりました、御家中は大略立退く支度が出来ましたト枕の側へ近付きて、言へども何の返答なければ、驚き呆れ、常に似合はぬ母の朝寐、殊には宵に萬事の差圖、手遅にならぬ様と教訓あられし覺悟に變り、斯迄心を落著けて寐入り給ひし氣樂さよと、雨戸を練明け屏風を開き「サア母人さん、餘り遅くなりますヨト言ひつゝ、寐たる所を見れば、こはそも奈何、蒲團より枕元の疊へ流れて朱に染みたる血汐の色、唯七は恟りして「ヤ、ヤ、ヤ、オ、これは母人さん、氣がお狂ひ被成たのか、何故マア御自害とは情ない事を被成ましたトいふも泪に聲くもり、抱き起せど、死してより時刻も移り過ぎしと思はれ、身中に温氣の所もなく、咽を袈元まで貫きたる兼て用意の九寸五分、手元も狂はず強健の最期、勇士の母とは言ひながら、最目覺しき臨終も、孝子の身には悲しくて、狼狽まはるも無理ならず、兎てもかなはぬ母の亡骸、介抱の詮もあらざれば、是非なく死後の姿を繕ひ、邊を見れば一封に書置としるせし上書を、見るも哀れな母の記念と、手に取り封じをひらきつゝ、泪に翳む目を拭ひ、心周章で讀見る文言、

一筆中残しり、さて今日殿さまの御身のうへ思ひもよらぬ御事ゆゑ、途方をうしなひ驚き入り申候、馴れさせ給はぬ冥途の御旅、只御一人にて何ほどか御便なくおらせられ候はんと、死出の山路の御はこびを御察し申上候うては、はや惜しからぬ老の身を、せめては御供にしたがひまゐらせ、御咄の御伽ともなり候はんとおもひ詰め、斯こそなり果てり、其方の事も心にかゝり候へど、細やかに申しおさまらせず候、母のころを思ひやり候うて、御君々さまの御意恨をよくくわきまへ申上げ覺悟あるべく候、たとへ他の御方々の存念はいかにとも、御手前一人なりと心をつくし可被申候事、草葉の蔭にて見もし聞きもし候はんと申残しり、

一 綱部矢兵衛殿御内方より借置き申候會我物語三冊、紫のふくさにつゝみ袋戸に入れ有之候、早々御返し御禮たのみ入り候、小袖一ツ帯一筋は、りん女へかたみに遣はし度候、(りん女は下女の事なるべし) 其身の本意を達し候までは、するぶん堅固にいと申さるべく候。

唯七どのへ

母

撰者春水伏して申す、此文の文章雅といふべきものにはあらねど、長文ならで意味ふかく、我子に

復仇の意見自然と察せられてゆかしく、また文の末に、借本なしたる會我物語の事なども、心深く行届かれたる文句と察し給へ。

されば唯七は君と親とに俄に放れ、愁傷たとへるものもなく只茫然として在りけるが、亦憤然と氣を勵まし、斯る有様も誰がなす業ぞ、是皆高野師直が、君をはづかしめまらせたる御無念より發りし一條、おのれ師直其儘に置くべきものかと、勇士の一念頓て夜討の一番乗、功名ほまれの眞先がけは此唯七に有りけるとか、斯て屋敷を引拂ふ時刻に近きことなれば、心のせけども唯七は法の如くに其役向へ届けて、母の野邊送をやうやく假にいとなみしが、多くの家中種々に散りゆく先の心當も、さしかゝりたる難儀の混雑、上を下へとかへしたる騒の立退、家材雑具の持運に當惑難澁大方ならず、奈何なさんと評議の中に、織部矢兵衛と聽えし老人、兼て萬事に心得ある老練の士にありければ、昨夜の中に工風して、近き邊の船を雇ひ、多く集めて御屋敷の裏手につながせ置くのみか、假にするせし船載、諸家中達の目印と書顯したるいは分、其船々へ家財を積ませ、海手の岸を漕除けさせ、何の苦もなく數百人が立退際の手まはしよく、外間繕ふ當座の働、屋敷を請取る立合の諸御役も感心の賞美の事も少からず、別けて織部の家内には、綺麗に片付け床の間に花を挿け、又掛物も拙からざるを飾付け、煎茶の道具を備へ置き菓子箆をならべ、檢使の役の休足せらるゝ様にはからひ、其外諸事の取まはし抜目のあらざる引渡、さも奥ゆかしき立退の跡を情推量れば、寐覺よからぬ師直の行末安穩なるまじと、今浪人する人々の行狀よりぞ思遣る御役人のありけるが、案に不遠船印に付けたるいろはの倭假名、倭魂、大丈夫の思ひ極めし四十七、いろはの數の合じるし、夜討の模様をあらはして、自らなる定とは後にぞ思ひ合せける。

榮枯盛衰は人の世の常ながら、鹽谷家の滅亡は其主の放蕩惡行の故にあらず、其臣下の不忠なるより發りし事ならず、ひとへに師直の邪意によつて、兩家を亡す基となりしぞ歎かはしき事にあらずや。

(巻の七終)

正史 いろいろは文庫 卷之八

第十五回

人毎に一癖はあるものを我にはゆるせ敷島の道、と詠せし古歌に引競べいふにはあらねど、義黨の中にも行状に似合はぬ酒癖の最々可笑き癖ありて、後世の奇談となる人あり、其名を仲垣玄藏といふ、元來は秋津嘉家の藩中に芝多伊左衛門と呼ばる、人の舍弟にて芝多の部屋住なれば、媒人する者ありて鹽谷の家中仲垣氏の養子となりて其家を継ぎて相續し、仲垣玄藏と名號り、判官に仕へしが、平生酒を好みて酔はざる日は一年の中に一日もなき様なれば、更に武家奉公の役に立つべき人物ならずと、其正體なきを看る者は爪はじきをする人もありしが、鹽谷の君を始め重役の人々はこれを咎めず、却つて玄藏の能ある事を賞したりとぞ、夫を奈何といふに、彼玄藏が酒に酔うて居眠をするか、倒れて寐入込み前後を忘れ一向人事を覺えざる時に臨みても、用ある節は忽ち覺めて正しく是を勤め、又辯舌さわやかに決断はやく、他家へ使者の役などを申付けらる、時は、一言を承つていとむづかしき口上をも得心し、十方へ使者の役を勤めて滞なく、鎌倉の諸侯の御館にも、鹽谷家の使者仲垣玄藏の口上として評判にせられしほどの辯舌者なり、然れども其使を勤める役毎度大醉なれば、主家を立出る節のみ正然として、御屋敷を出て馬上立派に乘行く事わづかに半町ばかり、忽ち行儀亂れて馬の上に居眠をしつゝ、手綱もゆるみてしだらなく、馬は足のはこびを亂して

路草を喰はぬがまだしもといふ様なれば、供に従ひし者は、往來の者が笑ふを恥ぢて氣の毒になり、玄藏に向ひ馬上をゆり覺し、怪我あるなといへば目も開かず只首をうなづくのみ、一能いサ、何もかも承知して居るは、ア、引眠度、ムニヤ〜ト夢中の如くなれども、先の御屋敷の御門前に近付けば、御門番が其使を見て御玄關へ向ひ、門「お使者〜ト呼次ぐ聲を聞くよりも、衣紋を繕ひ顔色正しく、四邊を拂ふ威氣揚揚と、元來立派な上下著、見上ぐるばかりの男風體、玄關へいたつて行儀を調べ、御使者の間にて承答、人々感ずる例の辯舌、四方に使用して君命をはつかしめずとは是人をこそいふなるべし、斯て浪人せし後も好める酒は止む事なく、零落困窮の中にも、酔はぬ日はなき放蕩に、寒暑をしのぐ手當もなく、詮方なければ實家の兄の芝多氏へ合力を乞ひもし、乞はずも實の兄伊左衛門は仁義の侍、殊には父の遺言を思ひ忘れず、舍弟を愛し不便を加へて、幾度か玄藏の貧窮を救ひ遣はし、衣類も度々著せ遣はせど、忽ちこれを古著買紙屑買に賣代なし、酒の價となすゆゑに、芝多の内儀下女までもこれを誘りて見かすめけるが、玄藏は物の數とも思はず、酒をだに吞せらるれば例も機嫌の上戸にて、下女はしたにも挨拶よく、禮を言ひつゝ、元もひよろ〜ふら〜、可笑げな風俗が癖なる酒の咎、後には兄の伊左衛門も苦々しくぞ思はれける、然るに極月十三日、今日は朝より雪降出し、寒さはげしく北風は皮膚に石の針をさす如くに覺ゆる厚氷、軒のつら、に袖冷ゆる、その夕暮の事なりしが玄藏は例の如く、酒に寒さを防ぎても防難ねたる肌薄な、姿に著たる赤合羽、饅頭笠も白菅が煤びて糸のほつれしを、首に頂く主君の恩義、忘れぬ人とはなかく〜に見えぬ足元ふりうづむ、雪を蹴立てる酒機嫌、秋津嘉侯の御屋敷内、兄の芝多の門の口、よろめき込みたる勝手口、臺所の上り端、腰をドツサリ倒る、様になるを背後へ手をつかへ、舌もまはらぬ獨言、下女は夫ぞ

と看るよりも、傍輩の女と貌見合せ、一女は奥へ一女は立つて上り口。●玄蔵さま被爲入まし、今日はさぞお寒うございましたらう。●「オイ、深切に忝い、併し此身は此通り好物の酒で寒氣を何とも思はぬが、お兄上さんは何様ぢや雪のおあたりもないか。●「イ、エお寒さのお病もなく、今日はお上のお客さまで先程から御殿に御在遊ばします。●「ハア引左様か夫ではまづよしと、エ、然ならばお姉上さんは。●「アノお癪氣で寐臥てお在被成ますト奥より出来る下女が言へば、玄蔵は合點ながら。●「ムウ引此寒さでは雪あたりの御持病も發るはずだ、何卒早くお快氣お成んなされば能いが、それではお逢ひを願ふも御面倒だらうから、お目に不懸に歸らうト言ふも酒ゆゑ舌の根の、廻らぬほどに板の間へ、倒れかゝりて起直り。●「エ、引ト言ひながら膳棚の方へ指をさし。●「ソ、その茶碗をとつて被下。●「ハイお茶を上げますか。●「イ、い、や、只茶碗を借りて酒の毒味をするのだト勝の下より最秘らはしき古徳利を取出し、徳利の口に結びたる細にも泥の染みてやあるらん、徳利の尻はふすばりて捨物にせし器に等し。●「ソレ、爛を頼むも面倒だ、冷で一杯やらかさうト手酌に引請け續香み、舌打ちならし高笑ひ。●「アハ、ハ、ハ、此酒はお兄上さんの所へ土産に持つて来たのだが、お留守だからお毒察を仕過したせ、イヤ未少しは残つてある、併し最早奥へは上げられまい、其方達でも呑んで呉りやれト徳利を下女にさし出せば、さも否さうに下女は請取り、籠土の際にさし置きたり、玄蔵は身繕して。●「エ、引と、お上にお客が在つてはお兄上さんのお下りも遅からうし、お姉上さんも御病氣ではお暇乞も出来まいト獨言を言ひながら、下女を側近く招寄せ。●「イヤコレお冬、今此身が言ふ口上を失念せず、たしかにお兄上さんのお歸りのとき申上げてくれ、急度ぢやぞ。●「ハイ、忘れはいたしませんから早く被仰まし。●「然らば言聞ける、エ、引と、お兄上さんへ申上げる口上はナ。●「ハイ

●「昨年三月浪人いたしてより後段々々御厄介、お世話に相なりまして千萬ありがたうぞんじます、殊には酒癖のよろしからず、餘計に御苦勞も懸けましてございますが、此度漸う時節到來いたして西國の諸侯へ主取仕つて、國元の供を申付けられました、明朝出立いたしますゆゑ、お暇乞に罷出ました所、御留守にてお目に懸りませす残念に存じます、萬一此後お目に懸る事なく拙者死去いたしましたしても、御高恩の程は忘れ申させずト言ひつゝ、少し愁涙を催せども、お冬はいさゝか氣も付かず。●「なほ此後はお兄上さんにもお姉上さんにも、御繁昌被成ます様にとかげながらも祈念いたしますト言終つて立上り、脱捨てたりし菅笠を手にとり上ぐれど、來りし時結ばる紐を引きちぎり、輪も細紐も放れしかば今更に迷惑し。●「イヤこりやア行かない事をしたト笠を投捨て古びし手拭頬冠り、出行かんとすれば下女は呼止め、壁にかけた菅笠を採下し。●「ア、モン貴君、これでも召しておいで被成ましトさし出せば。●「イヤこれは心付忝い、ドリヤ急いで行かすばなるまい、其方達も無事で春を迎へやれト言捨て駈出す兄の家、これ今生の見をさめと、思へば引かるゝ後髪、血脈の兄に對面もなさず、急ぐは約定の夜討の用意、著到の時刻に遅れまじものと、勇む心に愁を拂ひ、積る雪路踏みちらす、跡よりうづむ白雪に、かげも止めず立去りしが、兄なる芝多伊左衛門は、其夜の子半刻に御殿を下り歸りしかば、内儀は出迎ひ挨拶し。●「アノ夕暮に玄蔵さんが被參れましたト下女に聞きたる通り伊左衛門に物語れば。●「ハテナ久しく參らぬから何様いたしたか、又極月にさしか、つて難澁の由を言ひに来るであらうと存じて居つたのに、押詰つて奉公に有付くとは、マア、僥倖な事ぢや、併し時分がらに似合はぬ西國行、合點が行かぬ口上ではある、大略それは供に行くのではあるまい、別段に西國の役目でも言付けられて當地を出立の事と思はれる、何にいたしても此寒

さ、道中も無難儀で困るだらう、何卒つゝ、がなく行く所へ著すれば宜いが、何だか案じられる事だトさすがに兄と弟の中、無始が推察の心にや、越方行末の事までも思遣りたる目上の慈悲、自然と涙を催すも一世の別と、明くる日はなるをも思はで休息と、氣を慰めに女房が、すゝめる酒にいさゝかは、氣鬱を忘るゝ其席にて、下女は先刻支蔵が、穢れし徳利へ酒を入れ、持來りしより手酌にて、呑みつゝ、歸りし可笑さを、時の興にと物語れば、伊左衛門は苦笑ひ「今はじまつた事でもないが、酒にかゝると寔に人間の情はない様だが、まさかには年中彼通りならば、鹽谷家で奉公も勤まる道理はないはずだ、けれど酒興と本心とは少し相違もある様だテ、又此身が了簡では見察の有る行狀といへば、弟の放蕩を他見に繕ふ様ぢやが、先達でも酒に酔つて臺所に倒れて正體なしに眠つて居たが、此身が他所から歸りし眼前、こまつたものと思ひながら、能々看れば大小を前へ引付けて、柄の所へ右手をかけ自然用心の體に察えたゆゑ、所爲と此身が足音を高くしたれば、忽ちに眼を開いて鐔口四五寸抜きかけしが、此身が貌を見て恥ぢたる顔色、其儘に俯いて又正體もなき風情、されども破落れし藤巻柄の刀心に似合はぬ刃の眞精、氷の如きたしなみは、武士の本意を忘れぬ覺悟と察して置いたが違ひもすまじ、何卒立身させ度いものぢやト語る間に時移り、はや丑滿の鐘の音の、かうくとこそ告渡る、此時刻には彼支蔵、同意の人々うち連れて、主君の仇と高野家の屋敷に押入り合言葉、山霞河竹の應對して、烈しく戦ふ最中なるべし。

第十六回

雪の翌朝、清閑に朝寐過せし其中に、極月も春もゆたかなるは、武家の屋敷の町方とは、風情も違ふ巳の剋

前、彼芝多の窓の下表の方の往來を、多くの人の騒ぐ聲にて「ヤアイ今咳辻へ行つたイ、早く來ねへかアイ引」「ヤイ、吉ヤ、此方先へ行くせ、其方の様に足が遅くツちやア追付いて看る事ア不出來ゼ、アレ向へ行くさうだア」「オ、イ、待ちなヨ引、此身が爲知て遣つたのに先へ駈抜ける事はねへやアナ」「ソリヤ、また前路の方へ歸るさうだぞ、怪我をするナ、おぶねへ」「ワア引、數百人の足音、ばた／＼ド／＼」ありやりやん、ヤアイ引ワア引ト木精に響く數萬の足音、芝生の里の町々に騒がぬ家もあらざれば、積りし雪を踏消して、地ひゞきなせし群集の物音、彼芝多伊左衛門は夜を更かして、家内中が寐入込んだる今朝の事、最初のほどは知らざりしが、轟きわたる窓の外、俄に目覺めて飛上り、胸をおどらす床の上、近所に火難の發りしか、何事やらんと寐間衣の儘、帯をしつかり直し、大小探つて腰に帯挟み、窓の戸さらりと押開けば、貴賤を不論雪路を踏みちらしつゝ、駈行く大勢、常業ならずと伊左衛門、家内の者を呼立て、何の故ぞと尋問る折しも、亦窓下にて往來の人聲「オヤ、鐵こ、お前は最早見て來たのか、何の事だか實正が分解つたか」「オ、金さんか早く行つて看な、寔に威勢が能いせ、何様なにり、しからう、今頼兼さまの御館へ這入る所だア」「エ然か、何が頼兼さまへ這入るのだ」「オヤお前は些も知らないのか、アソレ鹽谷家の浪人衆がナ、高野師直の屋敷へ夜討に行つて敵を討つて、今酒細の圓覺寺といふお寺へ引上げるのだとヨ、此身も何だか知らなんだが、今委しく其理害を知つた人に出合つて聞いたのだア、早く往つて見な、鎗の先へ首を突貫して、五十人ばかり行列で前後を用心しながら押して行くが、寔に立派だぜ」「オヤ、然か、すさまじい忠義な手合だナア、ドレ、早く往つて看様」「早く往きな、此身も未見て居たかつたけれども、家内に急用があるから歸るのだト行合ふ人の辻話

を、聞くよりいと芝多が胸に答ふる舎弟の身の上、昨夜来りし暇ごひ、他家へ奉公濟せしと言ひしは賊か偽か、もしや噂の仇討の浪人仲間に入りあつて、死ぬる覺悟の暇乞に、夫とは言はず来りしか、又その仲間には入らざるかと、案じながらも他人の思はく、自ら出て行かれもせず、奈何なさんと氣を揉みしが、家内に舊來召仕ひし逸助といふ男を呼出し「イヤ逸助、唯今往來の騷を承つたか」「ハイ、此御屋敷の御家中さま方も、駈出して看にお出被成たお方が大勢被御座ますが、元立蔵さまの御在被成ました鹽谷さまの御浪人衆が、揃つて殿さまの敵を討ちに師直さまの屋敷へ行かれたのが、本望を遂げて引きとつて来さしつたと申す事でございます、それに付きまして、サ昨夜貴君のお留主にお暇乞にお出被成た立蔵様も、其お仲間へ加はつてお出被成は爲まいかと存じます」「イヤ、や他の浪人達は譜代の恩義と、鹽谷家の爲に必死の働をいたしたらうが、舎弟立蔵は知つての通りの醉狂人、年中酒で正體なし、兎ても主君の仇討などと侍らしい働を爲ては呉れまいが、暇乞に參つた時刻に符合する様な今朝の風聞、萬に一つも其中へ、舎弟が加はつて居る事ならば、是まで他人に誘られた立蔵の酒癖より、俱々に背後指をさして笑はれた兄の此身が面目、先祖への孝行、此上もない大慶ぢやが、よもや然いふ心がけはあるまい」「イヤエ決してないとは申されませぬ、マア私が駈出して參つて看届けませうか」「さればサ、此身が申付けて見に遣はして、立蔵が其仲間には居らぬとあれば彌世間の物笑ぢや、其方が只何となく御門を出て町へ買ものに入る風體で、他人に知れぬ様に見て来て呉れ、些も早く急いで參れ」「ハイかしこまりましてございませト勝手にいたり、小買物の手籠を提げて、豆腐屋か八百屋へ走るおもむきにて、秋津嘉侯の常通用の御門を出るより一さんに走りて群集を押分け行く、其跡にても芝多は取つ置いつの胸の中、實に弟が西國へ仕

官にありつき發足なさは、今更不及事ながら、何卒奉公濟せしといひしは全く偽にて、義士の仲間に加はつて、今引上げたる人々の人數にまじりて居て呉れかし、南無春日大明神、當所神明宮の靈驗感得通れ武運のあれかしと、衣類を改め袴を着け、立關に立出で居間に座し、又立上り窓を覗き、内儀を呼んで何用か言付けんとし言ひもせず、臺所のかたへ走り、とつて返して縁側から庭へ下立ち、また立關へ走り出で、口の中にて獨言「ア、引埒の明かぬ逸助めだ、何所まで行きをつたか、早く歸つて舎弟の有無を告げれば能いのに、居るか居らないかを一目見れば知れる事を、何をいたして居るか、エ、引もどかしい、イヤこれは自身に出かけ様か、それも他人の見る目が憚りぢや、サテ何様したら宜からうぞト氣をあせりても詮方なく、逸助男が注進を今や遅しと待ちかけたり、かくて又逸助は主人の言付尤と駈出したる行先は、人立多き辻小路、おもふ儘には歩行れず、心をいらち立込みし人を押分けながら、行く向より休足の體を看たりし見物が」「モウ先へは行かれないぞ、頼兼様の辻番から棒突が大勢出て、棒を垣に組んで往來を留めて仕まつたア」「オヤ銀さんか、此身は僥倖と頼兼様の御門へ這入る所を見たが、誠にモウ勇ましい様だツけ、そして大家の事だから、不時の事でも萬事行届く様子だが、何でも強敵に働いたと被察て、不殘血だらけになつて居たぞ」「然か御門の内にもまだ遅刻も居るのかノウ、早く出て来れば宜いノウ」「ナニサ今に出て来るはなト行合ふものが種々の噂も自然と勇ましき、忠臣義士の人々を感じて賞める評判に、尾に尾を付ける啞八百」「オヤ、松さんお前何所へ行つた、見物ぢやアないのか」「オ、竹さんか、イヤ惜しい事をしたせ、昨日此身と同伴に行けば能かつた」「何故か」「ナニサ、此身ア敵討の在つた屋敷の近所に親類があるから、昨夜止宿て居て夜中に敵討を看に起きたアナ、イヤ寔に怖しかつたせ、敵味

方かたの箒はたきの手てが東西南北とうざいなんぼくに入いり亂らんれて、鯨くじら汐しほのころ天地てんちに震しん動どうして大山たいざんの一度いちどに崩くずれる、がごとく、此時このとき寄手よせての陣じん中ちゆうより、紺こん糸いとの鎧よろいに赤あか白しろ二段筋だんぜんの陣羽織じんわおりを著ちやくし、白柄しろがらの大長刀おほながたを水車みづぐるまのごとく振廻ふりまわし、○「コウ、そりやア何所どこの咄はなしだ」×「エこれが新道しんみちへ出る南無なんぶの講釋かうじやくヨ、一夜聞ひとよききに行いかないか、大さうに大入おほいりだせ」○「アハ、其様そのさまな事ことだらうと思おもつた、お前は兎角とかく啞おを吐つくから否いやだせ」×「ハテナ實録じつろくよりか空談くうだんの方が面白おもしろいはナ、しかし是これは實事ほんじつだが、まだ後陣ごじんの人数にんずは來こなんだか」○「オヤ頼兼よりかねさまのおやしきへ這入はいりつた外ほかにも仲間なかがあるのか」×「ある所ところか後の人数にんずの方が餘計よけいにあらアナト戲言たはぶごとのその折をりから、俄にはかに騒さわぐ諸見物しよけんぶつ」大ぜい「ソリヤア出でたぞ、アレ、アレ、一番先ばんさきへ太鼓たいこを持った人が來こるぞ」大ぜい「ドレ、イヤア實事ほんじつに來きたぞ、ワア引ひく、立騒たちさわきたる群集ぐんじゆの人数にんず、おびたゞしくも聞きえけり。

(巻の八終)

正史 實傳 いろは文庫 卷之九

第十七回

再說さいせつ芝多しばたの小者こもの逸助いつすけは、往來おうらいの群集ぐんじゆを押分おしわけて行ゆく向むかより、義士ぎしの人々ひと皆みな一樣いせの出立装束いでたちしやうそく、四十餘人よじゅうにんを三組さんぐみに備そなへ、行列ぎやうれつ正ただしく引上ひきあげ來きる、その真先まつきには辻々つじづの物見役合圖ものみやくあひづを兼對けんたいして、柄への付つきたる手太鼓てだいこを用もち意いなせし嘉津多かづた眞左衛門まひだえもん、杉谷半之丞すぎやはんのじやうの二人ふたり、衆人しゆじんに先立ままたつこと半町はんちやうばかり、四辻よつじにいたり左右さゆうの小路こうぢを見みわたり、敵かたの縁者えんじやの追手加勢おいてかぜい等のありや否いなやを見届みとけ、何事なにこともなければ立止たちとりて、彼合圖かあひづの太鼓たいこを取直とりなおし、家滿かみん賀流がりゆうの押おしが、りを打うちならす、尤もつと小太鼓こだいこなりといへども、表裏へうりの皮陰陽かかげんやうの定め、皮留かわどめの鉦かねの數かずを正ただして、天てんの二十八宿地しゆちの三十六禽さんじゅうろくきんを象かたりて、三十六鉦さんじゅうろくかね二十八鉦にじゅうはちかね其形そのかたちを不違たがへず、裏うらと表おもてに打うちつたるを、陽氣やうきを含ふんで嚴重げんじゆうに、ドン引ひくと九度ここのたび三返打さんへんうちつて後陣ごじんに知らずれば、先手中まきてなか備後陣びごじんの三隊さんたい、整々せいせいとし歩行あゆみをなす、其形相そのかたちいさ、かも油斷ゆだんなく、小勢こせいなりといへども容易たやすこれを打破うちやぶる事はなりがたしと被察かほける、其備立そのまへだての一番ばんには、

立林たちばやし唯七ただしち隆重りゆうじゆう

風間かま十次じゆじ郎光興らうみつこう

右みぎの二人ふたりは袖印そでじるしの白布しろぬのを以もつて、みたる鎗やを引提ひきひげたり、其次そのつぎには白無垢しろむくをもつて包つみたる首くびを鎗やの柄えに結むすびて是これを荷にふ、尤もつと六丁むつちやうの丁數ちやうすうにて手代てがりに持もつ事を定められたり、前後ぜんごにならぶ人々ひとは壯年しやうねんなるを選えらぶ、

いろは文庫 卷之九

み、中備には老人達を囿ふごとくし、又近松諫六、餘川勘平は重疵を惱みければ、笠輿に乗りて後に従ふ、其外淺手の者は皆歩行にて勇々しくも足並を揃へたり、されば逸助は玄藏のこと覺束なくはおもへども、萬に一ツも此列に加はりあるかと近くすゝみ、其同勢の先手より中備まで見わたす所に、仲垣氏の在らざれば、さては西國の諸侯に奉公濟が寔にてありけるか、怪我にも此人々に加はらば、例の酒にて足も亂れ、討死を遂げられたるかばかり難しと、又後の備の來るを見れば、此行列の第一番に先へ進みし仲垣玄藏、行年二、二十八歳、常の酔狂に引變へていとも勇ましき其出立、兜頭巾を脱ぎて袷に掛け、白布を以て顯巻とし鎧を引提げ來りしが、早くも逸助を見留めて聲をかける。逸「コリヤ、逸助、ハイ、ハイ、ハイ、ヤア玄藏さままでございますか、私はモウ、駈出して參りましたが、見物の大勢に押倒されて歩行れませんから、漸う只今お目にかゝります、ヤレ、はや寔におめで度ぞんじます、さぞお草臥被成ましてございませうと揉手をしつゝ、近付けば、逸「イヤさして勞れもいたさぬが、昨夜は折角お兄上さんの所へお暇乞に罷出た所、お留主でお目に懸らす、お姉上さんはお癡氣との事ゆゑ、其儘に立歸つて直さま牛島新田へ推參して、只今の退口ちやが、其方は何ぞ用事でもあつてこれまで參つたのか、逸「ハイ、イヤ外の事ではございませぬ、旦那さまが昨夜遅く御殿をお下りで、夫から貴君のお噂や何かで寔におそく御眠りしましたから、今朝ほどは例よりお目覺が遲うなりました所で、お屋敷のお窓下が人聲で騒々しくなりました、貴君方のお噂がございしましたから、旦那さまが私に貴君のお在被成のを見申して參れと被仰付で、それゆゑこれまで參じました、此お仲間へ貴君がお在被成のをお聞き被遊ましたらば、さぞお悦で被御座ませう、ヤレ、私もお目に懸りましたので寔に有りがたうぞんじます、逸「アハ、ハ、ハ、此玄藏が常

の酒興亂醉のみにて在りしゆゑ、敵討の連中には加はるまじとの御心配で被御座たらう、其方達も然存じて居つたらう、逸「ハイ、イエ、何様いたしましたして、何でも只今このお噂を他人の申すのを聞きますと、旦那さまは申上げるに不及、御家内様不殘私めも、急度貴君も御連中に被爲入るには違ないと存じまして、駈出します節に旦那さまが、貴君にお怪我はないか、定めて功名お手柄を被成たらうが、お聞き申して來いと被仰付れまして被御座ますといふ中に、玄藏は所持せし小笛と短冊を、兄伊左衛門への記念とし、逸助へは金子を遣はし、一行列におくれるゆゑ心せく、此品を兄上へさし上げて呉れ、又申上げる口上は、逸「ハイ、有りがたうぞんじます、逸「先に申す通り、お目に不懸にお別れ申すが残念に存じますと、さて浪人中種々御厄介を懸けましてはござれども、昨夜師直公のお屋敷へ推參いたして亡君の御無念を晴し、敵の印を申しうけ、四十餘人の同列の面々、其方が看る通りうち揃うて亡君の御菩提所、酒細の圓覺寺へ罷越し、一同切腹の覺悟に罷在る上は、最早今生にて御目に懸る事もあるまじく存じますれば、兄上姉上御揃ひ御機嫌よく御榮え被成様にとよろしく申上げて呉れ、其方も無事で奉公いたせ、イヤ遙におくれた、これはしたり、イヤさらばぞと言捨て、行過ぎたりける人々に走付かんと駈出し行く、逸助は主人の悦思ひやられて其身も嬉しく、他人の看る目も晴れがましければ、戰慄くするほど悦ばしく、問はずがたりに、傍へ向ひて、逸「モシ誰人も御覽なせへまし、これ這玄藏さまと申すは私どもの旦那の御舎弟さままで、臨谷のお屋敷中へ御養子に被爲入たお方さまですが、此度斯して敵討にお出被成て、モシモシ、モウお前の賞める旦那は、被看被成、一町ばかり行過ぎてお仕舞ひ被成た、逸「アハ、ハ、ハ、夢中になつて居るさうだといはれて氣の付く逸助が、ビツクリせしが氣も勇む、仲垣氏の勇ましさを、いでや旦那へ注進

と、飛ぶがごとくに秋津嘉侯のおやしきさして走歸る、此時芝多伊左衛門は、舍弟玄藏の音沙汰を善か悪かと待詫びて、奈何と玄關へ出ては奥へ走入り、表の窓を覗き見つ、また玄關へ立出る、折から息もせはしなく走歸りたる逸助が、玄關へ倒る、様に手を支へ、「旦那さまぞお待兼ね被成ましたで被御座ませうト言はれて、主人芝多は胸をギツクリ四邊を見廻し、「オ、逸助が大儀で有つた、何様ぢや玄藏は看えまいナ」逸「イ、イエ五六十人の其中に、影も似寄の者もないか」逸「イエ、それは思しめしが違ひます」伊「シテ玄藏も其人數に加はつて居つたのか」逸「マアお悦び被遊まし、前代未聞の評判ゆゑ、諸方のお武家町家の者も、貴賤老若差別なく押出しました詰見物、此所の木戸際彼所の辻、往來留にことなりませず、群集の中を漸うに押分け參る向から、物見のお役太鼓の合圖、前後に心を配られて、三段ばかりに備を立てられ、何れも血汐に染衣も適れなりと諸人の噂、手疵のお方重疵のお方も交雜御連中、寔にお勇ましい御同勢」伊「ナニ手負の人もありと言ふか、玄藏の手疵は淺手であつたか」逸「イエサ玄藏さまは第三番目のお組の先立、例の御酒の御機嫌とはうつて變つたお出立、兜頭巾を背後に引掛け、白布疊んで御顔巻、御顔色も潤はしく、御装束は一様ながら一際勝れて御元氣よく、毎度見上げた藤柄の御大小に引きかへて、光り輝く金拵、血付の鎧を抱込んで四邊を拂ふ御勢、目早く私を御覽じて、逸助なるかと被仰つたお聲を聞いた其嬉しさ、いまだに胸がダク、いたして、下郎の肩身も廣いやうにぞんじました、ア、引寔にお目出度い事で」伊「オ、出かした忝い、ヤレ、夫は頼母しい、シテ手疵も附けない様子か」逸「イエ此も怪我は被成ませんと言ひつ、懐中より短冊と呼子の笛をとり出し「へい是をお遣はし被成ました被仰りますには、途中と申し討死と覺悟いたした身上ゆるゑ、何にも貴君へお上げ被成ものが被御座ませぬ

と被仰いました、私には此御申著に金子のはいつた儘被下ましてト跡は涙に咽入る言葉、賤しき身にも忠臣の感に堪へたる歎にや、兄伊左衛門は肉身の舍弟の譽、其身まで面目となる武士の冥加にかなふ悦び涙、小踊をして立ちあがり「逸助、大儀ぢや、休息いたせト奥へ立入る折からに、内儀も是を聞付けて、俱に悦ぶ玄藏の昨日に變りし忠義の鑑、末代までの家の譽と辭ぐ詞家内中、これまで陰にて誘りたる下女も果る、侍の、いで鎌倉といふ時は寔の魂顯はる、奥ゆかしさを今ぞ知る、噂も忽ちお屋敷中へ取沙汰をして、追々に芝多の方へ走來り、舍弟御の御忠誠、當秋津嘉侯の御名前にも、自然なる武士道の手本となる、御働、殿さまにも御満足に思召さる、所爲なりと賞美をせざる者もなく、果は忠義をしたふの餘り、何ぞ記念を賜はりたしといふ人あれば、あやかり度しと被玄藏が脱捨てし饅頭笠の古きまで、拜し頂く侍氣賀、名殘に持參の古徳利の、底に染みたる酒まで好んで貰ひ、頭上に塗りて禮言ふ人もありしかや、珍重さるれば伊左衛門も、兎略にならぬと徳利まで、記念の品と紫の帛紗に包む家の重寶、是ぞ仲垣玄藏が徳利の傳記と後の世まで語り傳へし譽なり。

此一條は予が友人舌耕者なる文車が常に述ぶる所を、縮文に綴りて婦女子の覽に備ふものなり。

第十八回

爰に義黨の身をやつして復仇の時節を待ち、假住居をせし住所と、替名のあらましを尋ね、後の世までもその辛苦を察しやらるゝ語り種とすれば、古書を正して違はざるものを記す、

鎌倉の町の内にて、徳町三丁目小山屋彌兵衛といふ者の裏にしつらひありし貸座敷に、宿借主となりし

は、
 ○垣見 左内 實は 大星力彌
 ○垣見 五郎兵衛 (左内が叔父なりといふ) 實は 大星由良之助
 ○専谷 仲庵 (醫師なりといふ) 實は 銀寺十内
 ○又 四郎 實は 杉谷半之丞
 ○原田 斧右衛門 實は 牛尾田政之丞
 ○森 清助 實は 近松諫六
 ○三田村 次郎吉 實は 三村次郎右衛門
 外に大星の若黨二人、近松が江州の在所より連れて來りし僕一人、都合十人貨座敷に在りしとぞ、
 新孟子町六丁目庄屋吉右衛門店、
 ○神道者田口一直 實は 霞田忠左衛門
 ○田口 左内 實は 霞田澤右衛門
 ○同居 和田元興 實は 原郷右衛門
 同町四丁目和泉屋五郎兵衛店、
 ○山彦 嘉兵衛 實は 若村寒助
 ○醫師 三橋隆貞 實は 早稻久太夫
 ○郡 民八郎 實は 向島八十右衛門

○専谷 又助 實は 岡野琴右衛門
 ○専谷 小市 實は 早稻孫九郎
 日雇小者一人、都合六人同居、
 同町四丁目庄屋七郎右衛門店、
 ○中 田藤内 實は 風間十次郎
 ○原 勘助 實は 全馬三郎兵衛
 ○和 庄喜助 實は 風間喜兵衛
 ○同 新七 實は 風間新六
 同町五丁目秋田屋權左衛門店、
 ○山本 長左衛門 實は 為森助右衛門 (妻子同居)
 芝生濱松町拾物屋惣兵衛店、
 ○高島源野右衛門 實は 箭多五郎右衛門
 婦多川風呂江町搦米屋太兵衛店、
 ○醫師 西村丹下 實は 尾久田定右衛門
 ○西村 清右衛門 實は 尾久田孫大夫
 定右衛門は元近松諫六の舍弟なりとぞ、復仇の前霜月の初旬、尾久田の妻子を外藤伊織殿の御長家へ呼取り置かれしといふ、外藤家は鹽谷判官の外戚なり、尤尾久田氏は縁ありしゆゑなりとか、
 いろは文庫 卷之九 八五

芝生玄好町の住居、

○内藤 十郎兵衛

此いろは文庫二編目に記したる奇縁の安宅を、後に玄好町へ引移りしか、別宅か、未考、

○富田 源吾

下部一人を仕ひしといふ、如斯なれば、安蘇貝が店主にて浦松同居といふのみ、安蘇貝は安宅に多日在りしなるべし、

南八條保里稻戸町平野屋十左衛門店の裏家に住む、

○吉田 庄兵衛 (尾竹の浪人と申立)

○脇差屋 新兵衛

○清水 宇右衛門

○醫師 春庵

右は同居せし如くなりしとぞ、

本庄佐谷子町紀伊國屋何某店、

○長江 長右衛門

○水原 武右衛門

○小山 清兵衛

同三津根何某店、

實は 安蘇貝十郎左衛門

實は 浦松三太夫

實は 片岡傳五右衛門

實は 大鷲文善

實は 矢藤右衛門七

實は 貝賀彌左衛門

實は 織部安平

實は 餘會川勘平

實は 小山田庄左衛門

○杉野 九兵衛 (後に逢老町にて樂屋となる)

○渡邊 七郎次

同 婦辰根逢老町米屋某店、

○米屋 五郎兵衛

右は表店にて細類太物類を賣りしとぞ、

○小豆屋 善兵衛

始は扇子を賣り、後には穀物、菓子類を賣る、

猶此外に變名せし義黨の人々、主となり家來ともなり、昨日今日住所を轉じ、活業を替へ姿を變じて艱難辛苦し、敵の内外をしのび窺ふ、忠義計略種々なれば、必如斯とのみは思ふべからず、住居も諸所に變りしをことごとくは記さずと察したまへ。

今更いふにあらねども、四十餘人の忠臣義士を容易く思ふ人々の爲に又々評すべし、後世にも忠義孝道を賞めらるゝ人多けれど、忠孝全くして法にそむきしといはれ、切腹して公道を立てねば、則ち亂臣となるゆゑ、兼て功なれば死刑になるを覺悟の復討、前代にもまた後世にも有りかたかるべき人傑なるべし。

何事も皆偽の世の中に死ぬるばかりを定なりけりと詠せし歌の意にも似たるか、死ぬるを心の寔と定めて説くにいたれば、命ほど最惜しきものはなきにやあらん、されば三月鹽谷侯の城中にて城を枕に討死せんと言ひ、或は殉死を遂げんと決定したる者、又は其後山科の大星が隠家に尋ね至り、追盟(追つて盟をしてその仲間へ加はる事なり)せんと言ひし者凡百餘人なりしが、既に道義を發して其際に臨

實は 鳴野十平次

實は 嘉津多眞左衛門

實は 相原江助

實は 千崎彌五郎

み、逃去違盟の者六十餘人、是等の一人々も發念は君恩の深く重きを思ひ、其列に入れどもさすが命の惜しければ、恥かしと知りながらも、約を違へて逃隠る者ならずや、其不義士の多き中に、過去りし舊き恩を感じ不忘、新に盟の人數に入る勇士は、實に絶世の人傑古今無雙の忠烈といふべし、其人々には、

○不破勝右衛門

舊年以前の浪人なり、

○風間新六

十四年春二月の浪人なり、

○風間新六は風間喜兵衛が次男にて、叔父の里村伴右衛門が養子となり、養父とともに浪人す、東に下りて瀧元但州侯の藩中、中堂又助といふ人の許に食客となりて有りければ、鹽谷の祿をうけたるにはあらざれども、實の父喜兵衛と兄十次郎が義黨なるによつて、大星に種々と説いて盟の連中に加はりし英雄なり、

○岡野九十郎

追盟の人 改めて二代の金右衛門

○矢藤長助

同 改めて二代の右衛門七

右の如き義心の人々に引變へて違盟の者六十七人あり、但この名目の中には不義不忠とも定め難き異説の士十餘人あり、夫は拾遺にしてくはしく出すべし、先約束を違へて盟を破りし面々を其儘にしるせば、

- | | | | |
|---------|--------|---------|--------|
| 奥野將監 | 高谷儀右衛門 | 進藤源四郎 | 河村傳兵衛 |
| 小山源五左衛門 | 粕谷源左衛門 | 田中權右衛門 | 佐藤伊右衛門 |
| 長澤六郎左衛門 | 長澤喜右衛門 | 多藝太郎左衛門 | 豊田八太夫 |
| 各務八右衛門 | 里村伴右衛門 | 陰山宗兵衛 | 榎戸新助 |

- | | | | |
|---------|---------|---------|---------------|
| 灰方藤兵衛 | 上島彌助 | 渡邊覺兵衛 | 山上安兵衛 |
| 幸田與惣左衛門 | 仁平郷右衛門 | 渡邊佐野右衛門 | 川田八兵衛 |
| 久下織右衛門 | 猪子理兵衛 | 田中六郎左衛門 | 酒寄佐兵衛 |
| 梶半左衛門 | 高久長右衛門 | 松本新左衛門 | 近松貞六 |
| 岡本次郎左衛門 | 岡本喜八郎 | 田中代右衛門 | 進藤源吾 |
| 大石孫四郎 | 川村太郎左衛門 | 田中鹿右衛門 | 地屋武右衛門 |
| 三輪喜兵衛 | 三輪彌九郎 | 小山彌六 | 井口半藏 |
| 山羽理左衛門 | 嶺善左衛門 | 木村孫右衛門 | 前野新藏 |
| 粕屋五左衛門 | 高田軍兵衛 | 小幡彌五右衛門 | 木村傳左衛門 |
| 杉浦順右衛門 | 井口忠兵衛 | 生野十左衛門 | 上田三郎左衛門 |
| 平野半平 | 佐々小左衛門 | 中野理兵衛 | 中村清右衛門 |
| 鈴木重八 | 田中貞四郎 | 矢野半助 | 月岡治右衛門 |
| 毛利小平太 | 小山田庄左衛門 | 瀬尾孫右衛門 | (此瀬尾は大星の家來なり) |

右の六十七人に又ことごとく異説あり、殊に義士の中なりける千崎彌五郎が、這不義の人々を論じ注したるものあり次の巻に寫し出せり、看官よろしくこれを讀むべし。

(巻の九終)

いろは文庫第四編序

諸先生流義に依つて字體はいさゝか變れども、心は不違
 忠臣義士の苦辛を世々に書殘されて、士道の手本となり
 しより、今は彌是に習ひ、虚から出でたる實録に諸家
 の秘書さへ自然顯れて、よき大星の光輝く誠心奇謀、
 年々歳々聴く毎に耳新なる物語、もらす事なくうつし
 留め、文庫に久しくをさめ置きしを、其儘筆耕に雇ひ綴
 れば、夜討の前後入亂れ、はるかに以前の過越し方をく
 り返して記す巻も多く、初心の看官に解けかぬる條下も
 定めて有りぬべし、能く字つゞきを讀みならはせ給へと
 願ふのみ。

爲永春水誌



正史
實傳

いろは文庫卷之十

第十九回

千崎彌五郎則休が書殘せしといふ、憤注絶纒自解とか題號したる書に曰く、

奥野將監は、逞義して、其家の祖なりし山城半左衛門といふもの、武功を貴ぶ、然れども何故か鐵石
 心忽ち瓦礫のごとく碎けて、空しく不義に落入るものなり、川村傳兵衛、佐藤伊右衛門、進藤源四郎、
 小山源五右衛門は俱に忠義を抱く事金石の如しといへども、節に臨んで其意を忘れたる事雪霜の朝日に
 向ふと同じ。

右の文をはじめに出し、衆士の評をことごとく載せたれども、此小本を綴る本意は、童蒙の伽なれば、理
 窟を厭ひてくはしく寫さず、只引用の旨趣を知る人にこそと思ふのみなり、されば後の世にいたりて先哲
 の詮穿種々あれど、多くは推量の説にして、其頃の風情を深くはかり知る事難かるべし、彼大星氏の仇に
 心をゆるさする偽の放蕩淫樂といふ事は、當世になりてこそ諸人も知るなれど、復讐をなさざる以前は
 義士の連中にてさへも謀計とは思はず、實に大星も淫欲色情になづみ溺る、やうに了簡せしは宜なりとい
 ふ、味方の者にも然思はる、ほどならねば、仇の親族の、しかも忠勇名臣の間者を欺くことを得らるべき
 か、又實に義士の面々もわづかの月日の間ながら、婦女子の爲に樂をなせし者すくなからず、但復仇

の際に至つて其恩愛を速に思切つて、死を善道にいさぎよくしたるのみ、浪人の最初より悉く禪宗大悟の出家人の如くならんや、色は色として樂み、忠義の志は別に命のあるに等しく守りしなるべし、殊に大星が酒色の遊、放逸なる淫慾を慎みしといふは、其忠信の美を最真する人情より出て、賞譽するの過ぎたるなり、全く美女を愛して狂人のごとく、本心さらに他の念はなかりしとぞ、其愛せし婦女の多き中に別けて心に叶ひしは、山城國伏見の里撞木町の遊女屋笹屋清右衛門が抱の全盛浮橋と云ひし美女、後に夕霧と名を改めたる遊女に心をうつし、晝夜の境もなく酔倒れ、金銀を費して寛潤の酒興大壯なるは、今も猶彼地の口碑に残る、されど伏見の撞木町も安永の末までわづかに昔の節を残し、笹屋といふは殊に大家にて、その頃も夕霧の三味線、大星の文などを秘藏して有りしが、彼家の座敷鴨居の上に、大星の好か欄間を細工人に誂へ、山科より伏見までの景色を彫らせ透しにしたり、又階子も大星が好にて巾一丈にこしらへさせ、天井の板も奇木を選びて張らせしが、或時酔狂のあまり天井の板に大文字の落書をしたたり、此類の珍らしき舊跡多かりしが、其地火災によりてあとかたもなくなりゆき、人住まぬ草原と變り、また寛政のはじめつきた二三軒の遊女屋を再興せしとぞ、然るに彼笹屋の天井の板は奈何にして火難をしのぎ残りたるにや、後年大星の自筆の戯れ書とて見せものに出したり、實に紛なき正筆なりしかば、好事の雅人これを求めて屏風に造りしは、天明年中の事とかや、又云ふ、大星が遊里に遊ぶ隠し名をば、ウキ様と呼ばせしとぞ、北窓瑣談にくはしく記されたれば、其細やかなる讀みて知りたまへ、實に大星が浮れ遊の甚しきを、姪欲深きと察してや、或時小山源五右衛門、進藤源四郎の二人は、山科の大星が隠家にいたり、酒盛遊びて大星も大に酒興に入りし時になりて 小山「トキニ、モシ由良さん、夕霧よりも百倍

の美女が近所に在つて、しかも素人娘だが、咄相手に被成氣はなしかネ 進藤「オ、ソレ、例の娘か 小山「於輕女が事ヨ、何様も餘程可愛らしい娘だぜ 由「アハ、、欺かして笑種に爲るのか、御免だノ 小山「ナニ、何様して、何を吐くものか、寔に美嬢で、殊に些線續の人に頼まれて居るからヨ 由「アハ、、何を言ふか當にはならないぜ 小山「アレサ實正だヨ、疑はしくば先の名前を咄しやせう、イヤ併し、さうしたらば此身達を出抜いて、口入なしに直に出かけるだらう 由「イヤ、其様な賤しい心は出さない、實正の事ならば禮金を早速に渡すから取持つて呉れなせへ、實は此頃少し夕霧に倦が來やした 小山「其様ならば其娘の宅をも明しやせう、二條通り寺町の二文字屋治郎左衛門といふ者の娘で、年が十八になるが名を於輕と稱ひやす、寔に何様も人品の能い婀娜な風俗で、其癖濃厚實情のある色白な肌目細かな、眼がすゝやかで鼻筋が正然とした、口元のかはいらしい 進藤「コレサ、最早大概に賞めて置くが、餘り賞めて又賞損つちやア行かないぜ 由「ハ、、小山氏は、浪人の活業に奉公人の口入所をすれば宜いノ 小山「イヤこれは失禮千萬な 進藤「トキニ今ツから寺町へ行かうぢやアないか 小山「ム、然しやう、サアサア由良さん出かけなせへ、ト互に酔うたる興に乗じて、由良之助を伴ひ出て、彼二文字屋の娘於輕を引合せしが、兼て進藤小山が相談ひ置きし事と察えて、由良之助を大切にとりあつかひ、頓てこれを縁として兩親にも得心させ、終に於輕を大星の妾とこそは定めけり、これも宿世の縁なりけん、お輕は金のゆゑに身を任せるといふにはあらで、由良之助の年の其身とはるかに違ひたるを厭はず、その情こまやかに契を籠めて、束の間も放れ難なき風情のみかは、心の誠を盡す事、釋迦も孔子も斯までに、慕はれたらばなかく、迷ひもすべし愛憐も、深くあらんと他人も噂にしたりける、斯ては小山進藤がお輕を大

星に引合せし様なれども、早其以前に由良之助は此娘と馴染めてありしといふ、夫を奈何と尋ぬるに、彼二文字屋の娘お輕の家の丁稚が、門口を朝早く掃除するとて、脇差の落ちてありしを拾ひ、「イヤ〜脇差を落して行つた人が有るさうだ。」
 「ドレ〜お見せト丁稚の拾ひし脇差をとつて、情とながめ。」
 「イヤこれ毎度此處の表を酒に酔つて、よろ〜倒れさうに歩行て通るお侍さんのだヨ。」
 「へ何様してお前さんは其脇差を見覚えてお在被成ますネ。」
 「アノネ、此脇差は先日も彼お侍様が、朝早く正體なく酔つて通りながら、爪突いて轉びさうになつた節落して知らずに行くから、私が拾つて差させて上げたから見覚えてゐるヨ、それとも違ふか知らないがネ、コレお看、鐔の際の此丸くした金物に二ツ巴の紋が付けてあるものウ。」
 「なる程然でございますト丁稚は鞘を抜きはなし。」
 「イヤ〜眞赤に錆びて竹籠にはおとりませ、此様な腰のものを差して歩行お侍が何處にあるものか、アハ、ハ、ハ、是ぢやア紙を一枚切る事も出来ないのだ、笑ふを聞付け、お輕の爺親治郎左衛門は奥より立出で、「コレハシタリ小僧ヨ、ナゼ鞘を抜いたのだ、お武家さまのお腰のものは魂ぢやといふは、ドレ〜龜末にしては濟まぬ此方へ渡せ、即時に其お侍がお出被成たらんとする、不躰千萬な事をといふ折からに、娘は目ばかり表を見て駈出し、「モシ〜旦那さま、貴君はまた此間の様に、お腰のものをお落し被成はなされませぬかト問はれて門に立留るは、立派な姿のお侍。」
 「イヤこれは面目ない事ト四邊を見まはし。」
 「實に落したに違ないが、他人の噂になつては外聞が悪い、萬一拾つてあらば内々で、何卒渡して貰ひたいト小聲にいへばお輕は莞爾、「然様ならば、マア此方へお通り被成ましたト家内へ伴ひ入りければ、治郎左衛門は其由を承知して早速脇差をさし出すゆゑ、お武家は請取りて押戴き。」
 「イヤこれは〜千萬、忝い、實は此通り定紋を金象眼にいたしある。推

ゆゑ、他人に拾はれても直に目印があるから、世間中へ恥を言觸される事ゆゑ、密に今朝尋ねて歩行所でござる。」
 「エへ、ハ、ハ、ハ、大分の御酒機嫌でお取落し被成ました事と察えます。」
 「ハ、ハ、ハ、お察しの通り大醉に正體なくなつていたした事、乍併お聞及びもござらう、此身事は。」
 「へい、たしか池田久右衛門さまと當時御名號ます山科の。」
 「さればサ、其通りの身の上、以前は大星由良之助と申して千五百石の祿を領して居つた事、いかに浪人の後なればとあつて、腰の物を途中へ落すなどと申す事を言觸されては先祖へ濟まず、同じ浪人の古傍輩に聞えても恥かしい義、何分御沙汰なしに頼入るト深く恥ぢて禮を述べ歸りしが、これを縁として段々心易く出入をし、元來過分の金銀を遣ひ、一文字屋へも多くの徳分を付けて交情りしかば、家内中の者どもが大星を大事に敬ひ、酒食の馳走毎度にて、大星氏も其度毎に金銀反物を土産に持参し、厚く懇意を盡せし中に、いつしかお輕と馴れしたしみ、深き中となりて在りとも知らず、小山進藤等がお輕を媒せしこそ可笑きことならずや、此一條を押しはかりても、反問苦肉の遠計、なか〜に容易く察らるゝ所爲にはあらざりけり。」

古人の善惡忠不忠の傳にも、是非の沙汰一概には評すべからず、惡に似たる善あり、不忠の様な忠臣あり、亦其人々の幸不幸嗚呼歎すべし。」
 夫主君を諫言して争ふは、戦場の一番鎧を勤むるよりもはるかに勝る忠臣なれども、多くは其功空しくして、君に惡まれ難を蒙りて用ゐらるゝ、事最稀なり、且宜しからぬ評判を承けし主の下に立つ家來は、忠義を盡していのちを捨て、他人是を賞める事なく、主と俱に世間の憎を請けて謗らるゝは、若箇か口惜しき思なるべし、爰に師直の家老職小林平八郎と聞えし人は、情も深く仁義の士にて、其忠臣たる心は四

十餘人の輩に勝り、亦武勇力量古今に秀でたり、大事に臨みて魂騒がず、夜討の人々と戦ひ死を潔白せられしを聞傳へ、遺憾の餘り聊外傳の奇事をするして、依怙最良あらざる看官の一覽に備ふ、
 ○野末も當時は花柳、ものいふ杏の娘などが住ふ街となる所、東に珍らしからざれば、昔をいへど夫ぞとは思はぬ人の多かりけり、爰に野中の井と呼びしは、谷中三崎の邊にありて、誠には野中の井戸なれば、その儘に名を呼びしとかや、往昔柏木といふ遊女のありしが、契りし男に離れて陸敷入なければ、此所に哀なる庵を結びて三年ばかりを過せしが、了にはかなくなりぬるを、里人の哀れがりて、その傍に埋み、櫛の木を植ゑて墳墓の印とし、卒都婆を立てけるが、何者か其卒都婆へ、

かひぞなき野中の水の哀れさは消えて跡なき妹が面影

其時植ゑし櫛の木は古木となりて今にあり、瘧病を煩ふ者その木のもとに行きて立願すれば忽ち平癒といふ、彼庵の傍の井戸も今にあり、是を野中の井と言傳ふト惣庵子名所大全に記したり、(惣庵子は元祿十五年三月上木の印本なり) 其頃ははや名所となりし野中の井戸、夜も更渡りて月影の水にうつるも物淋しき、井げたによりて手を合せ、涙にむせぶ娘の風情、側に付添ふ若き男も、同じく泪に噎びつゝ、互に手と手を採りかはし、既に井中へ飛入らんとする折しも、柏木塚の木蔭より走出でたる一個の武士、忽ち男女の帯背を採つて後邊の方へ引留めける。

吳竹の根岸とかいふ里にさゝやかなる家の一構ありけり、生垣には春秋の草花おのがまに咲亂れて、風に散る杏は垣をめぐりて流る、音なし川の水に浮び、落花流水心あるが如く、自然の風雅を備へ、元は綺麗に造りし庭なるべきが、當時は住人もかはりて茅が軒端の古び、所々へ草生茂り、常に菖蒲の節句の儼にやと疑はる、此頃此宅に住む人は、程近き廓に在りて松の位の全盛なりしが、年季の數もわづかになりて、久しく馴染みたる人と縁を結び、其人の誠心を盡すはからひにて身儘とせられ廓を出て、直様此所へ來りしが、兼て聞傳へし男の住家とは思はれねど、外珍らしき新世帯に何事も心づかで、夫の留主は只一人、昨日に變る淋しさは、いはん方もなく徒然なれば、何となく越方行末の事を案じわびしが、所爲なき儘に四邊を詠め、柱に掛けし三味線をとつて調子を合せ、中音に唄ふ一節は松の葉の替唄、

上略「日本堤にこがれゆく、道もこゝろもまんまるな、かぐみいらすの衣紋坂、からかさ賢やほとゝぎす、雨のふる身のわが袖も、下谷うへの、山かづら、かゝる戀路はおぼつかな、胸にうかめるあだ事を、おもふ間もなく行く水の

ト唄ひかけしが心の中に不圖うかみたる男の身のうへ、夫ぞと明して告げねども、我身が廓を出でし頃より、家業の損失不都合の續きし事のありもするか、萬事に付きて華美なる人が、他見も繕飾も捨果て、此所の住居も過ぎし節、噂に聞きし別荘ならず、近頃俄に能き家をば他人にゆづりて此家と、かへてたしかに假住居、商店の本店も、今は兩賣手支へて、思はしからぬ事のみなるべし、此程日毎に店の方へ行くと言ひつゝ、出行けど、懐中金さもしき其體は顔色にさへ見ゆるものを、さすがに此身へ恥かしく隠す心は如何ばかり、悔しくもまた本意なしと、胸を痛めて朝夕に氣をなやまして在るならんと、苦界に在りし粹の身に、案じ過しも善惡に、馴れて苦勞をするならんか、既に其日も黄昏れて、深山の森に歸り行く群鳥の聲も何となく、常住よりはいと哀に聞え、心細き事いはん方なし、折から歸る夫の足音、はやくも知りて走出で竹の折戸を引きあけつ、女「オヤ今日は遅うございましたネエ 男「エ然ヨ、用が不調から諸方歩行て遅く

なつたアナ、亦今一度行かなければならないと言ひながら家内に入れば、女房は方燈を出して火をともし
 雨戸をしめて「女」モウ今夜は他所へ行くのを止に被成ナネへ、何だか今日は胸さわぎがしたり悲しくなつた
 りして、先刻から獨で涙を落して泣いて居ましたものウ「男」然か何故だらうノウ、大略此様な淋しい所
 へ来たものだから氣の鬱憤のだらう、不日店の方へでも行けば氣が晴れるはナ「女」イ、エ淋しいのも不自由
 も私やアかまはないが、何だか此節はお前の顔色が悪いから案じられてならないのに、お前様は私に隠し
 で心配でお在だから、誠に苦勞でなりませんヨ「男」ナニ何も隠して居は爲ないが、誰人ぞお前に何とか此身
 の事を咄してもしたのかへ「女」ナニ誰も何とも言ひはしませんかネ、何様も朝晩氣を付けて察するに、お前様
 は多分苦勞があるに違ないと思ひますは、若も然ならばその様に、私にも明して聞かせてお呉ん被成ナド
 いはれて男は胸ギツクリ、心の底を知られしかと思へば悲しく、眼に涙うるむを吠に紛らし「男」ナニ其
 様に案じて呉れる事はないはナ、併ながら斯して居てもつまらないから、此度思付いて一番大利潤を仕や
 うといふ算段だが、萬一其商の都合に依ては旅へ立つ様になるも知れないから、左様思つて呉んなヨト言
 ひながら、懐中より金を五兩ほど出して、外に何やら封じたる書物を添へて並べ置き「男」夫ぢやアノ、は
 やく歸つて来る心では行くが、萬々一歸りが遅くなつたらば、萬事の用の可調様に此書付に書いて置いた
 から、其時に能々讀んで見な、何れにしても今夜相談する所へ行つて来るからト金と書付を渡して立上れ
 ば「女」アレマアお待ち被成ヨトすがり付き「女」なんだネエ出抜に旅へ立つなんぞと、悲しい事をお言ひでな
 いヨ、夫ともには是非遠くへ行かなければ濟まないやうな身の上に成つたとお言ひのならば、私も同伴に連れ
 て行つてお呉ん被成なネエ「男」ナニ何様して女が行かれるものかナ、此身でさへ行度くないのだものト言

ふ顔従容とうちながめ、涙をばら／＼落しながら「女」モシマア下に居てお呉ん被成ヨト引きすゑて「女」此
 程から種々とお前様の様子を氣を付けて察れば、何でも急度苦勞な事が重つて、お店の方も都合が悪いか
 ら、身を隠すか死んで仕まはうといふ氣にお成りのだと思ひますは、萬一の時は明けて讀んで見るとお言ひ
 の其書付は、たしかに私を振捨てる、離別のしるしか書置であります、便のない身でお前様に別れるく
 らゐならば、お金も何も入りませうものか、たとへ何様な所へお出のでも、同伴に連れて行つてお呉ん被成
 ヨット片手に男の襟を押し、片手に封じの書物を取つて口にて封じを破り、手はやく開いて讀みか、れば
 「男」アレサ、それはマア今よますとも宜い事だアナ、後刻でしづかに讀むが能い、此身はマア相談する所
 へ行つて来るからもといへどもなかく放さばこそ、柔弱力も女の一念、たちまち遺書を讀下し、噎び入
 りつゝとりすがり「女」ソレ御覽ナ、私の推量した通り、都合の悪いのを直さうと思ひで、相場事とやら
 に懸つて身上を果して、世間へ面目ないばかりか、私へ對しても恥かしいから死んで仕まはうと覺悟した
 から、其氣で私は身の片付をして呉れるとお言ひの遺狀、直に困らせまいとお思ひで、別れる私にこのお
 金を、記念に残すお前様の情は却つて根ざます、何程賤しい勤果でも、夫婦になつた其中で、お前が死
 んだら詮方がない、私は他所へ縁付かうと思つて、氣樂に身勝手をするものだとお思ひかネエ「男」ナニサ、
 然不實なお前だと思へば、苦勞をして少しでも後日の事まで遺狀は爲ないはな、又お前の心にも他人の了
 簡にも、金がなからうが身上を潰さうが、死んで仕まはうなんぞとは、言甲斐のない男だと思ひませうが、
 餘り續く薄命で此身に自心で愛想が盡きて、思限つた今夜の覺悟、お前はわづかに昨日今日苦界を出てま
 だ間もなく、此様淋しいわび住居、さぞ悲しからう悔しからうと察して、此身がない方がましであらうと了

筋を定めて残す些な金も、當時では餘程丹誠したのだから、必ず笑つて呉んなさんと言はれて最ど噎び入り、正體もなく泣きしづみ、すがり付きてぞ歎きけり。

抑此男女は奈何なる者ぞといふに、男は鎌倉なる本徳町にて、明石屋此次郎と呼ばる、町人なり、女子はその素生を委しく知らねど、廓に名高き三浦屋の遊君琴浦と呼ばれし全盛なりしが、本文に説くごとくの旨趣よりは猶はかなき體となりけん、頓て此次郎と琴浦は兩個とも死神にやさそはれしか、住居を出て三崎なる菩提所へ参詣し、彼野中の井戸へ身を投沈めて死なんとはなせしなり、其時柏木塚の小蔭より走出て、兩個の命を助けしは高野家の英雄にて、義士が夜討の折からに、大丈夫の勇戦をなせし小林平八郎といふ豪傑の侍なり、さて此小林が兩個を助命て後、夜討の時に頼になる一奇談と、浮世繪師の老先生荷飾前北齋爲一は、小林氏の子孫にて恥かしからぬ實録あり、夫は十二の巻を讀みて知るべし。

(巻の十終)

正史 實傳 いろは文庫 卷之十一

第二十一回

森々たる老樹四面をかこみ、颯々たる惠風煩惱の夢を覺し、霧は自ら不漸の香を焚き、月常住の燈を挑ぐとは、四十餘人の義士の爲に、殘せし墓碑の在所を哀とも思ひ、また魂を清涼たらしむ心より、つらねし同志の筆すさみ、凡其頃の世にありし人は、日毎に嗚せぬ間もなく、詩歌連俳の名家の人々、遺感の詠吟絶えざりしとぞ、亦その傳記を珍重して、本傳拾遺銘々傳、數々多き中にして、彫刻にせしもの三四種に及びしが、今は絶板となり、殘れる製本も最稀なり、此頃書林文溪堂にて繪入の一本を聞せしが、其書の奥書には、

花洛畫工 吉川半次盛信

享保二年

正月吉日

菱屋治兵衛板行

如此にしるしてあり、外題は近士忠義太平記といふ、其撰集委細なる物にはあらねど、今天保十一庚子の

いろは文庫 卷之十一

年よりは百二十四年以前の板行にて、義蕪の落著より纏に十八年ほど過ぎて發行せし冊子なれば、眼前の人に見せしものゆゑ、多く實事を記せるならんか、しかしながら其説も世に流布する書と大同小異のみ、只そが中に岡林奎之助の自害と、片岡源吾の下部鹿助が傳、最珍らしく聴ゆ、亦堺の町人天野屋利兵衛が、鈴屋孫六に誂へし武器ゆゑに訴人せられし事、諸書にいふ旨趣と相違せり、夫は連々に著はして告げまうさん、都て此巻に記す所は例の詞書ならず、讀みて後に咄しなどしたまふ節の辯舌なれば、其心にて讀みたまふべし。

○大星が定めたる手配夜討内試の書面

一相音を違ふべからず、是討入の肝要なり、

是山鹿流の陣太鼓九度三返の打切を合圖とし、追手搦手一同に合圖の笛を吹きならず、(長さ三寸にこしらへ、糸をもつて袷につけてこれをもつ)

一合詞第一の用心なり、聊も失念すべからず、

是ぞ討入りて、戦最中の一大事、古今夜討の秘要なり、

○山と問ひなば其答に、

○瀬 ○激 ○淡 ○清 ○泥 ○清 ○濁

如此水に縁ある詞にて、承答互に心せくべからず、

○河かと問はば其時は、

○岩窟 ○古木 ○峠 ○麓 ○坂 ○峰 ○谷

如此に心得て、山に縁ある詞を用ゐ、問も答も速に、かならず同士討有るべからず、

撰者春水評して曰ふ、これまで江湖に説く處を聴き、亦寫本の旨趣を看るに、何れに記せし合詞

も、山とかければ河と答へてと有り、彼淨瑠璃本にいふごとく、天川屋儀兵衛の名を假りて、天とか

けなば河と答へといふ、淨瑠璃作者の滑稽に似て誠しからず、敵にも夜討の辨あるか、心はやさ

者あらば、唯山河の二ツにて合詞となす時は、忽ち是を推量して、山かと問はば河と答へて、油斷

を討つのはあるべし、豈大星の先見にて、彼を知り己を知る事の用心なからんや、亦一書には、

○山霞 ○河竹 の合詞と記せり、

亦大星の下知して曰く、

一弓鎗の用を斷つべし、

是立關廣間に用意してある弓の弦を切り、鎗の穂を切捨てる事ぞかし、

一敵方の燈火を消して、爐の中へ水をうち入るべし、

是は最初に味方の體を敵に見せず、爐中へ打込むその水には灰が煙と立上り、敵を驚かす方便にて、

味方は火打の道具あり、

一淺黄の服紗を一ツづ、各懷中すべき事、

これは臨時に入用あるべし、

一藥鏝に、焼酎をいれて持參の事、

是は手疵を蒙りし時の薬ともなり、焼酎火を諸所にしかけて異變を見せ、敵の氣をとる一計なり、

- 一 竹を以て糸を探る鑿紡錘の如きものを、百本ばかりこしらへ持つべし。
- 一 是は壁に突きさして蠟燭をともし、又疊にも突立て用うるものとすべし。
- 一 薬を布の袋に入れて持つべし。
- 一 無病なりとも用意あるべし、火急の節に臨んで存外の急病發る事あり。
- 一 裝束其外に合印を付け申すべき事。
- 一 墨斗、筆紙等銘々に所持すべし。
- 一 裏をさすべきなり。

右裏を鎖すとは、門戸を入りて長家戸口の心得なり、柄一寸の錐を百本餘持參して、長家くゝの戸口に鎖して、内より出でざる様にすべし。

此外前後の手當手配最も嚴重なりしとぞ。

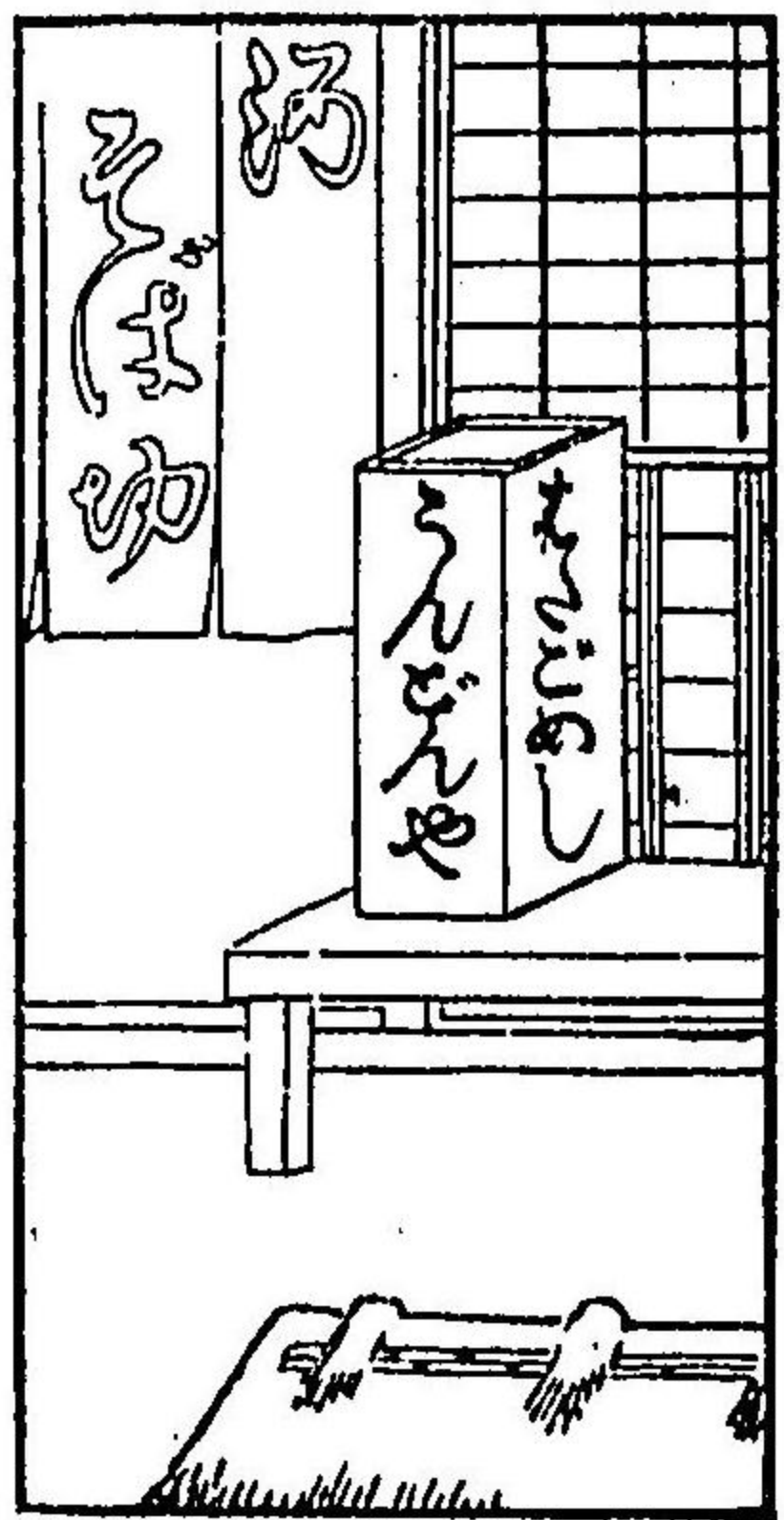
○留森助右衛門の母の書置

弓矢とる身の道をまもり、一味の敷につらなりしこそ、かへすくも嬉しけれ、もしもみづからに心ひかされ、末期におよびて未練のはたらきもせば、父の名までもはづかしめを殘すべし、しからは世にもいひ甲斐なく、口惜しきわざなるべし、子を思ふ道に先達つ命、何かなごりのをしかるべき、此ゆゑに自らは、御身が最期のはたらきをいさぎよく爲させんとて、斯は死を急ぎ候なり、頓て心よく本望を達し、名を天下にあげられよ、冥途の旅路にて待ち。

留森の母は、辻階の近所に住みし山口治齋といふ人の家において、自害したる書置なりとぞ。

こゝに仇討の日の事とかや、高野師直の屋敷近所に住む餛飩屋久兵衛といふものあり、其家へ十四日の晝過ぎ頃に、常々心易くせし、刻烟草賣の人來りていひけるは、「トキニ久兵衛さん、今日はお暇乞にお寄り申しました、夫にまた些とお頼み申し度い事もございませが、マア蕎麥で一盃吞ましてお呉ん被成、一オヤ長左衛門さん、お前さん今日はお待ちまかネ、モウ商は止に被成思召かネ、長「さればサ、御存じの通り元が浪人で、仕付けない、商は埒明きませぬテ、それに又米の相場は高し、中々渡世も成難いに付いて、古傍輩の友達と相談して居る最中、旦那の本家の思召が有つて、私等の元の同役が一同に、本家のお國へいつて奉公をするつもりサ、久「ハ、ア、それはマア何よりかお目出度い事でございます、乍併折角お心易くいたしてからに、お別れ申しますのはお名殘惜しうございませネ、そして今日直にお國へお立ち被成のかへ、長「イ、エ、今夜夜中に立つて行く積りだから、夫でお前の所へお頼みがありますのサ、外でもないがネ、晝間は氷が解けて道が悪いから夜立にして、道中も大概夜道をするつもりサ、尤も同役二十人ばかり揃つて立つのだから、夜中に歩行ても大丈夫な事だがネ、諸方に浪人して居る者が私の家内へあつまつて、夫から支度をして立たうと言ふが、何様も手狭で食事を調へる事が出来ないから、お前の家で餛飩でも喰べて立たせ度いから、其お頼に來ましたが、何卒お世話でも然してお呉ん被成ト言ひながら、金子を二三兩取出し、長「これをお預け申して置くから、御面倒でも肴と酒と、蕎麥を二十四五人前こしらへて置いてお呉ん被成ト久兵衛に金子を渡すゆゑ、否とも言はれず、久「ナニお馴染の事だから手附の金も入りませぬ

が、肴や酒の買出しに、お借申して置きませうが、今夜何時頃のお立に成りますか 長左様サ、何でもマアお前の宅へ参るのが亥刻半頃になりませう、然したらはお店の客のお邪魔にもなりません、久「エ、夫ぢやア丁度宜うございませう、實は此程は餛飩もひまで賣が悪いから、俳諧の取次を仕たり、冠付や前句をして、商の片手間にいたす様だから、夜なんぞは猶見世もひまでございませうと言ふを幸に、長左衛門は約束してぞ歸りける。



享保二年正月の新版近士太平記に此圖あり、餛飩屋久兵衛が家の趣なり、こゝに、はたごめしと書きし方燈は、旅宿と飯を賣り、又餛飩蕎麥切を家業とせし事の様に思はるれど、左にはあらず、此頃はたご飯と書きし看板は、當時の井飯一膳飯の類にて、今よりは百年以前に、蕎麥餛飩一式の商人の店はなかりしものなり。

因に依て云ふ、昔は町々に賣る食物の店、當時の百分一もなしとぞ、餛飩蕎麥を製し賣初めしは、寛文四辰年より、町かたにてはたご飯賣る家の、半商賣にはじめたるものにて、武家方などには滅多に喰ふものもなかりしとぞ、天保十一庚子年よりは九十一年以前、寛延年間にするされし新見正朝入道のむかしく物語、今より七十年前は、武家方にては、町方にてこしらへ賣る蕎麥、餛飩の類を調へ喰ふものなし、近年は大身屋々までも、けんどんを喰ふト記してあり、けんどんとは當時の常盤の蕎麥屋の事なりといふ、しからは蕎麥切の世上に一統して、食類の一家を

なせしは九十年來の事にて、いまだ元祿の頃は盛ならずと思はるれ、元祿十五年は今(天保十一年)より百三十九年になる、但し寛文四年に蕎麥を賣初めしより、天保十一年迄の月日を算ふれば百七十六年になりぬ、か、ればその昔はわづかに二八の蕎麥さへも自由には食し難し、當時は蕎麥賣る家と、鰻の蒲焼を賣る家の、一町に二三軒づゝは有りぬべし、尊き御代の餘光とつゝし、古代の質素を思ひやりて、奢の事をなし給ふなど、童幼衆に告げまわらすのみ。

むだばなしは先さし置きて、彼長左衛門は義黨の面々とうち連立ち、久兵衛の方へ入來り、互に睦まじく酒食に及びしが、主の久兵衛も其座をとり持して、心よく挨拶などしければ、義士の人々は、大に悦び、酒くみかはしける、彼久兵衛は大盃を持出して、久「トキニ誰人も此盃で一盃づゝ召上りませんか、是は私先達て俳諧の景物に取りました大盃で、しかも其時の一番勝の句で取つたのでございませうから、お旅立の門出には延喜も宜いと存じまして持出でました、サアこれで一盃お初め被成ましと言ひつゝ、大盃を座の中央に差出せば、各互に顔見合せ、敵討の門出には願うてもなき吉事の辻占、最めでたしと心中に悦び勇む義士の面々、一番勝とは、忝し、イザ、誰人を初められよと勇ましき中に、大星は久兵衛に對ひつゝ、大星「イヤこれは御亭主の御心付、我々が旅行をお祝ひ被下一番勝の景物のお盃、定に何よりも頼母しい御馳走千萬にぞんするが、兎てもの事に一番勝の秀逸を承り度い、何卒その句をお聞せなざる事は出来ませうまいか 久「ヘイ、イエさしたる句でもございませぬが、マア其節の私の僥倖でございませうト遠慮するを、一座の人々しきりに聞き度きよしをいへば、久「お笑ぐさかも知れませんが、其節の句は、

夜の中に雲井に名をや郭公

といたしましたと言ひければ 大星「イヤこれはなるほど秀逸く、エ、引と、其初五文字を拙者がお貰ひ申して、一句いたさう、大高氏付られヨト鼻紙をとり出し、墨斗の筆を採りつ、も忽ち一句をしるしたり、

夜の中にちからのいきや霜ばしら
空にいきほふ鈴鷹のこゑ
すでに今大盃のかたむきて
松のざしきに百たんのあや

大星 玄 梅
大高 子 葉
小野寺 里 龍
吉田 春 帆

ト思ひがけなき附合も、實に英雄の魂にて、斯る時にも風雅の遊、然も優長なる其風情、眞の大丈夫といひつべし、斯て時刻のいたれりと、おのく出立の支度して立ちかゝりたる其折から、勝手元より座敷へ来り、膳部を片付け、道具を運ぶ働の下男が、口癖なるか獨言に 下男「なんのそのトいふ事を二三度いふを、大高子葉は聞谷め 源吾「コウく若衆、貴さまア口癖の様に、何の其、なんのそのと幾度もいふが何の事たエ 下男「エへ、、、ナニこれは冠付の題でございませうが、何様も跡が付き兼ねますから、考へながら口癖になりました 源吾「ハ、ア左様か、これは面白い冠宇だ、其初五文字へ斯付けて遣つたら宜しからう、

なんのその岩をも通す桑の弓

下男「へい、これは有難うございませう 久「イヤ、これは御名吟おそれ入ります、コウ権七どん、貴さまア此日那のお蔭で明日は利潤らせ、何様して其句に勝つ句が何所にあるものか、寔に貴さまの仕合だと言ふ中、各支度も調ひ 長「イヤモシ久兵衛さん、段々とお世話にあづかりました 久「イエ、誠に何様いたしましたし

て、左様ならば御機嫌さう 長「其許にも行末長く御察目いたされい 久「へい誰人さまもお達者で 大星「すゝゝふんとともに繁昌なされ、イザトいひつゝ立出る、雪の夜路をものともせず、勇むや空に鈴鷹の、いきほひ見する鷹の羽の、紋に経緒をば師直も、付けねば今宵羽を伸して、夫と目さすや霞蘆の、東河原に押し出し、備を立て、第五を調へ、二手にわかれて無縁寺の、南と北へしづやかに、すゝむ時刻は子の半刻、やがて程なく高野家の屋敷にこそは近付きぬ。

第二十二回

世俗義黨の事を語り傳へて、衆評さまぐなる中にて、奥野將監、小山源五右衛門等は、大星の密意を受け、萬一仇討の仕損じあらば、二の目を討つべき内談にて、所爲と約定を破り反し様に説くもの多し、尤二の備の用心は兼々なきにもあるまじけれど、奥野小山の人々にはあらざりしなり、其證據は大星氏の認め残されし書面にて明けし、左にうつし出したる状は、復讐の前日に認められて、死後に故郷へ送りとゞけられしものなり、殊にその自筆を寫眞にしたれば、聊も疑ふまじきものとすべし、但し假名付は筆耕者の付けしものなれば、其意に違ふところもあらんか、亦二三ヶ所は文章の遠慮をせし事もあり、夫はわづかに町名と人の名のみ、大概は推量りて知るべし、當時此一通をも心にとゞめて讀み給はゞ、其時の事を眼前に見るが如く、最感情深き一章ならん、

尙以此状家來に可遣候得共、若途中滞り候而は如何と存差控、死後大津々其許へ相達候様に頼進候、以上、

家來兩人暇遣差登候間、一筆致啓上候、甚寒に御座候得共、各々様彌御堅固被成御座候半與、珍重奉存候、最早御城主も被仰付、珍重之御事に御座候、前々之通寺社領等茂被遣候事に候哉、無心許奉存候、

一私在京之内者何角不得心隙候間、以書中茂不得御意御無音罷過候、兼而御聞及も可被成、十月初京都出足無異儀父子共に下着仕候、殊に今日迄一段與兩人とも無病に罷在候、誠に佛神之御加護與難有喜悅仕候、在京之内者從公儀拙者へ附人在之、一足茂踏出候儀不能成與隨成筋分間出候杯、岡本、粕屋等彼是申候得共、不慥成儀承候故、發足相催候處に、道中御關所無滞も少茂心に懸候儀も無之下着仕候、爲申合鎌倉へ立寄、五六日逗留、夫方川崎近邊平間村與申所に在宅申、其後東之徳町に致借宅、父子其外忠士之もの共十ヶ所に借宅仕候、折々高野殿他行を承、心を碎途中心懸候得共、不仕合に而出逢不申候、居屋敷へも問者を入、一三度見分申候處無滞、依之近々打入可申與奉存候、最早間茂有之間敷候間、其節之趣追而御聞及可被成候、岡本次郎左衛門、粕屋勘左衛門、小山源五右衛門、進藤源四郎、仕方不及是非、人外之事共に、品々箇様に申事も猥敷候、奥野將監、川村傳兵衛存之儀之儀どもに候、只今に至候而は、奎之助、惣兵衛、源左衛門了簡ましと存事に候、當地へ罷下り候而、中田利平太、中村清左衛門、鈴木重八、家來瀬尾立退申候、古今不珍事に候得共、是迄罷下り候處に、右之通驚申候、此度暇遣し候兩人之者共、爰元にて晝夜骨を不惜働くれ、過分不便に存事に候、急成事可有之與存暇遣候、向後相應之思召も御座候は、此ものども儀、被添御心を可被下候、將又拙者妻茂存寄御

座候而、京都方離別仕、縁者へ歸し申候、情儀如何様に罷可成とも夫迄之事に候、然ながら當地へ罷下り承候得者、二男吉之進事出家に成、何方へ敷遣候由に候、不存寄事に候、已後萬萬一無別儀、世間に罷在候は、吉之進事一度武名之家を起候様に仕度事に候得者、少しは心底に懸り申候、此段存問敷事に御座候得共、人情凡夫の拙者に御座候得者はづかし候、乍去一事之妨に罷成儀には毛頭無御座候、御氣遣被成間敷候、此度申合候ものども四十八人に而、個様に志を合申儀、冷光院殿此上之御外間與存事に御座候、死後御見分のため遣置候口上書一通寫進候、何茂忠士之ものどもに御座候間、御回向被成可被下候、其場に而生残り候は、定而御引出御仕置にも可被仰付候、勿論人々之覺悟之事に御座候、御氣遣被下間敷候、良雪様、様々去年已來之御物語、失念不仕日々存出、此度當然之覺悟に罷成、忝奉存候、舊來御心安得御意候各各様故、御殘多御暇乞かたく、如此御座候、死人無口、死後色々之批判とり、可有之與存候、知真様へも同前に申度候、恐惶謹言。

大星由良之助 良 雄丞

十二月十三日

慮 光 様
良 雪 様

○近士太平記に載せたる東下の文章
いろは文庫 卷之十一

小野寺は隠家をひそかに出で、大星力彌とともに東路に下り、再度家に歸るべき、時しなればこれや此、ゆくも限りの相坂の、せきくる涙を袖に止め、しばしはやどす月影の、消えぬ氷と見えながら、さゞ浪よする湖水は、壯士の衣單なる、易水の秋を詠め盡し、馴れぬ嵐に袂を任せ、幾夜定めぬ草まくら、衣雁寒き夜に、旅寐の夢も結び不得、篠の葉草に影宿す、秋も末野の夜半の空、小笹が限につゆふけて、蟲の音もうちしきり、類なく淋しかりしかば、寐られぬ儘にさし向ひ、越方行末の事ども思ひつゞけてありしかども、情とあきらむれば、亦心なやまず理もあらざれば、小野寺ははからずも、

今は世にあきはつる身のしるせよはや入る方の山の端の月
 と何となく古歌を口ずさみければ、力彌も感情に絶えざりけん、

故郷有母秋風涙

旅館無人暮雨魂

と互に遠く古きを探り、今の情に准へてうち吟じけるぞ哀なる、匹馬風にいばえては、驛路曉の鈴の聲、今日も旅路の急がれて、草分衣しをれつ、過來し跡をかへり看れば、伊勢、尾張、三河も越えてはるけくも、末は何所と遠江、駿河の國もはや過ぎつ、向ふは何と伊豆、相模、思へば野暮れ山暮れて、遠くも來つる旅の空、四方の八重葎たち籠めて、行客の跡を埋む、都の方は白雲の、たなびく果や箱根山、ふりさけ看ればあまの原、押明方の海的面、沖の小島は浪荒れて、たゆたふ舟に身の上も、おもひたぐへし行方かな、松風寒くしぐれきて、暫時馬を止めしに、知己人に逢ひて、都の方へ登ると聞きしかば、文など調へ言傳てしも、又今更の別となり、竹の下道打過ぎて、酒匂、大磯、相模川、

深き思は身にのみぞ、もつれて解けぬ藤澤や、もろき涙の袖の色、からくれなるに染めなせる、もろこしが原、砥並が原、片瀬、腰越袂をも、ぬらす浮世の露けさを、草葉にうけて隠家を、鎌倉にもとめつ、しのぶ命の置所、飛龍の三冬に塾することく、時を待ちてぞ居たりける。

○右にせるせし文章は、享保の頃の板行にあらはしてあるを思へば、古き情の文句にて、小野寺が筆の跡などをも見聞して綴りたるものにやと察はる、近頃舌耕者の讀む大星の東下といふものは、太平記の中にある文章を悪くとり直し、句綴にて、こゝにあらはしたる小野寺の文にははるかにおとれり。

(卷の十一終)

正史 實傳 いろは文庫 卷之十二

第二十三回

こゝにまた小林平八郎は、(此書十のまき十丁より二十一までのつゞき) 明石屋此次郎の必死を救ひ、また琴浦をも介抱して、だんくの様子を聞くに、義理よからぬ借財多く、親類縁者の憎しみ強く、彼是身の立ちがたき事かさなりしゆゑ、二人もろともに野中の井へ身を投げて死なんとせし由を、包まず語りければ、小林はこれを不便におもひて、小林「何さま年の若き了簡にて、身上のさし支より世間のそしりなどを耻かしく心得、命をも捨てる覚悟尤もらしく聞ゆれども、はなはだもつて愚なり、人の一代の浮沈、定りなきが世の常なり、一旦衰へたりとも再開運の時ならずや、我等は今夜母の病を祈るために、此柏木塚へ参りしも、其方達のいのちを救ふ約束ごとにもあるならん、此所よりは程近き高野の下屋敷に住居ひてあれば、先わが家へ参られよト情ある言葉に、此次郎も琴浦も死ぬる心を取直し、平八郎に伴はれ行きしが、その後小林が世話にて和歌島伊勢といふ鏡師の名家へ夫婦養子に遣はし、その家を繼いで此次郎は和歌島伊勢と名乗り、養父母の歿後も家業ますく繁昌し、鎌倉の諸侯へ出入して、東に名高き鏡師なりしが、住居は本庄の夏坂町に引移りて、高野師直の屋敷の門前にぞ在りける、されば極月十四日の夜深更に及びて、義士の面々夜討の節に、高野の家の中周章る中に小林平八郎は只一人、少しも狼狽たる心はなかり

しと思はれて、しかも其夜は非番なれば其身の宅に眠りしが、物音を聞く等しく目を覚し、其歳五歳になる娘を起して、聲を立てるなど言聞せ、支度を調へ身輕に出立ち、戸を蹴破りて踊出で、彼娘を小脇に抱へ、夜討の人数の透をうかゞひ、稻荷の社の方へいたり、兼て心がけて置きけるか、傍邊にありし階子を稻荷の家根へかけ、はやくも家根へかけ登り、忽地階子を片手にて引上げ扉の外へ投掛けて、彼娘を抱きし儘に走下りしが、此時いまだ義黨の人々は討入はじめにて、玄關へ押しかゝる手はじめなれば、長家の方には目もとゞめすありけるか、又内々加勢の辻堅め、雁番物見もそろはざりけん、小林は何の苦もなく屋敷を忍出で、町屋なりける和歌島伊勢の軒下に入り、戸をほとくと敲きければ、折能く家内も眼を覺してか伊勢「誰人でございますか、小林「オ、此次郎どの眼が覺められてか、小林平八郎でございます、はやく此戸をあけられてといふを聞くより、兼々の頼もありしか、然なくとも過ぎにし恩の命の親、夫婦は飛起き戸を明くれば、くまなき月の晝をあざむく明に見れば、平八郎は抱きし娘を家内へ投入れ、小林「兼て内々おはなし申置いたる主家の大變、承知ながらも最早其義はあるまじきかと、油断の所へ今夜の夜討、兎ても逃れぬ拙者の命、元來覺悟のことなれば今更おどろく未練はなけれど、母もござらぬ其娘、我亡後は誰一人、養育いたし呉れるものもなく、今にも怪我をいたさうかと不便に存じて、大事の場をしばしながらも引外し、連れて参りしは最期のお願、何卒拙者が亡後に不便を加へて下さる様に、只向頼みまゐらすといふより早く引返す、後姿を見送りながら、伊勢「これはしたり最早直に、必ずお心にかけてられますな、娘御をば二人して、蟻にもさゝせる事ではないといふを背後に聞きなして、再度屋敷の扉に近付き、かけた階子をかけ登り、又も稻荷の社の家根より庭の方へと飛下り、御殿をさして走り行き、夜討の人々と戦うて、實にいさ

ましき働は、夜討の段にて委しく説くべし、そもく世の中の人情、義士の方を最真にして、師直方を憎み嫌ふは、善を好み悪を捨つるの心より發れば、尤の事なれども、其中にいさゝか差別あるべし、不仕合にて小林は高野の家來なるゆゑに、義士に勝れる働して、然も大丈夫なるその行狀、麻耳に不意の夜討をうけて、心周章る事もなく、小兒を抱いて圍を走抜け、飛鳥のごとき身のとりまはし、和歌島氏をたのみて引返し、大敵を不怖死をいさぎよくせし容形は、師直方の大忠臣にて、四十七勇に百倍の英雄なりと賞すべし。

○斯て和歌島伊勢は、小林平八郎の娘を大切に養ひしが、琴浦に實子も出來ざれば殊更に可愛がりて、成長の後此娘に聲をとり、鏡師の家業を傳へて家督としけるが、彼娘は實の父小林氏の討死を兩親より聞傳へ歎きかなしみ、火急の中より我身を助け出して和歌島に預けられたる、慈悲のおもむきななどを考へて、九十餘歳の長壽を保ちし其間、一日もわする、事なく、物の本繪双紙などに忠臣蔵の夜討の繪があれば、見る度毎に歎き憤怒で、その繪を引破り捨てしとぞ、實に小林の娘なりせば、然もありぬべき事ならんか、されば彼小林の娘の腹より生れし子をもつて、また和歌島の家を相續し血脈たえず、東都浮世繪師瓦家宗理とか稱ひし古今の名人は、小林の娘の孫に當れりとぞ、其故にや百二十七年前は、宗理の實子なるもの、鏡師伊勢の家を繼ぎて、能山町といふ所に在りしが、その男子の若死せしゆゑ、他家より養子をなせしが、今も家名は繁昌して、何某といふ御鏡師が夫なりとかや、如斯なれば宗理といひし畫工は、小林平八郎の血脈にて、彦にあたる先生なり。

亦説照谷家の浪人は種々の傳説ある中に、銀寺十内の浪人して嵯峨野の奥に在りし日は、いかに風雅の住居

なりけん、彼人の筆すさみなりとて書寫したるを見たりし事あり。

○世をあだし野の仇なりと、うき世をあだに見なしては、綾羅錦繡、金銀珠玉も何か心に止るべき、柴門荆棘に閉ぢられては、人のとぶらふべき道もなく、月より外の友もなければ、むかしを語るべき便もなし。

おもひ出はあらしの山のもみち葉を別れし袖の色ぞとも見よ
 わすれじな幾百年をつかへ来て代々にかはらぬ君がなさを

是すなはち九月の中旬、嵯峨の草庵を立出るとて、詠殘せし歌なりとぞ。

忠臣義士の功を賞美の餘り、何によらず其節に咄の由縁あるものは珍重秘藏せざる事なし、されば今も尾張の名古屋關戸にある、桂川の花瓶といふは、寶井其角が都に登りし節、桂川を渡る折から、川流れの物を拾ふ男の、腰に提げたる小器籠の異様なりければ、好事の心深き晋子なりければ、彼籠をその男に酒代をとらせて貰ひうけ、東にもち歸りて花瓶に造用る、桂川にて求得たる籠なれば、その儘に名として桂川と呼び、珍重せしが、さすがに俳諧の宗匠、東に名高き晋子其角が、風流におもひ付きて造へしものなれば、はやくも其頃の名物となり、風雅の席の咄し草なりしを、茶道の師匠にて名を知られたる山田宗伴が、其角より乞求め、後に高野師直の方へさし出しければ、彼家にもこれを珍重あられしが、常に居間の床の間に置かれしを、護士は夜討の退口に、其花瓶を見付けて、淺黄の絹の服紗に包み、高野氏の首の様におもはする謀略にて、鎗の穂先に貫き、いさましく圓覺寺へ持行きけるを、彼寺にて大慈子葉は思出して花瓶を改め、かねく見覺え聞知りたる、其角の桂川の花瓶なるよしを寺僧に教へ置ければ、

これを聞傳へしもの懸望して風雅の家に傳へ、後には鎗疵ある籠花筒を、桂川の眞物なりとて久しく關戸に珍蔵あるとかや。

長持人足の「あひがナア引遠けりやナアエ」ヤットコどうしん何様したく「サア〜休め〜、イヤア昨夜の降で大きうに水がましたせ」水がましたら酒代も増して貰ひ度ナア「アハ、酒代は増す

めへが、川向から水澤山な婦人が看えるせ」ホンニナア美しい娘子が見えるはべ、日の暮れるのに早く河を渡つて止宿れば能い」サア〜モウ一息だ遣らかせ〜「須磨のナアエすまの浮世の義理ゆるつ

らや、ヨウ獨明石のナアエ浦みが残るヨウエ」さうだか何様だかドッコイ〜、歩渡りなる籠早川も、昨夜の雨に水まして、不案内ではなかくに、洲瀬わからぬ早瀬の浪、はや日も西へ入相に、間近き河原をう

ろろして、人待顔の娘と下僕、往來の旅人行違に、顔見合する花の色、歳は大方十八九、素顔なれども色白く、世に類なき美女なれば、噂とり〜行過ぎて、はや旅人も途絶えたる、時に一個の川越男が、酒

の機嫌か足元も、よろ〜しなながら娘の側、寄るより直さま手を捕へ」川越「サア娘御さん肩車にお乗ん被成へ、川が深くなつてあるから、私でなけりやア渡す者ア外にやアねへト抱付けば、また一個千鳥足す

る雲助が「ヤイ〜鹽がま、其娘はナ、先刻此身が口をかけて置いたア、其方の毘で娘御の羽二重の様な、美しい顔をこすつてたまるものかト立ちか、れば、又一人が走出で」コレサ〜、其方達は不及

戀を仕やアがらア、籠早川ちやア此須磨六に及ぶ好男があるものか、サア〜此身が抱いて、乳を呑せながら怖くない様にそろ〜と渡して遣らうト三人ともに娘を争ひ、戯れか、れば娘は驚き、立退かんとするを取りかこむ、無法の仕方

に供の男は、憤然となりて中へ飛入り」下男「ヤイ〜、此奴等ア何を仕やアがる、途方もねへ、女ばかりと思やアがるか、此奴さんがお供をして居らア、指でもさして見やアが

れ、合點するものかトいふより早く、二人の川越を突飛ばせば、元來仕かけし喧嘩のたくみ、残りし雲助川越ども、又五六人走せか〜り、下僕を取巻き、大勢にて敵倒し打ちなやまし、娘を捕へかつぎ上げ、河原

の西の林をさして、連行かんとする其所へ、來か、る武士の浪人體、編笠脱捨て忽ちに、雲助どもを引捕へ、片端より取つて投除け、娘を救ひて介抱し、下僕をも引起したはりながら」傍若無人の致し方、

さぞ當惑でござつたらう、憎い雲助どもが、覺悟ひろげト白眼付け、刀の柄に手をかくれば、悪人どもは恐をなし、皆散々に逃げちつたり、娘と下僕は危き災難除れて嬉しく、手をすりながら、侍の前に腰を屈めて

「誰人さまか存知ませぬが、誠に有りがたう存じます」下男「心はやたけにぞんじても只一人の私ゆゑ、既に主人の娘御を恥か、せられ様といたしました、貴君のお蔭で必死の難を除けました下郎が僥倖、有り

がたう存じます、只今にも主人が参りましたらば、急度お禮を申上げて、お宅までも上りませう、お名前は何と被仰いますかお聞せ被成て下さいませ」浪「イヤ〜さしたる事も致さぬのに、叮嚀の禮は存じも不寄、

其様な事よりか娘御の供をして、些もはやく路を急いでござれ、最早時刻が遅からう、マア〜旅宿へ著くのが第一」娘「ハイ有りがたう存じますト主従ともに浪人の前へ手を支き禮義を演べ、猶姓名を尋ぬる折し

も、俄に川の向より人聲高く木精に響き、ワア引〜トさわぎ立つたる多くの人足、駕籠の四方をとり圍み、駕籠の棒先には綱を付け、肩にかけて引く如く前へはしれば、人足は汗を流して聲々に「エイサアえ

いさア〜、宙を飛する早うち、忽ち川へかき入れながら、水を蹴たて、押渡る、後についでまた一挺、同じく聲をかけあうて「エイサア〜えいさア〜ワア引ト聲もろともに河水を、漸ぎるが如く押渡

いるは〜庫 卷之十二

一一九

し、此方の岸に上り来る、其乗物をさし覗き、恠り驚く浪人が、思はず駕籠へ聲をかけ「卒爾ながら早うちは、原郷右衛門どのではござらぬか」郷「コ、珍らしや不破氏か」浪「心元なし郷右衛門どの、御家に何か大變が出来せしか、此様子は」推量「あられヨ勝右衛門、百七十里を五日目にて、はやくも當所へ必死の注進、隠しもならぬ主君の大變、委細の事は後よりつゞく、清左衛門にお聞きあれトいふ間もあらせず、人足は赤穂をさして、えいさア、飛ぶがごとくに走せされば、彼浪人は心せきてや、また来る駕籠の渡るを待兼ね、川へ走入り駕籠の側」浪「大星氏か、清左衛門どの、不破勝右衛門で候ぞ、お家の大事は如何なる仔細、何卒拙者へ、危忽ながらお聞かせなされて被下ヨト言へば、大星清左衛門は、不破を招きて耳に口清「ナ、我々はじめ覺悟いたした、貴殿も古主の御恩を思はゞ」勝「オ、仰にや及ぶべき、錯びたりとも鍵引提げ、ちぎれたりとも鎖を肩に」萬事は後日見參にト別を告げて清左衛門も、乗物急がせ走せて行く。

介石記に、大星清左衛門、原郷右衛門、百七十里の行程を五日の日數にて馳付け、由良之助へ注進したりと記せり、因に云ふ、鎌倉よりの早うち何某、道中にて馬を乗倒すよしを説くものもあれば、營中の喧嘩、判官不首尾の沙汰を聞くとひとしく、説法洲の屋敷へ供先より駈付け、百五十兩の金子を請取り、直に御國元へ乗出し、途中にて馬を乗倒し、夫より乗りかへ、走り行く由を説くものもあり、百七十里の遠路を馬に乗りつゞけらるゝものならんや、縦令馬をば續きたりとも、人の氣力がつゞくべきか、實は鹽谷家へ常に入出入の道中請合何某の方へ注進の人いたりて火急に言付け、その請合人直様問屋場へいたり、先觸を出して人足を手當させ、夫より宿次の早駕籠を昇きつゞけさせしものと知るべし。

再説不破勝右衛門正種は、久しき以前に鹽谷家を浪人したれども、忠義の志は鐵石の如く、先非を悔みて高貞の君恩を報じ奉らんと思ひ居たりし所に、此度の大變、國家滅亡の注進を聞くよりも、定めて大星はじめ國元の諸士一同に、籠城必死の心成なるべしと心せき、前後周章ながら、彼娘主従を同道して間屋へかゝり、川越人足の不法を断り、娘をつゝ、がなく送り届ける様に、嚴しく問屋場の役人に云付け、其身は別れて浪宅へ走り歸り、城中に入りて討死する支度に及ぶぞ勇々しけれ。

不破勝右衛門が、先年試し切の一件にて浪人し、鎌倉へ立退き浪宅せし事は、世に知らざるものもなきはなしなればこゝに不説、但し忠臣の人々は不破氏の浪人して後も、志の不變事を知つてまじはる事深く、されども國元へたち歸りて居住するは近頃なれば、城中の人々とは久しく別れて疎遠なれば、その心ざしを辨へざる人も多かりしとぞ、

これより不破が城下にいたる旨趣より、ひそかに元老大星の内意をうけて鎌倉へ下る事、また籠早川にて難を救ひ遣したる娘に再會して、仇討の便宜を得る奇談等、すべて此四編に説残したるは、ことごとく五編に出でたり。

(卷の十二終)

いろは文庫第五編序

何れ見ても咲劣りなし梅の花とは秋光庵の妙句にて、
 武邊の行烈を看ながらの吟なりとかや、こゝに記せし
 いろは文字四十七士の銘々傳は、拙き筆に成るといへど
 も、いづれおとらぬ忠臣義烈、松の操のいろかへす、
 雪間の梅のいさぎよく、咲きおとりなき花の枝、かざし
 て歸る俤にも、まさされる雪の翌朝の退口、はづかしか
 らぬ朝日影、たかき鼻は鷹名和に、はれて静けき海の
 面、干尋の底より猶深き、其志の功を、感賞あら
 ば最淺き、撰者の硯の海さへも、乾くひまなく追々に、
 續く五番手六番手、その寄太鼓のどんくと、看官の
 御最良あらば、ありが大部と書房が欣喜、そののみ偏
 に願ふと云爾。

東都作者 爲永春水誌



正史 いろは文庫 卷之十三

第二十五回

收斂の臣あらんよりは寧ろ盗臣あれと、古人の金言妙なるかな、俚俗の詞に言ふときは、親方思ひの主倒
 し、夫儉約と名を付けて、格く賤しき心から、一文をしみの百損とは、鹽谷の老職矢居曳右衛門、藤江勝
 右衛門の兩人が、時節も品も辨へず、つねく格齋了簡から、御馳走役の物入に、主君の御身の大事を思
 はず、只金銀を大事に心得、萬事格齋が先に立ち、後身を君にとらせしは、最憎むべき似而非儉約、そもそ
 も鹽谷の滅亡は師直にあらすして、矢居と藤江の兩人が所爲に發りし大變にて、未前を察する大星ま
 で、越度の様に後の人の、批判をすることを悔しけれ、俗も大星由良之助は、此度主君の御役儀を仰せかうむ
 り給ひしと、國元にて聞くよりはやく、國詰なる新井新七郎といふ者を呼出し、
 「さて其許は大儀な
 ら、此度鎌倉へ走下り、一大事の義を相勤められよ、尤いそぎの御用なれば、明朝すぐに當地を發足、一
 日もはやく鎌倉の御屋敷へ参り、矢居と藤江の兩人に對面のうへ、此書狀を相わたしと言ひつゝ、側へ近く
 找ませ、新七郎が耳に口、
 山良「な、な、得心がまわつたか
 新「ハ、畏りましてございます
 山良「合點がい
 たら些も早く、路用の手當も御用の金も、某が手より相わたす、かならずともに危忽あるなト支度金と
 して十五兩、主君の御用に二百兩、新七郎へさしつかはし
 山良「急度首尾よく勤められい
 新「お目がねをか

うむりました有難さ、たしかに御恩報じとぞんじて相勤めするでござりませうト慎んで金をうけとり、我家へ歸り旅の用意をと、のへて、その翌日の朝はやく鎌倉へとて走下り、大星の内意のごとく掛合ひしとぞ、恁て由良之助は新七郎に委しく言付けつかはしたれば、先安心して日を算へ、最早お役も首尾よく相すみ、君にも御安堵遊ばしつらん、目出度き吉左右のあれかしと、待ちまうけたるその所へ、領分の境の役人より先觸として乗り来る早馬、城門際にて聲高く、御注進ト呼はりながら馬より飛下り、早使「何事かぞんじませねど、只今鎌倉表より早うちの御注進とて、原郷右衛門どの押付これト言ふを聞くより番士の頭、番士の早うちとな、元老方へ申達し、待請あるやうはからひ申さう、御休息あられヨト役所にて介抱させ、直に諸方へ知らせの使を、手分をなしつ、走らせる所へ、又も走来る早馬、何事やらんと城下の町人、家中の人々、一同に胸とどろかす間もなく、二度目の馬は城門へ乗りつけながら大音あげ、二番手「鎌倉よりの早うちとして、大星清左衛門どの、只今是へ到着でござりますト告ぐる時には、外郭の家の中も近きは開付けて、仔細は知らねど騒ぎ立ち、各御門へ駈出て、案じ顔なるそのところへ、領分の境の早馬、引きついで宙を飛ばする早うちは、城下の人も兼てより、顔を知りたるお家の重役、原郷右衛門元辰を駕籠に守護して數十人、大地を蹴立てる砂煙「エイサア〜「エイサア〜息をはづませ聲も霞むを、只大勢のいきほひにて、路は急げど乗物を、ゆらぬは肩におぼえの人足、足をそろへて城門へ、飛ぶが如くに走せて行く、町家へ所用に出でたる家中は、平生ならずと心に周章、何れも用事を捨て置いて、我も〜と城中へはしり入るあり、駈歩行その縁つゞきへ知らせに行く、風情も被察てあわたし、然れば城下の町人は、皆々門口へ走り出で、互に顔を見合ひつ、
 ▲イヤモシ彌六さん、今の早う

ちは何事でございませうナア、
 「さればサ、何でも鎌倉のお上屋敷に大變な事でも發りましたらう、常體ではございませうまい
 ×「イエ、私か考は然うではないネ、此度のお役が首尾よく濟んだ、お目出度い知せの注進でございませう
 ▲何卒然なら宜うございませうが、あんまり殿しい早うちで、何様やら胸がドキ〜爲ます
 「左様サナア、お役の濟んだ知せのお使なら、原郷右衛門さまでなくツても、最う些と輕いお方でありさうな筈を、重役の郷右衛門さまがござる程では、少しむづかしうございますネ
 ×「なるほど〜、さう聞いて見ると何様やら案じられますト町中うはさとり〜の、折からまたも乗来る早駕籠、以前のごとく大勢揃ふ人足が、大星清左衛門を守護なして「エイサア〜、エイサア〜ト城門さしてはしり込む、其いきほひのすさまじく、城内城下自から、誰言ふとなく大變あり、おの〜用心あられよといふを人々聞傳へ、あられぬ啞を吐くものあれば、今にも軍がはじまる様に、周章人もすくなからず、上を下へと混雑し、安き心はなかりけり、此時大星由良之助は、第一番に城中へ馬を飛ばせて走り入り、評定の準備をと、のへ、諸士の出仕を待請けて、今到着の原、大星を介抱等閑ならざりけるが、追々出仕の諸家中へ、主君判官御切腹の様子を披露ありければ、上下一同顔色變り、しばらく言葉を出すものなく、あきれておの〜茫然たり、忠義一途の若殿原は、齒がみをなして進み出で「君はづかしめらる、節は恒死すと、古人の教は今此とき「御主君御切腹とあるからは、われ〜必死の覺悟の外、別に思案もござりませぬ「城を枕にいさぎよく、討死いたすが拙者どもの心底、元老よろしくお差圖をト言出すこそけなげなれ、由良之助は心の中に、速くも極むる國家の後日、何とぞ亡君の御こゝろざしを、兎やせん角やと上中下、そのはからひの善悪を工夫の胸をさすりながら
 由良「ア、イヤ、これはしたり若殿ばら、存じもよらぬおの

おの中され分、城を枕に討死とは誰を相手に不法の了簡、かならずはやまる事は御無用、先某が所存には、おのく短慮を愼んで、御舎弟大學さまをもつて御跡目の願が第一、また我君御切腹のうへは、師直ぬしも同様の御沙汰があるか、手紙によつて病死のほどあはかりがたし、原、大星御兩所の鎌倉出馬の折からは、いまだ兩家の存亡も定まりしと申すにもあらぬ趣、此方よりも早うちを出し、師直めしの様子を篤と聞糺すが肝要ならんと言ふに各もつともと、其詞にしたがへば、大星は一座を見わたし、由良「イヤナニ新非安右衛門、萩原文左衛門 二人ハ、由良」御大儀ながら只今より、一刻も早く鎌倉に走下り、高野氏の落着を聞きとつけ、直さま取つて返されよ、足下等二人の注進次第、諸士の覺悟を相定めん、今日よりして老分の面々は御殿に詰切り、物頭の衆は役所くを相守つて、再度の御沙汰を相待たれよ、又御家中は一同に武具の用意に油断あるな、まづ今日は一旦退出いたされい、と言ひわたされて一同に、宿所宿所に歸りしが、是より追々の注進に、師直どのは何事なく、疵養生の仰を蒙り、判官公には御切腹の翌日、すぐに鎌倉の三屋敷を召しあげられ、諸家中ちりくばらく途方を失ひ、浪人と相なりはつる趣を、今はたしかに聞くよりも、齒をくひしはる一家中、さては我々が運命の盡くるところ、今更未練のおくれをととりて、世上の人の物笑ひ、臆病ものと言はるゝな、潔く討死して屍を當城にさらすとも、忠臣の名を末世に残し、鹽谷のお家は絶ゆるまで、君君たれば臣もまた、道辨へて終を遂げしと、言はれてせめて御恩に報い、御奉公の爲をさめせんと互に心の合うた同士は、鎧物具肩にかけ、詰所くへ走集まれば、城下住居の家中はもとより、在々所々に住居の役人、鹽濱役所の人々まで、後日は兎もあれ一旦は、勇氣の立ちし侍氣質、籠城なさんと勢込んで、前後をあらそひ鎧引提げ、鎧を背負ひ城中へ、

我おとらじと走入るは、最めざましきことどもなり。

第二十六回

再説鹽谷家の城中には、譜代恩顧の人々が、おもひくゝの支度にて、互に心置合ふあれば、兼々同氣の忠臣は誰に遠慮もあらばこそ、弓矢の用意箴差物と、今にも事のあるやうに、騒ぐがあればひそくと、寄合うて囁き談じ、私欲をはたらく不忠もあり、物頭に逃支度するものあれば、陪臣に必死をきはめし豪傑あり、されば重役の面々は、先城門の下知を厳しく言付け、出入の者に油断せず、又城下或は在々に住居する諸家中の面々が、走集まる著到を記す役人、門外にあつて名前をしらべ、入城帳へ名を付立て、居る所へ、追々来る家中の外に、走り集まる者もすくなからず、其中にて兼て覺悟をしたるがごとく、用意して来る者三人あり、其人々には、

岡野治太夫 井關徳兵衛 大岡林太夫

右の三人は、鹽谷判官の勘氣をうけて、浪人したる者なりしが、武道の心がけ頼母しく、故主の沙汰を聞くよりも、籠城の中に加はらんと、鹽谷の城の門ぎはに來り、姓名を名告りてはいらんと、著到帳へことわれは、「イヤ御入城は、まづ暫くおひかへなされい、御ころざしは適れながら、一旦御浪人の事なれば、著到の連には記しがたう存じます、大星どの、申付で、先刻から浪人衆の見えられましたも、堅く断りて入城をいたさせず、悉く歸しましたれば、各方も何分お氣の毒ながら 三人「なるほど御尤の事、しかしながら拙者ども必死の覺悟で是まで推參、一應の義を大星氏へお届けなされて下されい、と思

ひ極めし其面色、なか／＼立踏る體なれば、是非なく大星へ斯と告げければ、由良之助が差圖として、腹心の侍一人門前に立出で挨拶して、入城のことは堅く断り、義心のほどを感賞するしなりとて、三人の者へ金子と衣類をあたへ、住所を書留め、後日に内意の趣を通じまうす事もあらんが、先々今日は歸らるべしと、理を盡して言聞かせければ、岡野治太夫涙を流し、「今にはじめぬ元老の御仁心、浪人の便を失ふ事を思召して、此大變の御最中に、われ／＼の志をお捨て下されずとあつて、如斯の賜、仰にしたがひまして拜受いたしますが、御評議の定まり次第、是非とも御内意下さるやうに 三人「ひとへに頼入りますト力なげにぞ歸りゆく、此時にまた鎌倉の三屋敷に在りし家中は、浪人して身の落著を冤や角と、案じ煩ふその中にも、忠義一途の人々は、妻子を所々へ預けおき、鎧物具携へて、お國の城こそ死所と、走登りたる忠臣義士、同じ時刻に參著し、城門に近付けば、家中といへども初の國人、顔見知らねば相互に、兎相の事もあらんかと、門番所にては油断せず、一人一人を改めて重役へ順達するゆる、時刻うつりて控ふれば、城下には町人百姓追々に走せあつたり、御用もあらば承るべし、被仰付下されよト村長里の長など、帯刀のゆるし受けたるは美々しく出立ち、武器を携へ勇ましげに組々を立て、ひかへたり、此時いと／＼貧しげなる衣服を着て、紺糸の鎧のおどし糸の、ほつれちぎれて古びたるを、肩に引つけかけ走來り、入城せんと言込めども、著到帳へなか／＼に、しるすけしきもあらばこそ、鼻の先にて會釋ひ、その見苦しきをあざ笑ふ聲も自然と聞えつ、又あざけりて嘸くも、聞えよがしの誘り言、實や世間の人心、悪ならずとも悪口を、利くは古今の人情なるか 「アハ、今著到を願ふ浪人は、餘り見苦しい形だナア、何といふ人だか 「さればサ、飢死をするよりかも、城へ這入つて兵糧でも、澤

山喰はふといふ了簡だらう 「イヤ／＼籠城して兵糧を喰つて腹を丈夫にして、花々しく討死するといふのならばまだしもだが、然ではないノサ 「そして何といふ了簡だらうノウウ 「さればサ、あの常世の内心は 「ナニ／＼、常世とは誰の事だ 「コレサ聞きわけのわりい人だ、鉢の木を知らないか、錆びた長刀ちぎれた鐵、適れ餓鬼の大將軍、佐野源左衛門ではあるまいか 「アハ、餓鬼の大將軍ならば能いが、瘦馬にも乗らないから、餓鬼の兵卒だらう 「それは宜いが、来た人の了簡は何様だの 「ナニサ悪い了簡ではない、先刻三人來た浪人が奇特だといふ事で、褒美に金と衣類を被下つて歸つたから、夫を聞いて、又褒美をせしめるつもりで駈付けたに違へね 「なるほどこれはい、推量だ、イヨ馬のない常世どの、只今お召でございませうト異口にあざけるを、耳にもかけず浪人は、門際より少し隔てし小高き所に腰うちかけ、姑くひかへ居たりしが、著到順に城内へはいる姿を羨ましく、見送る心は奈何にありけん、見すばらしげに在りける所へ、城内から立出る立派の侍、鐵寺十内はるかに城下を見おろして 十内「唯今これへ參られし中に、不破勝右衛門どのはござられぬか、元老大星の先刻より待ちかねられたり、不破氏は參られぬかト言へば、著到場の役人も、不破勝右衛門どの、不破氏と呼立つる聲城下に響き、人々四方を見渡して、待ちかねられて呼入れらる、勇士は何れに居るやらんと、互に見まはす其折しも、彼餓鬼と誘られたる浪人は、欣然として立ちあがり、城門へ近付けば、鐵寺は會釋して 十内「是はこれは勝右衛門どの、大星氏の所存たがはず、此度の大變を聞かれて外事にいたされず、早速の參著は兼兼のお心がけ、適れのことにごんじます、イザ御同道中さうト言はれて不破は肩身も廣く、笑ひ誘りし人を見かへりながら城内へ伴はれつ、ゆくほどに、はじめ笑ひし人々も、倍は先年ためし切にて身を隠

せし、播磨第一の荒者、不破勝右衛門にてありけるかと、皆異口に噂せり、斯て大星は勝右衛門を兩三日城内へ止めおき、内々の心底定まりし後に、金子をあたへ竊に内意をしめし合せ、先達たせて鎌倉の地へ下せしとぞ、斯てまた城中には、籠城の覺悟をなさんと、家中の人々廣間へ集まり、彼是評議をする中に、日頃は武勇の心がけ第一なりと賞せられし、向島八十右衛門は如何せしや、昨日我家へ歸りしより、すこしも影を見せざれば、傍輩の者怪みて、向島氏は何様いたしたらうナ、最早出仕の筈でござるが、何と致した事であらうト互に問合ふその中に、斧九太夫の心にひとしき臆病者は悦喜して、向島氏も命にかゝる様になつては、日頃の勇氣もござるまい、殊に籠城の討死の中申す事は、あまり無法な評議で亂心も同じ事、鎌倉の御下知を慎んで承り、お家再興が忠義の第一、物さわがしくいたしては、いよくお惜しみを重ねる道理、向島氏もたしかにその了簡で出仕をせぬのか、若さもなれば亡命をいたされたでござらうトあざけりながら身勝手、言ふも心の餘なるべし、是を聞く義心の若者二三、追取刀で立上り、「イヤ向島が宅へまゐつて、臆病らしき體もござらば、不忠者の見懲しめに打殺して捨て申さう、向島はもつとも至極、常に似合はぬ臆病者、傍輩の面穢し、祈捨て呉れんと血氣の面々、向島が宅へ走りゆき、八十右衛門は如何せしぞト言ひつ、奥へ踏込み見れば、何やら周章て家内中を引きちらし、實に駈落でもせしものかと疑ひながら居間へ駈入り、あちこちと見まはすに、鎧を天井より釣下げ置き、早著の用意をなしてあり、モシ、此やうに物具を揃へ、心構がしてあれば、臆病者とも思はれず、何所へ行きし事なるぞト尋ぬる折しも向島は、濱方の運上に取りあつめありし海草のたぐひ、又は田螺の石灰にて固ひ置いたる兵糧の手當藏、城下を隔てありける所へ走向ひ、車を言付け積上げさせ、

其外籠城の助になるべき品を彼是と取りあつめ、車の數も十餘車、暫時の間に調へて城中へ引込み来るは、人の心のつかさざる用意、口にて何とも言出さねど、必死の覺悟勇士のはたらき、此一事にてもいさぎよき心の底はあらはれけり。

(卷の十三終)

正史 實傳 いろは文庫 卷之十四

第二十七回

古人の云へる事あり、婦人は其身を愛する人の爲に容を粧ひ、士は己を憐む者の爲に死すと、宜なるかな、鹽谷判官高貞は君臣の禮儀正しく、殊に慈愛の心厚く實情深き性なりければ、道を守る家臣老黨、君を思はぬはあらざれども、又其性の奸曲は、主たる人は家來を憐み、物を賜はるがあたりまへ、纒の知行に命を捨て、は勘定に合はぬなど、思ふやからもありしとぞ、然れば鹽谷家の城を退去の時に臨んで、主君の憤死を推量り、殉死をせんと決する者二百六十餘人ありしも、血判同盟の約に背く者は次第に多くなりゆきて、残るは僅に四十餘人、是ぞ金鐵の忠臣義士、其列傳は世の中の衆人既に知る所にして、今又謂はんもことふりたれど、片岡傳五右衛門孝房の一條は、世に現はれざる異傳あり、爰も所は鎌倉に、家居まばらな町つゞき、少しはなれて巳午のかた、身を忍ぶには屈竟と、思ひ月池の説法洲に、四隣は遠き借家住、主従二人の浪人あり、頃しも秋の末つかた、木々の梢は紅葉して、降る日は肌も良寒く、晴れる日は空青々と、海面遙に眞帆片帆、出船入船絶間なき、眺望にあかぬ上總浦、折から雁の一聲に、古郷いと懐かしく、流石に人情捨てがたければ、妻子の事をや思ふらん、縁さき近く座をしめて、主の片岡傳五右衛門、春の末より眼の病、大望ある身は心もせかれ、氣を紅紙の裂くれなるの、色は變らぬ同

盟の、約に渡れじと全快を、祈る藥師に御夢想の、藥の驗もはかどらず、惱ましげなる朝夕に、過越方と行末の事を案じて居る折しも、勝手元より下部の元助「旦那さま、お藥を漸うと煎じましたから召上りまし、段々日の短くなりしますので、大きに遅くなりました、格子町までは餘程ござりますナア」片「イヤ御苦勞く、今日は大きに眼の眊むのが快方だ、最う全快に間もあるまい、永いことで其方も倦々としたらう、今日はあの向の上總房州の山々が見えて、ちらくちらくと船の帆がわかるやうだ」元「へ、エ、左様なら、あの遠山や船の帆が見えなさいますか、ヤレく夫はマア有難い事でございます、それでは最う早速にお全快おなりなさいますはへ、そんならアレ、あの向の釣舟の南の方で、網を打つてゐる船が分りますか」片「オ、なるほど見るともく、ソレ今網を揚げて何か魚が取れた様子ではないか」元「エ、左様左様、あれが正然とお見えなさるやうでは、最う大丈夫でございます、是から鵜眼の御療治が肝要でございます、しかしマア有難い事だ、なるほど元辰さまは餘程御巧者でございますナア」片「オ、巧者とも上手とも、是まで國元に居られても、療治は勝れてゐるといふ評判であつた、今日は在宿であつたか」元「へ、イ左様でございます、何か大勢お客がござりました」片「ハテナ、誰が來てゐたか、何卒此身も諸方を出歩行で、世間の様子もくはしく聴きたいものだ」元「ナニ、やがて御他行も出來ますのサ」片「はやくさう仕度いものだて、病氣の中にも段々と前後を考へて察ると、由良之助殿、郷右衛門殿は一對の大將だ、大勢の取締の出來るものは他にはない、武術と云ひ軍學と云ひ、頼母しい事だ」元「へ、エ、原様の軍學は則ち御家老さまと御同門でございますか」片「然サ、山鹿甚五左衛門の高弟ぢや」元「なる程左様でございますナア、先達てお國元でお城引渡しの節も、鴈取峠のお手配から、二の郭の備立の評判を、近國までも賞

むる噂が大さうでございました、何でも郷右衛門さまの事を、軍師の隨一だと申したさうでございます、イヤ夫は左様と、モウ日が暮れますさうな、秋の日は少しの間も油断が成りませぬ、ドレ方燈の支度でも致しませうと言ひながら、勝手の方へ立つて行く、西へ入る日に海原も、水色黒くもの淋しき、浦曲すまひに沙風も、身にしみくと哀れげなり、抑此片岡は、安藤貝なんどと兩三人、多くの人々に先達て、はやく下りし事なれば、火急の仕度にも何も彼も、たらぬ儘にて鎌倉に、假住居する不自由サ、獨難儀の其所へ、國に残せし片岡が下部元助尋ね来て、傳五右衛門の浪宅の、ちからとなりて暮させける、斯る所へ門の口、二三人の人音して「ハイ些お頼みまうします、片岡傳五右衛門さまのお住居は此方でございますかト音信ふ聲の聞えしに、此とき元助は二階に上がり、何やら用を爲てゐるにや一向に聞きつけねば、傳五右衛門さぐり出で「ハイ誰殿でございます「オ、旦那さままででございますか、ヤレ〜嬉しや、へい元助めでございます、お國元から御新造さまのお供をいたして参りましたと言ひながら、背後を振向き「サア御新造様、此所が旦那さまのお假住居でございます、お小兒さまがた、サア〜お父上さまにお逢ひなされませぬかト言はれて驚く片岡よりも、表の方にて子供の聲「母公さん爺公さんのお宅でありますとサ、速くお這入りなさいヨウトいふ聲ともろともに、片岡が妻と子は門口より走り入る、黄昏時の家内の體、まだ方燈をてらさねば、不案内なる夫の家、しかとは見えねど不自由と、察せられたる住居なり、傳五右衛門は鶏眼にて、見れども見えぬわが家の内、聞覚えたる元助が聲に變らぬ今の口上、妻子を連れて國許より来たりしといふは合點の不行と、思案は爲れど懐かしき、妻子の事が心にか、れば「ナニ、國元から妻や悴が参つたとか、マア〜はやく足でも洗うて、此方へ上がるが宜いではないか、此身は眼病ゆゑ夕暮からは埒明か

ぬ、其所の桶に水もある筈、足を洗つてサア〜此所へ「オヤ〜貴公はお眼がまだ、そんなに悪うございませうか、最前元辰さまのお噂では、お快方と承りましたがネエ「イヤ、なる程先達てから見れば最う〜大丈夫になつたのだ「オ、然でございますかト手をついて「さて其後は御機嫌を伺ひませす、寔にお懐かしうぞんじます、嗚マア御不自由で被爲入りましたらうのに、誰人が朝夕の御飯の調膳をいたして進げますか「イヤ、食事其外の用向は、元助が甲斐〜しく働いて呉れるから、夫には少しもさし支ないで「オヤ元助とお呼びなさいませうのは、只今供に連れて参りましたお馴染の元助と、同じ名の男をお置きなさいましたのでございませうか「イヤ、やはり國元でつかつた元助ぢやがト少し考へながら「ホンニ元助は何といたしたか、元助〜ト呼べば、二階より方燈を提げて階子を下りる元助が「ハイ只今燈の仕度をいたして居りましたと言ひながら、附木に火を燈し、方燈に移して持来り、片岡の内儀お佐代を見て「オヤ、お國のお新造さままでございませうか、是は〜宜うマアお下りなさいました、最うもう此方でも旦那さまがお眼の悪いので、寔に御難儀をなさいました、ヤレ〜嬉しや、是からは私も大に心強くなりましたと言ふ中、お佐代が伴ひし子ども二人は、傳五右衛門が右と左の膝の側へすがり付きつ、父の顔をつく〜とうち詠め「お爺さん、お眼が痛うございませうか「おとつちやん、病氣悪いかへ、拙子がお脊中を敲いて進げまぢやうかへト問はれて父は嬉しさと、また悲しさもます鏡、盛りて見えぬ目をこすり、抱き寄せて涙ながら「オ、二人とも温順しくなつたなア、嘸道中で草臥れたらう、マア母人さんと三人で、其處で横になつて休足をするがよい、お佐代も旅の勞で大儀であらう、遠慮なしに足を出して休まッしやれト言ひつゝ二人の子どもの脊中、撫子の花なつかしと、秋の野面を見るにつけ、

古郷思ふ恩愛に、只悲しさがまさるゆるゑ、親子四人が泣くのみにて、しばらく詞も途切れしが、只そのな
かにも元助が、二人になりし異變さは、呆るゝまでに不思議なりけり。

第二十八回

古より形容兩體になるを離魂病と名付け、尤多くはあらざる奇病のよしをいひ傳ふれども、亦是只物
の本に書残してあるのみ、いまだ眼前に見しといふことを聞かず、されば倭國本にも、その證據を正しく
著したるを見し事なし、但し奇疾方に曰く、人ありて忽ち自ら形容兩人となりて、眞假を別つ事を得ず、
言はずまた問へども答ふる事なし、乃ち是離魂病なり、

硃砂 人參 茯神

右の三味を濃く煎じて、是を服せしむるに氣爽になり、假もの、形は消えて元のひとりとなれりと記し
てあり、思ふに病によつて形容兩人となるものは、只形容あるのみにて言語ふことなし、是肝經の虛に起
る邪氣なりといふ、如斯なるときは、元助が二人となりぬるは、離魂病の類にあらず、最あやしき事
ならずや、然れども兩人の元助が、互に咎むる體もなく、今來りし元助は、格子町に諸用ありと何氣な
く出て行けば、家内に居たる元助は、勝手元にて夜食の調膳、一人世話して働きある、片岡夫婦は久々に
て、問ひつ問はれつ果しなき咄に移りて、元助の怪しき體を忘れしごとく、只子供の事と、國元の物がた
りに時刻をうつし、女「過ぎし事ゆゑ、今更に言うても詮ない事でございますが、桑名の宿で新六と、六之
助が抱疔をいたした時は、モウ何様せうかとぞんじましたヨ、殊に新六と違つて六之助は、まだ辨がない

故に、痛い痒いで下にとては此も救す、(此とき新六は十一歳、六之助は八歳なり) お醫者さまは三人と
で、藥を斷つて呉れませす、息を絶やした事は幾度か、其度ごとに元助が、藥よ水よと夜の目も寐すに、
看病して呉れるを力に、私も氣を上げまして、神々さまへ斷物をして大願をかけた念が届いてか、思ひ
の外に全快して、顔に抱疔の跡さへ付かず、マア二人とも此様に、達者でお前に逢はせまはすは、私の役で
はありますけれど、寔に苦勞をいたしました 片「ホ、ウ、抱疔をしたとか、夫はマア一役済んだ様なもの
で安心ではあるけれど、旅の空で二人一度に抱疔とは、さぞ難儀な事であつたらう、新六の方は歳上だけ
に、毒も多くある筈なのに、六之助の方が重病とは何様したものか、素人にはわからぬ事だ、ヤレ〜な
ア、お家の大變を考へて察ると、命を捨てるが家來の役、妻子も俱に死ぬるが常、悔むわけではなけれど
も、辨のない子供まで、不自由ばかりか此末も、何となりゆく事ぢややら、案じられてならぬわへ 女「貴君
はまた何様してお目が悪うなりましたかネエ 片「イヤ何様したの斯したのといふ輕いことではない、千に一
ツも助かりがたい内瘻の大病、元辰どのさへ療治が出来かねると言はれたけれど、眞珠の最上なのが調
つたばツかりで、潰れずに漸々快氣か、つたのだト互に過ぎし日の事を語合ひ、外に聴いてはなかく
に、耳がましき言の葉と、うるさき様にあるべきを、義士も勇士も親子の恩愛、妻とはいへど義理あれば、
子供の養育病中の辛苦の程を察しの挨拶、彼是慰めなぐさめられ、嬉し涙と愛き思、胸なでさするばか
りなり、此とき元助は夜食の膳をもち出で、元「ヤレ〜御空腹ございましたらう、サア〜何にも召しあ
がるものはないけれど、マア御膳を召上つて被下ましたこれより夜食をした、めさせながら、道中の様子
を問ひなぐさめ、國元の咄などを言出して、過ぎにし頃の物語、城中城下の誰彼が、かゝる事のあり

しなどと、言ふ毎事に一點程も、胡亂の旨趣あらざれば、何様氣を付けて容形を見ても、久しく馴染の元助に少しも不違、疑ふべき體はいさ、かなかりけり、斯て其夜は主従五人、寐もの語に小夜更けるまで、果しもあらず問ひ問はれ、二人の子もどは珍らしき、父の左右に添寐して、夜寒の風も厭はずや、心よげに眠りしを、見えねば手にて撫でさする、夫の眼病見る妻は、その不自由を察しつゝ、いと胸さへ痛むるなるべし、はや元助も勝手の方にて、眠り入りたる息づかひ、四邊も静になりしかば、枕元なる旅荷物より、大星の手紙を出して、小聲にこれを讀聞かせ、懐中の胴巻を解いて金子を取出し、片岡の手にわたし女「其三十兩ございます方は、大星様から手當として被遣いました、外に私の路用にせいと被仰いました十兩下さいました、儉約をいたしたけれども、子どもの痘瘡の入用と、逗留の旅籠のかゝり、四兩の餘も遣ひましたヨ」片「オ、さうであらうとも、何様して子供だと言つても二人の入用、なかく容易い事ではない、併し御家老から三十金とはありがたい事だ」女「イエ、夫はマア當座の入用にと被仰いました、又當暮には銀寺さまか、向島さまがお下りなさいますから、其節には鎌倉方の連中へ手當を遣はさると申す事でございます、ト言ひつゝ、又も金子を三十八兩取出し、女「是は家財と不用の品を賣拂ひまして、うけとつた金子でございます、夫から御知行の庄屋へ貸してお置きなすつた十兩のお金を、五兩持つて参つて申しますには、御存知がけない殿さまの御大變、俄の御浪人で嘸モウ御當惑でございます、御恩金の十兩を簡様の時でございますから、早速調へまして残らずお返し申しあげます、御恩金の十兩を、急に調達いたしかねますから、先五兩お返し申します、殘金は出精いたしてお返し申す様に致しませうト正直に持つて参つたゆゑ、お前さんにお聞きまうさすに取りはからひましたら、後日でお叱り被成うかと思ひなが

らも、お國を立退く私等を、危略に思はぬ心から、催促もせぬ金を、持つて参つた信明を感心いたしたゆゑ、五兩の金を請取つて、十兩の證文をば、太郎作に返して遣りましたヨト金を渡せば、片岡は「イヤ、夫は思ひがけない事である、何様して〜お家の大變を幸に、不實を働く者が城内にもあるのに、御領分の中でも遠い所で、知らぬ顔をして居ても濟むのに、此方の零落を聞いて半金もはやく返すとは、寔に有りがたい心ざした、能く證文を返して遣らしやツた」女「イエ、エ、證文はいたぐさますが、やがて鎌倉見物ながら下つて、旦那さまをお尋ね申しますから、其時は又殘金を才覺してお返し申しあげますと申しました」片「兼々實明な男とは言ひながら、餘り正直な事だ、それはさうと、元助が二人になつたのは何様した事だ、とんと合點が不行て」女「ホンにマア、氣味の悪い事でございますね」片「國元から其方の供をして来た元助が、紛者かと疑つても、奉公の勤め方、道中の骨折、少しも私の了簡なく、實意を盡して長の旅を、女子供を大切に送つて来た様子を思へば、なかく悪く怪む理でなし」女「サア、それゆゑに猶の事、心にかゝるではございませぬか、貴君が此地へお下りの、お跡を追つて参つたといふ元助も、御不自由の中を心配して、尊い樂の都合まで、苦勞して調へたと被仰るお咄の事ははじめとして、些も疑はしいと、疵を付ける事のないあの風俗、何様した事でございますかト夫婦は案じ煩ひながら、曉近くなりし頃、心勞れて寐入りける。

因に云ふ、義士仇討の後、其子孫は遠き島が根へ流さるゝに及びて、片岡の子供は十二歳と九歳なれば、十五歳まで其母に預けられしとぞ、其以前より里長の太郎作は鎌倉へ下り、片岡に尋ね逢ひ、實意を盡して、ひそかに夜討の時門前まで供をせしが、猶後々までも信切の心がけ、そのほか太郎作が

鎌倉へ出府に付いて、鹽谷の城下花括寺より、同道するもの、奇談等いと多し、必竟太郎作が如き正直なる百姓あるも判官の仁心、且大星の政事よろしきが故なるべし、片岡夫婦の寢物語は、用なき愚痴に似たれども、後のはなしの緒なれば、全本となるまでこゝろながく讀ませ給ふべし、元助が事は第六編に委しくしるす。

(卷の十四終)

正史 實傳 いろは文庫 卷之十五

第二十九回

昔の實事を書殘されし書は言ふもさらなり、僅の戯れ書、文反古も年ふりたるはなつかしき物ぞかし、然れば忠臣孝子の筆の跡は、拙き手に誤りうつしたりとも、尊くゆかしき事なるを、近頃看たる寫本の中に、(蜀山人間書文庫とか題號せし偽書なりとかおぼゆ) 大星が復仇の存念、四十七人を使ふ事手足のごとし、赤城の臣三百餘人の中、進藤小山のごときは、詞は忠臣に似たりといへども、復仇に誠の意なきものなるを知つて其實を告げず、下賤なれども寺岡が忠誠を察して、俱に大事を計るは明智のいたりといふべし、然らば其主君判官の短慮にして、事を不成を知らぬ事はあるまじ、また師直の貪慾を知らざるは不明なり、鎌倉の家老矢居藤江が、魯鈍、恪きに依つて事に堪へざるも知るべし、是を知らざれば不明なり、苟も其氣質を知らざれば、其身は城を守りて外に出る事能はずとも、かの手足のごとくに使ひたる原か藤田のごとき、才智の者を密に鎌倉へ下らしめ、金銀財帛を持たせて、加古川本藏のごとき方便を行はせ、高貞誅せられず、家斷絶にはいたらじ、大星は這に意なく、いたづらに座視して偶然たるは愚に似たり、事破れて後、千辛萬苦の心を碎いて復讐を計るは、其身の忠義千載に賞せられて、判官の汚名いよく朽らざるがごとしと論じたり。

私儀をせしむるに
名をなすは推
保相果のほろ
母弟才素子
儀の可也
等類にも
と

義士對話に曰く、
富森助右衛門は、兼て存生のうちに位牌をこしらへて、麻くさの長延寺に置きたるよし、黒塗に金粉をもつて戒名を記し、日付なしとぞ、二月四日は姉の忌日なりとて、

救之と云ふ
救之と云ふ
救之と云ふ
救之と云ふ

云ふにも足らぬ論ながら、残口の辯を好む者は右の評を是なりとするか、南朝に新田、楠の名將ありて、庸愚の足利を断つ事あたはず、蜀に孔明ありて玄德天下を一統せず、大星の才智忠臣、古今に無類なりとも、由緒正しく仁心深き高真の家、只一時に亡ぶるといふ大凶變なるを、豈大星氏に難辨つけて是を評すべきや、又其ゆるをもて師直の汚名後世に傳へ、其説その談、晝夜を差別つ事なく、天下の人口に語りつづけて休なき美談なるを、一曲つけて謗る人は、他に異なる才智あり氣に思はする所爲なるか、爰にしばらく義士の眞跡あるひは書狀の寫を出して、本文の助とせり。

右の書面は立紙にしるしたるを切綴いで爰に加へし物と知るべし。

○茅野和助常成は、作州東北條郡川邊村の人なり、和助の兄を善助と呼び、和助の弟を加太夫善次郎と言ひしとぞ、妻子をば此兄弟に頼み置きて仇討に向ひしなり、和助の好猪之吉は、仇うちるときは三歳なりとぞ、成長の後に三栗常庵と號し、津山侯の官醫にて、上手の名を得たりと言ひつたふ、天地の外にあらじな千種だにもと咲く野邊に枯るゝと思へば

茅野 和助

一筆致啓上候、其後は打絶御左右不承、御遠々敷有之候、寒氣甚敷御座候、貴様御家内皆々様、彌御堅固に被成御常候哉、承度奉存候、私儀當表へ七月罷越、只今迄無恙罷在候、其御地逗留中者諸事御厚情に預り、不淺忝奉存候、内々存寄之儀一筋に相極り、死茂近々與相覺候、於此世者此書中限り之御禮御暇乞に罷成候而、別而く御殘多有之候、日頃者簡様之時に及び候而者、強き事者人にも勝れ、木石之様に而逆勇士ぞと自慢に存候ひしが、不日之命に迫り候而は、其御地皆様御事茂思出し、自早晩者御名殘惜存候、併落涙者もの、ふの常に不似合候得ども、於最期之働者、唐之樊噲筑紫之八郎殿に茂劣り申間鋪兼而覺悟に候間、いさぎよく討死可仕與御推察可被下候、委敷得御意度候得共、死出之旅一筋に急ぐ身に者心も何とやらいそがはしく御座候故、乍早々如此此座候、隨而宿所之事老人之儀に候間、可然様奉頼候、以上、

いろは文庫 卷之十五

今度必死一連書付御目に掛候間、御慰に御覽可被成候、

四十八人別紙に有之、

欠落者

中村清右衛門

十月廿九日欠落

中田利平次

十一月廿日欠落

孫右衛門

極月六日欠落

田中貞四郎

極月四日夜欠落

平野半平

是は京都にて欠落いたし候、このものは大星氏拂物之代金三十兩盗み取逃申候、

右之外約を變じ、行方を隠し、又者不理窟を言出し、連中を退れ候者多く有之候、御一笑可被成候。

十二月十一日

餘會川勘平 宗利

彌右衛門様
利右衛門様
小三郎様
人々御中

此類の書物は、播州赤穂の城下、靈雲山花岳禪寺に什物のごとくなりて藏めあり、予が摸寫出す所とは少しく違ふもあれど、大概は相同じ、只こゝに書抜するに似たれども、又是本文物語の緒なり、後の巻を見て知るべし。

○潮田政之丞は、播州加茂郡北條村に縁者ありて、同國加古川の本陣、中座與右衛門に頼みの書狀有りしが、今も猶その書狀を秘藏するとかや、加古川より北條村へ五里ありとか、

武士の道とばかりを一筋に思ひ立ちぬる死出のやまみち、

○早水藤左衛門は、乙川家にありし早水助兵衛の縁者なり、彼助兵衛は後浪人して、熊本古町光明寺へ引取り居られしが、東の沙汰を聞きて藤左衛門を尋ね、浪人の便をばかり金子などを贈り、好を盡せしとぞ、(光明寺は助兵衛の縁者なりしとぞ) 早水藤左衛門がその光明寺へ送りし書中に、

地水火風空の内より出でし身のたとちへ歸る本の住家に

第三十回

風間喜兵衛光延は、垣元侯の藩中なりける、中堂又助といふ人縁者なりければ、辭世を送りしとぞ、

草枕むすぶかり寝の夢さめてとこ世にかへる春の曙
やり梅や闇を突きぬくその匂
重喜兵衛
次郎

風間新六の死骸は、中堂氏へ貰ひて用ひけるが、喜兵衛の妹伊津女といふは、古今稀なる才女なりしと、

いろは文庫 卷之十五

實にも然ありしと被察て、其伊津女の筆の跡、文章もいとめでたければこゝに寫し、好古の人の慰とせり、

たらちねの親のわかれにかさねて猶悲しかりしは□祿十六年二月初、亡君の御志を繼ぎし人々、残なく腹切らせ給ふと聞きし折からは、さらに夢現とも別きがたき中に、實に弓箭とる身のならひなれば、忠孝義の道にて世に名を残し給ふこそ、武士の本意ならんと思ひ慰めて、

君がため二心なきもの、ふの命を捨て、名を残すらん
御寺に詣ではべりしに、四十餘人の人々の塔婆の中に、風間氏光風といふ人ばかりは名も見えず、參詣の人々に尋ぬるに、其人は姉のつよくいたはり給うて、外の智識の僧を頼み葬りしゆゑ、此所にはなきと語りしゆゑ、あな淺間敷、女心とてさはせずもがな、亡魂の他へはゆかじと思ひて、

こゝよりも外へゆかじな亡きたまの其名は見えぬ苦の下水
卒塔婆の代と櫛を立て、墓前の様にし、光風と書いて歸りぬ、
撰者春水曰く、右の旨趣にて押しはかれは、新六の亡骸は圓覺寺へ葬らず、其當座は塔婆も立てず

にありしが、住僧も心つかすや、但し他の僧の弔ひける故、心よからず思ひて捨置きしものか。
一日二日ありて或人の許より、

なげくなよ外へはゆかじ亡魂の空しさからはさもあらばあれ
弔ひ給へる心ざしの淺からず思へども、思事あれば返しせず、二七日過ぎて圓覺寺へ詣で、
世とともに登らで月はうらめしや入る山の端にかけは残して

三七日は障る事のありて詣でず、四七日寺にて、

思ひきやその名くを書きわけてひとつ遣の人を見んとは

御預り在りし私たちの御沙汰などありけるが、新六光風の戒名を及摸唯劍としるし、人々と同じ所に卒塔婆を立て給ふ事の、有難き事におもひはべりし、彌生十日十七日はさる事ありて詣でず、廿三日、今日は果の日なれば、知るも知らぬも貴賤群集夥し、速くも過ぐる月日かなと、光陰のうつるも最かなしく、過越方をおもへば、夢まぼろしとも辨へがたし、

夢の世に夢を見るこそはかなけれありしまぼろや見えしおもかけ

逢見し人々は墓所にむかへば、其俣もうつる心なれども、及摸唯劍は見ぬ事なれば、夢に見るさへその俣さだかならず、いつしかおとなしく吾妻へ下りなんと思ひはべりしが、甲斐もなし、

見ぬ人を見るぞはかなき苦の下それぞとばかり俣もなし

逢ふことをなに祈りけん千早振神さへ今はうらめしの世や

四十餘人の人々の法名の上に及といふ字をすゑて、下に劍と置き給ひしは、何れも及を拂ひ失せ給ふゆゑとかや、最やるかたなし。

この章は猶長けれども略して記さず、又義士の諸書に稀なり、又こゝに一奇説あり、此事もろくの義士傳へ記さず、尤も實録なり。「此文にては、伊津女は朝の光風に逢ひしことなしと思はる」

○延享の年間（今よりはおよそ九十年ほどいせんなり）隆泉寺町（俣俗に大おんじまへといふ）本立山長國寺といふ日蓮宗の寺あり、その地内門の西の方に寮ありて、賢了といふ僧の住居ひしが、此僧は立林唯

七の羽なり、又其所よりほど遠からぬ借家に、六十餘歳の尼の賤しからざるが住居ひて、折々此賢子の庵へ音信れる事あり、是なん立林唯七の妻にして、仇討の節には一大事の秘密の役を勤めし才女なり。谷七郷の町小路、何所も物音あらばこそ、木芽も眠ると諺に言ひならはせし丑満頃、月ははれても降りつみし、雪の夜道のあきらかに、光輝ありさま闇よりは、却つてももの、怖しく、稀にも往來の人影なく、犬さへなかねぞ淋しけれ、爰に高野師直は、寒氣に冷えて小水近く、夜更けて寢所へ入りしかど、幾度となく雪隠へ、側女中に介抱されて通ひしが、丑の上刻とおもふころ、二人の女中に伴はれ、縁側傳ひて圓に行き、雨戸を明けさせ手を洗ひ、空を見上げてイみながら「老女の化粧にたとへたる冬の月影、物凄じくはあるけれど、此雪中の月の景色は、なか／＼風雅な詠ではないか」
 ▲女中「御意の通りでございます、昔からもてはやします仲秋の月影も、曇りがちなる浮世の常、今宵の空が秋ならば、一人の景色でございます」
 ●女中「夜風が御身に當りはいたしませぬか」
 高「イ、ヤ、名月のながめにめでて寒くもないト宵の酒氣がまだ不醒や、元來着かさね身にまともふ、寢間著の白無垢さむからぬ、心は驕者の癖なるか、庭の松が枝木々の花、實に月雪の三景を、一時にながむる樂と、暫時縁側に端居の折しも、付添ふ女中が誤つてか、傍にありし銅湯繼の蓋を手にとり、縁側より手水鉢の下へ取落せば、敷いたる石にうちあたり、はずみによつてチリリンと、銅のひびくを合圖のごとく、袖垣の蔭より走出で、縁側へひらりと飛びあがる眞黒出立の一人の曲者、忽地刀を抜くよりはやく師直めがけて打つてか、れば、師直は驚天し、立ちあがらんとする所を、二人の女中は左右より飛びか、つて師直を引倒し、押伏せんとすれば強氣の師直、身をひねり摺りぬけながら、聲を立てんとしければ、二人の女中は周章つ、師直の首にしがみつき、一人の女

中は師直の咽に兩手をかけながら、首をしツかと付けて
 ▲女「サア此儘に早くお首を」
 ▲女「サア／＼はやくお討ちなされぬかト言へども此方の忍の者は、刀を當てる透間なければ、小聲になりて
 忍の者「まづ其手をはなされよ、然もなければ其方達まで手疵を請けて怪我の元」
 ▲女「手疵も重手も厭ひませぬト言ふ中に、師直は二人の女を握みながら
 師「主人に向つて逆賊めがトはらひ除けるを放さじと、推重りて倒しつ、袖もて師直の口を押へ、聲立てさせじとあらそひけり。」
 (巻の十五終)



いろは文庫第六編序

佳有ありといへども食せざればの發文は、味淋と鯉節
 でこつてりと、美味く穿ちし故人の秀言、开を假筆の假
 字文庫、正史に倚りて實傳めかせど、素より果敢なき策
 子にしあなれば、那柳樽の悪口に、講釋師見て来たや
 うに食言を吐き、とそれ等の譏も免かれねど、我面白
 の人器に、後から後と巻を重ねて、譬へば星の晝のみ
 か、夜は輝く燈火に、夜延仕事の筆飛脚、平右衛門も
 どきに焦燥つものから、急げどまはらぬ口拍子、瀬田
 の長橋ながしくとも、婦幼稚童に勸懲の、標の爲
 の捷徑とも、做さまくほしとかくまでに、手を廣げたる
 編數は、實に手の鳴る方角違、作者の兪想と見そなはさ
 ば、御免候へたわいく。

四十七士の名も高麗に旭輝く春の旦

爲永春水記

正史 實傳
 いろは文庫 卷之十六

第三十一回

再說師直は思ひがけなき無法に出合ひ、驚き周章身を振り拂ひ、退れんとするに附添ひし侍女二人が左右より、押しかゝりて縁側に組敷きつ、彼曲者に差圖すれば、忍の侍は氷の如き刀を持つて、師直の咽に突きかけ、押へし女の掌中を除けるいとまもあらざれば、其儘に師直の首をとりて掛かるを、勿除けんとあせるゆゑ、二人の女は一生懸命の力を手先に入れながら、一兎ても退れぬ、御尋常にお首を延べて、御最期をなされませ。女「サア此儘にお首を早く、私の手をも此まゝで、刺通したが能いはいナア師直「主殺しの女ども、出合へ〜トいふ聲も、立てさせじとぞ争ふ大變、忍の者は是非におよばず、女の手先もろともに、師直を貫きながら、しのび「鹽谷の浪人推參して、主君の敵を討ち申す、覺期なされヨ高野氏ト言ひつ、忽ち首かき切り、呼子の笛を吹きならせば、またもや木蔭のくらがりより、顯はれ出でたる黒装束、互にうなづき囁きて、師直の首を服紗に包み、庭の雪間へしかける狼煙、音はなけれど中天へ、月をおほうて立登れば、兼ての合圖か西南にあたりて、打出す寄せ太鼓、雪の夜風にさそはれて、聽ゆるはしに忍の者はいとやく、屋敷の西の用心堀に、かけて上げたる勿橋を、内より外へかけ渡し、おのゝ此所より走り出づれば、二人の女を介抱し、同じく續いて出でたりしは、寺岡平右衛門なりと

いふ。

如斯なる時は、世に書傳へし趣とははるかに相違の事にして、また偏屈者の批判もあらんか、撰者元來この辯あり、夫は本傳滿尾の節に至りて總論に記すものなり。

此時師直を押へて、其身の手紙を請けながら首を取らせしは、則ち立林唯七の妻にして、兼々義士と内通し、今宵の仕義におよびしなり、それより後に尼となりて隆泉寺町に住居、甥の法師賢了を便になしつ、世を過し、四十餘人の追善を専一と心がけしとなん、猶この尼の外に五人程の女子を、高野の奥へ入置きし事と、唯七の妻もろともに師直をうたせし女の傳は、次々の巻にしるし出せり、且唯七の甥賢了にも、夜討の時に臨みて小傳あり、這も又後の巻に著すべし。

爰に一奇事の外傳あり、そも一鹽谷家滅亡の際に臨んで、其家中難儀ならざる者としては一人もあらざる中にしも、別きて哀れに悲の難儀をせしものありしといふ、所は鎌倉の南の通り、酒川町とかいふ町の裏家に住ふ女あり、歳は二十歳を三ツ四ツ越しても島田の濃鬚、姿形容の美麗しければ、まだなか／＼に二十歳ともならざる様に見ゆれども、今年五歳の小兒もありて、朝夕苦勞に日を送れば、自然と心のしづみ入りて、只その子のみを大切にいたはり育つる不自由も、夫なき身に食客の人に等しき昨日今日、伯父とはいへどもその實は、他人なりける悪者の強八といふが同居して、此程わづかに母子の者を養ふを恩にかけて、強八「コウお民、其方マア何様する氣だ、雲を握む様な事を的にして便々と日を過して居るが、今日を何日だと思ふ、モウ十二月の十四日だぜ、即時に大晦日が来るが、餅米のあてもなけりやア、歳を越す算段もないぜ、夫とも何ぞ心あてがあるのか、此身ア明日は先頃借りた六貫の錢と、貸夜具の相料を二一

四百遺らなければならぬいぜ、その錢が出来ざア質に置く衣類でも渡して置くが能い、後に持つて行つて錢にして置かア、強一「オヤ私の方には、モウ著類は些も有りませんものヲ、強二「コレ些も心當がなけりやア、三月四月の間に覺悟を爲さないのだ、七月の二十日の日ツからア、此身が都合をして喰はして置くのだぜ、何所からも附とゞけがなくなつて、安閑と母子が活業して居やうといふは、餘り押が強からうちやアないか、強三「オヤ、夫でも八月の十五夜に、お前が入用だとお言ひで、私の夏の衣類と冬物を、五六兩ばかりのお金になる程持つてお出で、其儘お返しでないから、大かた夫が月々の入用になるだらうと思つて居ましたは、強四「ヤイ、能いかげんに無勘定な事を吐かせエ、その時は此身が都合が悪いからナ、借りて持出したけれども、不殘引つたくらゐ仕舞つたのだア、それから後は今日まで活業して居たのが、あの時の衣類ぐらゐで満足るものか、ばか／＼しい、強五「オヤ、それだつても其様に毎月の入用が懸りも爲ないがネへ、強六「エ、イ何でも角でも過ぎた事が益に立つものか、其方の衣類がなくア兼が衣類でも出せ、不殘遣らしたら五、六、七、八は出来るだらう、それが否ならば、昨日隣裏の老女御が然う言つた旦那の世話になるが能いヤア、左様すれば兼は貫人があるといふから、直に養子に遣つてしまふサ、その方が幾程樂だか知れやア仕ねへは、馬鹿／＼しい、旅へ立つて行つて二年越になるまで、便も爲ない人を的にして、月日が過ぎれるものか、強七「ナニ何年までも斯して居様といふ氣ではありませんヨ、いよ／＼便がない様ならば、兼重を他所へ預けて、私やア一生涯奉公に出て仕まひますは、涙ぐみたるお民の心、奈何に悔しくありけるか、哀と察したまへかし。

夫此お民のみにあらず、世間に多き婦女子の身の上、薄命なる其節は、咎なきものを咎のある様に

謗られ賤められ、わづかの越度を仰々しく言立てられたり、叱られたり、親しく實意の縁者がなければ、血脈の人も他人に劣り、右左にて突放され、歳わかくして艶色あれば、其色を買らせて利徳を取らんと、奸謀みて穴へ落入れる強欲非道の者にまっはられ、身を苦むる女の哀なるが世に多し、されども平日不足なく、親兄弟が親類の、力になりて呉れるものがありて不自由なき時は、他人の難儀も悲も、只餘所くしく聞捨て、不便と察する人は稀なり、男女にかぎらず世の中は情をもつて人を恵み、其身の目下を何所までも、愛憐をかけるが第一の慈悲善根と思ひはかりて、他人をやさしく仕たまへば、情は他人の爲ならず、頓ては其身の冥利も能く、尊き人と言はるべし。

「何だ、兼の親父が歸らないければ、其身は一生奉公に出ると、へん、勝手な事はかり考へて居やアがるぜ、コレ、假初にも此強八さまは伯父だぞヨ、殊に其方が爺が死ぬ時に、母子ともお頼み申すと涙を落して言つたから、案じ被成す此身が付いて居るから、母子とも何様か斯か世をわたらせるからと請合つたらば、其方の親父は手を合して此身を拜んで、何卒これからはお民の親になつて、萬事の世話をして呉れろと言つたぢやアないか、その後母人が死去つてからア、何も角も此身が引請けて爲て居らア、今まで骨を折つて居て、今さら勝手にされてたまるものか、實はナ、明日の晝までに五兩の金が出来なければ、其金の形に其方を預けるつもりだア、マア三年ばかり契情奉公をして呉れる、ナ、否だと言やア旅へ引出しても、勤をさせるから左様思つて覺悟をしろ、夫とも明日まで耳を揃へて五兩の金が出来なければ、奉公に遣るのも旦那をとるのも、一月や二月は勘辨をして遣らうはサ、ドレ些と出かけて來やう、何ぞ元金を出して呉れト言ふより早く傍に、お民の脱置きし細入を小脇に抱へて出行くを、遣らじとすがり駄げども、耳

には不入突倒し、背後をも見ずに出行きけり、跡にお民は口惜涙、啜入りつ、泣倒れ、正體もなく駄き居る折から、男の兒「母人さん、先刻の脇差をお呉れ、敵討をして遊ぶのだから、ヨウ早く出してお呉れヨウ、此身が會我の五郎だとヨウ、表の金様が左様いふからヨウ」アイヨ、今出して上げるはネ、路次の外へ出るとあふないヨ、空地の所でお遊び、怪我をするといけないヨ「怪我を爲ると御屋敷の爺さんが歸つて叱るねへトいふ所へ三四人の子どもの聲」兼ばう様ヤ、はやくお出ヨウ、モウ芝居をはじめめるのだから、脇差を持つてお出でなねへトいふ聲聞きて母のお民は、せんべいを十五六まいかぞへて持出し、あつまり來る子どもにやるも子を思ふ親のこゝろぞかし。

第三十二回

再説お民はその翌日、極月中の五日の朝、寢覺も寒き雪の風、身にしみくと思入る、浮世の外の世界もがな、同じ世界にまじはれば、兒を育つるにも常並の、准はさすがに捨置かれず、待ちわびる人は沙汰もなく、待たぬ月日のあし早く、近付く春のまうけさへ、四邊近所は賑はへど、此身は此兒に正月の、晴著も著せる事ならで、今にも強八が歸りなば、昨日のごとく借財の、ありとて無理をいふならんか、無理と思へどその金の、半分をこしらへわたさずば、定めて非道を行つて此兒にまでもつらくあたりて、情なき目に合すらん、嗚呼口惜しき事なりと、胸を痛めるいたはしさ、また歳行かぬ娘氣も、兒を持ちしとて親といふ甲斐なき今の薄命を、かこち涙のト零、添敷の顔にはらくくと、か、れば小兒は目をさまして首を上げ「母様起きやうヨウ」民「アレサまた寒いからネ、最些と此床に温まつてお在、即時に母が起き

て火をこしらへて、衣服を温めて上るから、まだ起きるのではないよ、ドレ母が先へ起きませう 兼「ウ
 ウン此身も起きるんだア 兼「寒いからマア寝してお在といふのに 兼「イヤ、今日表の老女さんの所で
 餅をつくから、早く起きて来なと然う言つたものヲ 兼「オヤ、早い餅のつきやうだノウ 兼「此身の所
 でも、はやく餅をついてお呉れヨ、ト言はれて母は胸ギツクリ、餅を春くより持ちあつかふ、節季の中の憂
 き思、年を越すにも安からぬ、母の心を兒は知らで、人並々に何事も、出来ると思ふいちらしさ、奈何に
 貧しく活業すとも、爺御が在さは是ほどに、心細くはあるまじと、目にもつ涙はら〜と、膝に落して釜
 元へ、立つて朝げの烟さへ、細くくゆらす火うち箱、しめりがちなるわび住居、いと哀れなる母子の體、
 斯る中にも兼吉は元氣よく 兼「此身は老女さん所へ行くヨウトはね起きれば 兼「アレサ寒いといふのにノウ
 ト言ひつゝ、寝間著の其の上に、著せて合する前後、ほつれし糸の付紐も、回合が悪ければ、些に入らぬ
 行丈も、短き不離著其まゝにて、直に表の方へ出でるを、母は呼びとどめ 兼「コレサ坊や、路が悪かアな
 いか、氷が張つてすべるから駈出し被成ナヨトいふを半分聞きながら、路次口へ出で、行く、其背後かげを
 見送りて、内に入りしが焚く火まで、消ゆる思に胸さきの、癪を押へて居たりしが、何事やらん路次の外
 に入聲高く、裏々よりも何事か聲かしましく駈出し行くを、耳には聞けど心の屈度、出で、見る氣もなか
 りし所へ相長屋の内儀の聲にて 兼「お民さん、大變な事が出来たから早く来なヨ、遅いと間に合は
 ねへヨ、ト云はれてお民は何事かと、障子を明けける出合がしら、又も駈来る隣の左次兵衛 兼「コウ、お
 民さん、お前の所の兼さんを、今表を通る大勢の侍が、血の付いた鎧を一ツに、かついで行つてしまつ
 たせ、追駈けて行つて詫つて連れて来なせへ、此身が行つて連れて来て遣度いが、五六十人の黒装束が、

鎧長刀の扱身で行くのだから、怖くつて寄り付かれねへ、ト言はれてお民は胸とどろき、周章迷ひて路次板
 をふみならしつゝ、駈出し、見れば往來群集の人々、駈けて行くあり歸るあり、種々噂の實正は、何と定め
 て知れねども、遙に引行く一群の、人数は夫か雪道を、蹴立て、南へさしかゝるを、見るよりお民は狂
 氣のごとく、下駄脱捨て、素足となり、我子の跡を慕ひゆく、此時鹽谷の義士の面々、主君の仇を討ちおほ
 せ、最いさまじき其勢、今は此世に思ひ置く事はいさゝか亡後も、名こそをしけれ途中にて、追人の来る
 事あらば、備を立て、いさぎよく、敵を引きさうけ討死せんと、四十餘人を三段に、分けて押行く行列の、
 後におくれて大鶯文吾、文武の達人風流の、友に途中で逢ひしゆゑ、少し後より走行、折から駈出す男
 の兒、歳は四歳か五歳なるが、文吾の側へ駈寄りつゝ、 兼「伯父さん此身も同伴に行かう、此身も強いから
 敵討をするヨウ、トいふを聞くより 兼「大鶯文吾、莞爾笑ひて小兒を抱き 兼「オ、強いナア、伯父さんに抱こ
 して行くか、怖いことはないか 兼「ナアニ怖かアねへヤア、此身も光る兩刀を持つて居らア 兼「オ、さう
 か、夫ちやアこのお鎧を遣らうか 兼「お鎧はあんまり大きいから、此身に被持ねへヤア 兼「アハ、、、
 夫ちやアこれを遣らうナアト鎧に付けたる金の短冊、取つて渡せば嬉し氣に、笑うて怖るゝ色もなく、抱
 かれ行くこそ可笑けれ、往來の人々は此體を見て膽を潰し 兼「アレ、あの血の付いた鎧を持った人が、
 小兒をさらつて行くぜ 兼「オヤ、可憐さうに、あの小兒を何にするだらうナア 兼「おほかた人質にでも
 するのだらう 兼「ナニ、高野の屋敷へ夜討に行つたのだといふ噂だから、最早人質は入りも仕めへ 兼「何
 にしても怖がらないで、抱かれて行くといふは、奇妙な兒もあれば有るものだ 兼「エ、コウ、鹽谷家の浪人
 だといふが實正にさうかノウトいふ中に、何か義士方にて異なる噂を聞きとりたるか、先に立つたる太鼓

正史 實傳 いろは文庫 卷之十七

第三十三回

爰にをかき物語あり、鹽谷の家中にて其名を高田軍兵衛といふもの、小役人を勤めしが、専ら口才ある者にて、いたつて世事に伶俐ければ、判官在世の其折は、何事を勤めさせても、人の先を潜抜けて、何ほどむづかしき事にも、小氣味よく取捌き、もつとも用立つ者なれども、其爲すところ實情ならず、主人の爲と見せかけて、自己が田へ引く事のみなれども、速く逃道をこしらへ置き、上手に事を取りおこなへば、いさゝか他の谷を受けず、そのうち權家に取るにも、斧九太夫がごとき者には、彼が得づくことを料りて其欲情より心に慍ひ、大星がごとき忠臣には、其道をもつて取入れば、多くは是に欺されて、心をゆるす者もありしが、由良之助は思慮深ければ、軍兵衛が言葉多く輕薄なるを知るゆゑに、さのみは用ゐざりしとぞ、さる白者にてありしかば、此度の大變にて既に籠城ときまりしときも、一番に駈付け、著到帳にも軍兵衛が第一番に録されて、表面は専ら忠義と見せかけ、いでは討死と、口には言へど心には、表裏を窺ひ若萬一殉死討死と究まらば、用金を掠めとり、ひそかに城を逃出さんと心がまへをしたりける、さればこそ義士の而々御金配分と事はまり、城退散の頃までは、忠臣顔して居たりしが、討入の其以前、進藤小山等と侶俱に無理窟を言出し、終に盟約をそむきしが、義士等首尾よく敵を討ちて、亡

君の菩提所圓覺寺へ引取る様子を、軍兵衛連くも聞出して、其道筋を考へ合せ、箕田八幡の近所に待ちうけ、義士の行列の来るを見るより、「扱誰殿にもお手柄く、嘸お草臥でございませう、ヤレく天晴な御働、ト一個くに挨拶すれども、皆軍兵衛が不義を悪めば、誰一人答ふる者なく、聞かぬ振して往過ぎしが、その中にて織部矢兵衛が「我々四十七人は盟約を堅くして亡君の仇を報い、只今引取るところなれば、餘人の挨拶は承らぬト言ふを軍兵衛おしかへし」「いかさま御尤の思召、私なども先達で進藤、小山等に惑はされ、御連中を洩れましたれど、其後段々考へて見ますにつれて、御連中を洩れましたのを口惜しくぞんじますけれども、今更改めてお加へ下されとも申されず、ふと思付きまして箕田八幡へ日参をいたし、何卒各方の首尾よく本望をとげらるゝやうと、祈誓をかけた験にか、今日只今此所にてお目にかゝるも、いまだ武運に盡果てぬところと、ありがたくぞんじますれば、是より直に八幡へ、御禮参を致すつもりでございませう、どうぞ此旨元老はじめ、皆々さまへ宜しくト言ふを半分聞きあへず、矢兵衛はそこく走りゆくにぞ、軍兵衛はなほ是にも疑りず、一樽の酒を提げて圓覺寺に赴きつゝ、門番を呼出し、我等は高田軍兵衛といふものなるが、今日のお手柄を祝すため、且はお勞休めと思ひ、酒一樽持参りしかば、何卒大星どのをはじめ、各にもお目に掛りたしといふにぞ、門番が此由義士等に傳ふれば、若者どもは聞きあへず、「扱々面の皮の厚い男だ、先刻は途中を憚つて腹をさすつて怖へて居たが、此所へ来たこそまことに幸、不義の奴等の見せしめに、踏殺さうではあるまいか」「なる程是は能い慰、切つては刀の秘ゆゑ、踏殺さうとは思ひつき、いで我々がト立上るを由良之助が押しとどめ」「これはしたり、各方、那やうな人非人は對面するも目の穢、酒も入用ないというて、速々追ひ躡るべしト言ひつゝ、更に取合はねば、

彼軍兵衛も詮方なく、すこくとして立去りける。

此一段は義士等音川家に御預けの砌、織部矢兵衛が物語りしを、折内何某が聞きしとあるを其儘此所に記せしなり。

第三十四回

昔の人の言へる事あり、命は天にあるにあらず、只其人に在りといふ、是汝に出でて汝に還るものなり、世に憐むべきは庸醫の爲に、癡人はかけがへのなき命をあやまつ、うまく騙しに乘るゆゑなり、豈おそれざらんや、無學文盲にして故人の法術の論も知らず、只權威の勢に乗じて薬品の能毒は辨へず、身上の配劑を事として病人をあやまつ、されども與へる薬驗ありて全快なすも少からず、これ竹束の鐵砲玉、横ぞツ方のまぐれ當り、思はず手柄をなすあり、これを過の高名といふ、古人理を責めて其法を立て、五味十味の調合は、おのゝ薬種の功あるを互に持合して、其病に的中するの加減なり、しかるを我儘に、瘧にあたらば此一味は除くべし、瘧が痛くば加ふべしと、其調合を入替へてと、己が質屋の上下を、薬に迄も用ゐるは、其功能の薄きに似たり、譬へば大根も煮て喰ふ時はその味甘く、おろして生で喰へばその味辛し、薬種も是に異ならず、毒薬變じて薬となるは稀にもあること難かるべし、薬を以て病をあやまつ、薬違はいと多からん、權威を旨として長棒に乗廻り、奥界の給金も辨當代で差引く勘定、匂袋で病人の汚を除くと不禮をしらぬえせ庸醫に、かならず騙され欺かれな、陰にいふ、藪醫者が猫を盗んだ様だといふ、薬當さへ持たされず、ふな懐へ押込んで、足をはかりに駈歩行、貧醫にかな

らす良醫もあらん、いのちが惜しくば斯いふ人をもとめて薬を賣ふにしかず、されども是を一體に、子定規をいふは不可なり、こゝに鎌倉本庄の金澤町に大醫あり、表は僕の部屋と物置の中を隔て、長家門、玄關は破風造り、大紗綾形の腰張も、あたりを輝く立派のかゝり、「主劑調合四ツ時限り、遠方の病人預り不申候」斯いふ張札、腰掛へ是見よがしに張出したるは、高野師直が抱醫者、浮具野蝶庵とて、其頃名高き藪醫者なり、取次の若黨が敷居を隔て手をつかへ、「只今青山邊の者さうにござりますが、當人は同道はいたしませんねど、容體を申上げ、お薬を下さりますなら、當人を召連れ参りますが、お目通りいたして委しく申上げたといふ事でござります」幸薬取も間になつた、爰へ通しやれ「ハイかしこまりました、ア、コレ青山のお方、こちらへお通り被成ました」願れば、町人體には見ゆれども、羽織小袖も相應の身のまはり、敷居越に手を突き頭をさげる「貴様が青山の御仁かな」「はじめまして御目通り仕りました、私は青山邊のものでござりますが、私親類どもの柙を請人に立てまして、本町の薬種店へ奉公につかはし置きました所が、何か逆上とみえまして、ごんじも寄らぬ事を口走り、御療治で本服いたしますことなら、御薬を頂戴いたし度うぞんじます、勿論當人は同道いたしますが、なるほど遠方からござつた事ゆゑ、見て薬を進ませうが、全體殊の外に病用が多く、新規の病人は断ります、しかし此方へお出さへなされば、療治はして進めますが、爰にはじめてのお方には、お耳へ入れて置く事がござるテ、しかし醫者と經節許は、つかつて見ねば甘味がしれねど、逆上一道亂心疴症は實は得手もので、此方より望んで療治して御迷惑でも直して進めたいが、潮來節の文句に、醫者の藥禮と深山の櫻、取りにやゆかれずさき次第、なぞといふは人武天皇の時代、當時一貼何ほど、一ト回り何程と極めて置き、前

錢にはおよびませぬ、代はお戻りと申しては引張りものめけど、病人によつて薬種も高價物も遣はねばならぬ故、薬代からして極めて置かねばいたしにくいテ、夫でも病家が多いゆゑ、調合を仕まひ、晝から出ても、毎日夜更けて歸る故、そねむ族は拙者の事を、病家為だなどといふには困るテ、それさへに御承知なら、その義は少しもいとひませぬ、全快さへいたせば前金にさし上げます、私方の病人は、兎角眞珠の代を下さりませと申すが口癖でござります、
 「ハテ珍らしい病症だ、病症にも種々あつて、宵の病症夜中の病症、びやう症かなひませぬ目盲の療治につかう、エ、是非眞珠の虫のせいであらう」
 「夫は獅子身中の虫と申すお洒落でござりますか、ハ、ハ、ハ、これは兎相とは此事でござる、一回薬代金五兩でござるがどうでござらう」
 「モ些高直でも宜しうござります、しからば六兩」
 「モウ些めしまし、あまりお安うござります、私の方から七兩さし出させう、左様なら明日當人を同道いたしまして手附の薬代金五兩さし上げませう、ト直段をきめて蝶庵に挨拶し、彼町人は歸り行く、
 「扱々欲氣はみぢんもない病家だ、斯いふ事がなければ常に吞みたふされた埋草がない、ハテ翌日は手附の金五兩、ハテ五兩筋違がなければよいがトをりから床の間の九ツの時計、チャン／＼、此浮具野蝶庵といへるは元來播州赤穂の産にて、鹽谷家の重役翁九大夫が弟なり、壯年ころ身持放埒にて、君の勘氣を蒙り、國を追はれ、鎌倉に來り醫者となり、屋敷替、地面の質買、聲養子嫁入の媒人して世を渡れども、表は醫者の事なれば、古主判官の敵師直にとり入り、さまざまにこびへつらひ、師直が權威にて出入屋敷多く、此金澤町に家作して威勢をふるふ身となりければ、居間には讀めぬ唐本を積み置き、得知れぬ奇物をならべ置けども、方陣といふは家相の事と思ひ、仲景とは扇の異名、時珍といふは五七の雨に四ツ日照と

いふ歌を詠みし人とおもふ、本草綱目とは加古川本藏は盲目の人かと思へり、ヒをもちし難有さに下手人に出る苦勞もなし、罪は子卸同前なれど、只世の中を壁にして、口先ばかりで病人を騙込むこそ危けれ、かくて青山の町人は、蝶庵が貪慾なるを豫て承知のうへなるにや、翌日病人を連れて來ると、熟々渠を吞込ませ、其次の日に本町にて一番大い薬種屋へ趣き、蝶庵の偽手紙をさし出しながら、町人「其手紙の品が急に入用だから、私と同道に見世のお人に持たして贈越してお呉んなせト、言はれて薬種屋の亭主はその手紙を讀下し、
 「へ、エ、眞珠が御入用と見えますな、極高品をとござりますから、宿に有合せます所を、種々取交せまして御覽に入れませう、町人「兎も角も急に欲しいといふ事で、私と同道に持つて來て貰へと言はれました、
 「へい、只今直に御同道いたさせませうト言ひながら、店の者を呼びて其由を言ひ聞かせ、土藏より眞珠を取出さすれば、店の若者は身仕度して、
 「是は大にお待たせまうしました、浮具野さまと被仰るのは、たしか金澤町でござりますネ、町人「角の長屋門の内サト言ひつ、二人は連立ちて、蝶庵の家にいたれば、那町人は玄關にて眞珠を請取り、其儘奥へいたりしが、姑くして出來り、町人「今あいにく御用多で少し手取取れませ、爰にひかへてござれ、今に沙汰が有らう、マア一ふくト自分も火鉢の傍に座しけるが、やがて彼町人は手水場へ入りたり、この日は折悪しく薬取、病人ともに多く、入替り立ちかはり蝶庵の前に出で薬を貰ひ、や、有つて彼青山の町人が同道せし若者の番に當りければ、侍が案内して調合場へ通しける、
 「おまへは本町の薬種屋ひしこや久兵衛どの、若衆か、
 「左様でござります、
 「そんならずウ引と爰へ來給へ、脈體を見て進ませうトいへば、
 「へい、私は病人ではござりませぬ、只今さし上げました眞珠がお氣に入りましたなら、代金がいたゞき度うぞんじますトいへば蝶庵うちう

なづき「承知く、それは承知だ、それが病症だ、兎も角も爰へ「御承知ならよろしうござります、これにひかへまして居りませう」「ハテサテ困つたものだ、何れにも薬を進せるには容體を見ねばならぬト玄關の方へ向ひ、小彌太く「取次の侍を呼び「此本町の若衆の同道した青山の仁は何様した、早く爰へ来さつしやいといはぬか」「へい、只今手水場から出られて表へ行かれました」「ハテ困つたものだ」「私も遠方でござります、眞珠の代を願ひます」「これはしたり、其病症は承知だト少しじれ込み「貴様を同道した男は、貴様の親類で奉公の請人ではないか、昨日此方へ見えて、だんく病氣のおもむきを咄し、今日連れて参る間、療治して呉れと頼まれた、其眞珠の代くといふが全體病症だといふ事だ、情を強くせずとも爰へ寄つて、容體をとくと見て、薬を加減して進せるから」「私は青山に親類はござりませぬ、只今はまだ御同道なされたは、此御方の御使ではござりませぬか」「ハテ扱埒もない逆上の症といふものは聞分がないに困る、氣違ほど取りあつかひにくいものはないといへば藥種屋の若者腹を立て「氣違とは私の事でござりますか、眞珠の代さへ下されば氣違取扱には及びませぬ、代金を下さりませ」「貴さまは氣の遣はぬつもりでも、眞珠の代を取らうといふが病で、それが逆上だ」「イ、エ、あなたが逆上なされたのでござります、高金の品お取りなされて、其代金を下されと申せば、夫が病症だくと金子もお渡しなされず、どうなさる思召でござります、お氣に入りますば眞珠をお返し被下りまし、時刻が遅くなりましては、親方の手前も宜しくござりませぬといへば蝶庵むつとして「言はせて置けばはての知れぬたはこと、此蝶庵は其方から眞珠をなに買ふものか、譬へ氣違なればとて、外病人も来て居ること、外間かたへ迷惑だ、こんな氣違は追返して仕まへ、畢竟金五兩

前金を出して療治を頼むといふゆゑ、直して遣はさうと言つたのみだ、其上ならず頼んだ當人は知らぬ人だなどと、馬鹿くしい、またあの町人も町人だ、何所へ行きをつたらう」「さやうでござります、仕度にも参りましたかしれません」「夫はあなた方の御勝手のお咄は後になさりまして、眞珠なり金子なりとも早く否やお取極め下さりませ」「それは貴さまの病氣だ、夫を直して遣らうといふのだ」「是はおまへさまは私をお証かしなされますか、今朝見世まで御文通がござりましたト懐より蝶庵の手紙をとり出し「これを御覽下さりませ、あなたの御名前、私方店の名當に相違はござりませぬ、眞珠も極上品廿五六双より三十双位、勿論別に伊勢眞珠と紀州と御覽に入れました、其眞珠を爰へお出しなされて、御覽なさればわかりませうト差出す手紙は元來無筆の蝶庵も、半は信じ、なかばは疑ひ、もしや彼町人が騙騙なんぞか、ハテ合點の行かぬと思へば、ひしこや久兵衛が若い者は、逆上の病人ならぬ言葉のはしく、手をこまぬきて吐息つき、呆れはてたるばかりなり、これより蝶庵は藥種屋の若者と互に事の始末をかたりしに、彼青山の町人といひしは蝶庵の名をかり、偽手紙を持ちて本町のひしこや久兵衛といふ藥種屋を賺奪り、代金三十兩餘の眞珠を變詐取りて、その後難を蝶庵に托けしなり、斯てあるべき事ならねば、藥種屋の方にては、蝶庵の手紙をもつて公廳に訴出でんとさびしき掛合止まざりければ、從來蝶庵は身に舊悪あれば、大に迷惑して内分の扱となり、見もせぬ眞珠の價を濟しけれども、此事自然と世の風聞となりけるとぞ、却説片岡傳五右衛門は、説法洲の住居にて眼病を煩ひ、既に療治もかなはざるを、原元辰（郷右衛門が變名なり）の方へ下部元助多く得難き眞珠を持ち行きて療治をたのみければ、漸に病全快せんとす、元助は傳五右衛門病中國元より尋ね來り、看病おこたらず實義を盡せしに、中途にして妻

子並に下部元助、傳五右衛門方へ尋ね來りしかば、家僕元助二個になり、傳五右衛門の看病せし元助は、一通の書置を残してかき消すごとく失せにけり、其文の寫し省略左の如し、

是迄假に元助と姿を現し、貴殿之看病致し候へども、此度國元より家内の者元助を召連れ到着被致候に付、最早貴殿の介抱も是迄與存候。眼病も追々全快と相見え候へども、此上加養專一之事に存候、元辰方に眞珠澤山預け置候間、心配なく服藥可被成候、先達而中風間有之候。〇庵と申候者は〇野九太夫弟九十郎にて古主之恩義をも不顧、敵地へ内通之者に候間、通力を以て天〇を蒙らす者に候へども、藥種屋久兵衛を騙詐眞珠多く賺奪、貴殿服藥に相用候、併盜泉之水之汚にも相成間敷間、猶本望之時に臨み候はゞ、乍陰助力致遣し可申候。

殿

青山 〇 田

助

傳五右衛門夫婦をはじめ、下部元助もこれを見て、或は驚き或は憐み、默然として辭を潰し、さては是まで元助と思ひしは、主君の別館なる稻荷明神の、われ〇が眞意を憐み給ふ神慮のあり難き事、心魂に徹して勿體なしと、數更の落涙とゞめあへず、是より後全快して事の顛末を、主君の後室葉仙院に告げ

しかば、その神徳を尊み給ひける、其後義士の面々本望を遂げしかば、猶神慮の驗等聞ならずとて、正一位元助稻荷大明神と今に彼地に崇め祠りて、里人の口碑に残りしとぞ、元助稻荷の置手紙は、某とかいふ里正の家に今に傳へてありとなん聞えし。

亦曰く、此片岡は元鎌倉の定府なりしが、兇變の後國元に住居、再度鎌倉へ出でしなり、但し些の間なれどもいろ〇薄命つゞきて、如斯事もありしとなり。(卷の十七終)

正史 實傳 いろは文庫 卷之十八

第三十五回

今此章にしるせしは、諸書の中より實事なるべく思ふ事と、自筆の類をうつし出でたれば、娘御方には心
にかなはぬ様にもあるべきなれど、凡むかしの物語は、其世の體を深く考へ推量りてこそ、面白しと思ふ
條下はありぬべし、但し作物語ならねば、心なく讀み給ふ人々にはいかならん、夫兵書に云ふ、人に靈あ
り、生涯善を守り、死に臨んで屈せず、正道順路なるを神靈といふ、生ある中に人を救ひ、人を立て、仁
義を守り、死に臨みても道をはげむ、魂魄残つて人をすくふ、號けて神靈といふ、大星由良之助は祭りたら
ば一社の神靈ともなりぬべし、六十餘州誰か此人を尊まざらん、只おろそかに見過し給はで、忠貞仁心の
深さを思ひやりて、其身の鑑となしたまへ、

鳥の跡をうつす筆さへ恥かしくむかしはかゝる人もありやと

狂 訓 亭

つぎに寫し出せるは、復仇の後に、京都紫野大徳寺の瑞光院の使僧へ遣はしたる返書にて、大星氏の自
筆なり、

兎に角に思ひははる、身の上にはしまよひの雲とてもなし

這は婦女達の看てよろこぶ類にあらねど、凡義士の筆の跡は些に書残せし反古までもなつかしく、其とき

の事をも思ひやらる、所爲ならずや、

花の雲空も名残になりけり

大星 良雄

世の中は春の炬燵の心かな

同 良 金

これも辭世にてありけるか、

二百里や我園句ふ菊の酒

木 村 貞 行

また蟻蜂録といふ書に、

大星の辭世

水にうつる花を藻くづに浮きかへて匂ばかりを庭の梅が枝

今ははやことの葉草もなかりけり何の爲とて露むすぶらん

同書に一説あり、義黨の爲には此書にうつし出すも心よからぬ事なれど、

亦主君たる人の臣下に情なく非道なるは、家國を亡し子孫の絶ゆる事、

和漢にその例は少からず、鹽谷家の滅亡も、深き怨念の所爲なりとい

ふ、夫は大丈夫魂の人はあざけり笑ふべき事に似たれど、無失の罪なん

どに情なき死を遂げなば、怨念の残りて祟をせまじきものにはあらじ、

主君の威光と上に立ちたる人の勢に募りて、臣下を恥かしめ、下々を

情なくするは、頓て其身も家國も亡びたまふものと、用心あり度事をか

し、亦上に立ちたまふ人は、常に下々を恵みあはれみ給ふが、何よりの難

いろは文庫 卷之十八

有きものなり、然れども下々はいと愚に、理にくらきものにて、不便なるものどもなりと思ひたまはねば、腹立たる、事のみ多かるべし、夫を奈何といへば、愚なるもの、癖として、恩を仇にて報じ、慈悲を不足に根み、利欲に果なき輩多ければ、仁心ある君も愛想を盡かし給うて、忽地恵を止めて刑罰を烈しくせらるゝものなり、俗も鹽谷判官には、臣下を憐み民を恵ませられしかど、高貞より三代以前の君の御時に、不慮の誤にて、清直の家臣を非道に刑罰に行ひたまひし事ありけり。(是より蟻蜂録) ○こゝに鹽谷判官正の時代に、最律義なる家臣ありて、金奉行を勤めありけるが、或時金藏に盗賊入りて、千兩箱一ツ失せたりしかば、種々に詮議せらるれども一向に知れず、是に依つて金奉行の不念より發りし事なりと、厳しく重役をもつて御咎ありければ、彼者の返答に、拙者が預りし役儀なれば則我等が盗人なりと申しければ、その通りを稻目正に申上ぐれば、大いに怒り給ひ、以ての外返答不届至極なり、さだめし彼が盗みし覺えがあるゆゑに、左様の大膽を申すならめ、急度刑法に行へとて、遂に其役人を盗人に定められたり、然れども其人は些も知らざる事にて、只盗まれたるを越度とこそ觀念をしたれ、誠の誤を恥ぢて、盗人に等しき不念なりと答へしを、不法の様に聞きとらせられ、猶惜みて盗賊の當人と極めらるゝ事、士道の恥辱、豈口惜しと思ふ怨念の祟をなさであるべきや、俗も城下の馬場へ彼人を引出し、柳の大木に縛り付けて面をさらし、家中の人々町人百姓に見せて、盗人よ盗賊よと大勢に罵り誇らせ恥を與へ、其後一日に指を一本づつ、切捨てさせ、手足の指を廿日の間に切落させたり、如斯なれば國中ごとく此人を盗賊の大罪人と思はぬ者もなし、嗚呼此士の薄命といふも餘あり、いかなる前世の宿業にて、此災難に悪名を流し、日毎の苦痛をせし事ぞ、是に連添ひし妻子親族の悲恥かしさと悔しさを譬へる物もなかるべし、

此時にいたつて彼士は、血ばしる眼をいからして齒を喰ひしはばり、我役儀に付いての鹿略と咎めあらば是非なけれど、盗賊と定められて此刑罰に行はるゝ事心外なり、金を盗みし者は外にあるべし、頓て我明白なることを知らせんぞ、武士に悪名を究めしは、無念骨髄に入つて忘るゝ事あるまじ、見よや我はかならず當家の怨敵となり、鹽谷の家名を絶やさすに置くべきか、思知らするぞ思ひ知れと、罵り狂ひて息絶えけるを、見る人は身の毛立ちてふるひをのき、怖れぬものはなかりしが、夫より後に雨の夜の陰となる折からは、青々たる色の火の燃上がり、馬場の東西を飛びめぐり、苦しげに腹立ちしと思はるゝ聲にて、まだ潰れぬかまだ亡びぬか、頓て絶果てるぞ、見よや、見よやといふかと思へば、しわがれたる聲にてからりと笑ふ怖しき、心付かすして通りかゝりたる者、逃げながら怖々振りかへり見れば、手足の指先より血を流し、鬼火の光物すごく、怖しげなる顔のありくと近付けば、正體を失ひし者も多かりしとぞ、夫より慈悲ある人の不便に思はれ、幽霊の法事を修行せしが、其故にや怨靈の沙汰も漸に止みけるが、其士の無失の罪に行はれしより三十三年目に當りて、同じ月日に鹽谷家は滅亡に及びしといふ。這は花岳寺の方丈の因果ものがたりにせられしと蟻蜂録の説なり、まことに武士の深き怨念は然もありけるにや、すさまじくも怖しき事なりけり。

第三十六回

今爰に説く物語は、判官在世の事なりしが、本國より鎌倉へ在番の諸士の多かる中に、森湖平太といふものあり、折しも彌生の上旬とて、四方の櫻も時知り顔にほころび初めて、春風の身にほか／＼と來る頃は

人の心も自ら浮立つ中にわきてなほ、此ほどよりして長世の観音開帳として群集の参詣、湖平太は園元より近き頃来し者にて、鎌倉の繁華珍らしければ、勤仕の隙を見合せて、草履取一個を召連れ、先觀音に参詣せんと途中まで出かゝりしが、ふと同役へ申し置くべき大切の用を思出しければ、矢立を取出し鼻紙に委細を認め、供の男を呼び近づけて「コレ、そなたは大儀ながら此手紙を持つて、一ト走りお屋敷へ歸り、大鷲氏へ慥に届けて呉りやれ、ツイ出がけに差急いで肝要の事を失念いたしました」供「へい左様ならば此お手紙を大鷲さまへさし上げますれば、何ぞ御返事でも」湖「イヤ〜返事を聞くにはおよばぬ、さし置いて直に來やれ」供「へい〜、夫では貴公さまは此茶店にでも被爲入りますか」湖「ナニそろ〜と往つて見やう、先達で鴨野氏と同道で参つたから、大かた道も覚えて居るゆゑ、徐かに歩行て居るうちには、そなたが追付いて來るであらう、若夫ともに途で逢はずば、觀音堂で待合さうと言ふを聞捨て供人は、元來し方へと走り行く、是より湖平太は只一個、繁華の土地に馴れざるゆゑ、群集の人を左處へ除け、右處へ除けつゝ、行くうちも、豫て簡様な場所にては、懷中物に氣を付けよと朋輩どもがをしへしまゝ、只兩腰と懷中に心を付けつゝ、往くほどに、急がぬ道もいつとなく、長谷の地内にいたりし折しも、年頃四十ばかりにて、木綿廣袖に五分月代、一癖あるべき大男、酒の機嫌か道幅も狭しと歩むちどり足、夫と見るより片胸へ除けんと爲たる湖平太を、田舎武士とや侮りけん、態と先より行當り」大男「イヤ二本坊めへ、此廣い大道を明盲ぢやアあるめへし、何で此身に突當りやアがツたト喧嘩負はうに出かけられ、湖平太も忿然とせしが、素より溫和の生得ゆゑ」湖「イヤナニ態と爲たではなし、まことに互の出合がしら、行當つたは此身の鹿相、氣に障つたら許して呉りやれ」大男「ナニ鹿相だと面白へ、盜賊を爲ても鹿相とさへ言やア事が濟むかい、今突當つ

たとき、此身の懷へ手を入れやうと爲たのを見て置いたぞ、其二腰は人おどし、武士と見せかけて汝ア我爲をばたらくなト言はれて湖平太面色變り、おのれ慮外と刀の柄に手を掛けんと爲たりしが、イヤ〜簡様な無法者、手にかれたりとて詮ない事、そのうへ殿のお名前まで出る事なればと思案を直し「ハ、ハ、こりやそなたには酒が過ぎたな、餘ほど機嫌と見えるはイ、何事も此身があやまり、往來中ゆる人も立つ、最う宜い程に了簡爲やれト内端に言ふ程つけあがり」大男「ナニ、酒が過ぎた、大きにお世話だ、此身が錢で呑む酒に汝が差圖を受けるものか、ヤイ何だ其面ア、なんぞと言ふと刀の柄アひねくりまはして、人見掛にさす腰の物なら、大かた中は竹籠だらう、この近邊で名のうれた樽甫頭の強入さまが、腰の物がおそろしさに仕掛けた出入を止めたと言つちやア、仲間の奴等に面が立たねへ、四の五の言ふにやア及ばねへから、見せかけに差す大小も、羽織も袴も其所へ脱ぎ、盜賊の正體をあらはして、平踰踏つたら許して遣らう、斯言はれるのが口惜しかア、砍るとも突くとも勝手に爲る、強入さまの御尊體に、汝等が刀が立つものかト言ひつゝ、毛尻を引んまくり、湖平太が目の前へさしつけられて、堪忍も最う是までと、刀の鏢元くつろげて、既に抜かんとせし折しも、物見高なる群集の人々、相手は武士今一個は、名に聞えたる悪者ゆゑ、このをさまりは如何ならんと、皆手に汗を握りつゝ、後びさりするばかりにて、止めんとする者もなき、其人立の後より「アレマア待つてト言ひながら、夥の人を押分けへしわけ、現はれ出でたる一個の處女、湖平太の手に取りすがり」姫「お腹の立つは御道理でございますが、わちきがお詫をいたしますから何卒御了簡なすツてト言ふを強八聞きあへず」強「誰だと思やアお民だな、汝が構つた事ぢやアねへ、入らざる世話だ其所放せ」むすめ「エ、マアお前もめつさうな、お武士さまにそんな事を言つて濟むものかネ」強「濟むも濟まねへ

も入るもんか、コレよく聞けヨ、昨夜も間をわらく打つたくれ、素廣袖一枚で寒さア寒し、隨身門前で五
ンつく飲めたほろ酔機嫌、手前の店へ寄つて、何ぞ元手になる物でもいたぶり出さうと思つたら、母公はか
りて手前は居すヨ、歸るのを待つて居たら、又母公がお定まりのお談義もうるせへと胸くそを悪く踏る道、
此二本坊が突つか、つたから、出入をはじめて居る所を、汝に邪魔アされてなるものか、何でも盗賊に違へ
ねへ、泥坊だ泥坊だト喚き立つるをおししづめ、民「アレサ伯父さん、お前はマアそんな悪い心に何時おなり
だ、此方が御了簡深ければこそ濟むやうなもの、那お刀がお前の目にはか、らないのかへ、強「痴婦めへ、
竹箆で人の骸が研れるものかい、何でも懐へ手を入れられた譯をつけねへちやア了簡されねへ、民「アレモ
ウお前も強情だネエト言ひながら、髪にさしたる後さしの簪を抜いて、民「お前もさう言ひだしちやア只
はお歸りでもあるまいが、元はと言へば私の店へ無心においでのが、出来ないからの腹立で、斯いふ事にな
つたのだから、其元手とやらを逃げたいけれども、今爰には持合がないから、是をどうとも宜いやうに
して、速く何處ぞへ往つてお呉れト言はれて強八つくくんと、思つて見れば此出入、言募つて見た處が、あ
んまり物にも成りさうもなく、品に仍つては抜きかねぬ那武士が顔色に、口は立派に叩けども、心に五分の
恐怖をいだけば、お民が言葉を幸に、宜い退しほとおもふにぞ、一本の簪でも取らぬは損と手に受けつ
つ、ちよいと目方を引いて見ながら、強「さつぱりふめねへ代物だが、手前があんまり氣を揉むから、此場は
是で済して遣るぞ、命冥加な盗賊めトへらす口を利きながら、人立の中を潜抜け、はやくも影を隠しける、
お民は跡を見おくりながら、湖平太の前に小腰をかゞめ、民「無貴公は憎い奴とお腹立でございましてらう
に、御了簡なすつて下さいまして、寔に最うありがたうございませう、お禮をさうし上げたいたいにも、こゝは途

中で人立もあり、私の店は此少し先でございませうから、鳥渡お寄んなすつて下さいました言ひつゝ、わりなく
伴ふにぞ、湖平太も否みかねて、後につきつゝ、行く程に、爰に群集の人々が、▲「コウ、あの武士も餘ほど氣
の宜い男ちやアねへか、此身だと先の野郎を無口で歸しやア爲ねへけれども、■「ナニあれが眞正の武士サ、
今あすこで抜いて見なせへ、縦令祈得になるまでも、あんまり興めた咄ではねへはネ、其所をおとなしく
濟した所は、餘程落付いたものサ、●「併し那處へ那娘が出ねへとむづかしい處だせ、▲「違ねへ、此身ア武
士より處女の方が肝心だ、年はやうく十六ばかりだが、容貌と言ひ取りまはしといひ、随分那なら情人に
もつて遣られるの、●「へんお前は遣る氣でも、其顔色ちやア向で眞平だトヨ、▲「おきやアがれハ、ハ、ト
キニ那娘が武士を店へ連れて往つて何様するだらう、何だか氣になるせ、■「ナニ其譯は七編に委しく出す
といふ事だから、出たらば速く借りて見なせへ、直に譯がわかりやすト噂たらしく西東、おのがまに
別れける。

(卷の十八終)